

列みゐる一同思はず手を拍つて歡呼の聲を上げた。山上山下鑛場の彼方此方から拍手の音が聞える、身を挺して櫓に近づけば、噴き出づる油は轟々と地響きして、落ち下る油は夕立のやうに降りかゝる。

立ち上ること約十分、最高二十餘間に達してからは、又次第に下つて、雲霧は黄龍となり、波の花となり蝟の脚となり、赤犬の頭となつて、はては跡もなく滑えて了ふ。消え了つて十分と経たぬ中に、又そろ／＼と上りかけて、且つ下り且つ上る。二度目は前にもまして勢猛に其の響も物々しい。大抵は二回にして終るさうなが、之で噴出する油の量は約二十石、時價にして三百圓位といふ。皆が皆まで逃げもしまいが、二十石皆流したとて、三百圓は歓迎費として安いものだ、小松君は左も得意げに元氣よく笑つた。

此の井戸出来て以來、最も多い時一日に四百十二石を出し、少い時で三百十四石取れた。先月二十三日のことゝか 一度油の噴き上つた時、どうした拍子か之に火がついて炎々と燃え上り、さながら火柱の立つやうに、四時間半燃えつゞけた其の火先が柏崎から見たと云ふ、初から火氣を絶つてはゐるが、其れ以來、人夫も危ながつて、今日井戸口を開けるにも危険だとして、大分反對があつたと、小松君が語つた。

噴油が終ると、雨の霽れ間を待ちかねたやうに、蓑を被り蓆をかざした人夫が續々歸つて来る。其の中には頬被りした若い女が柄の長い柄杓をもつて、ともすれば他所に流れんとする油を汲んでゐるのがある。頬被の隙から、白い顔がちら／＼と見える。油を汲む女にも、風村雨はあらうが、油を賣りに來た東京の記者團の中に、業平卿のありやなしやは、先づは言はぬが花か。

導かれて一同は山路にかゝる。

——大正二年五月稿——

杉村廣太郎氏は楚人冠と號し、東京朝日新聞記者として廣く天下に知られた人です。石油は地質學上主に石炭紀層及び第三紀層中に現存してゐます。アメリカ合衆國東部の石炭は何れも石炭紀層中から湧出し、ロシアのバク地方、日本南洋諸島及ドカリフォルニア等の石油は第三紀層から産出してゐます。石油を採集するには井戸水を汲取ると同様に井を穿たなければなりません。其の方法を大別しますと、手掘法及び機械掘法の二つでありまして、後者は衝擊鑿井法及び廻轉鑿井法に分たれ、衝擊鑿井法は上總掘及びアメリカ式に分たれて

ゐます。手掘法は水井戸を掘ると同様です。先づ油井の位置を卜して、地表に方六尺の竪坑を掘下け、坑の側面に木杵を入れて周邊の土砂の崩壊を防がなければなりません。掘進するに従つて、坑夫の窒息する虞があるから人為換氣法を行ひます。之を爲すには、越後地方の方言「タタラ」なる輪を使用します。此の輪は坑側にあつて長さ八尺幅三尺深さ二尺の木箱です。中央に平欄があり、其の上に一板があつて箱の蓋となつてゐます。板端の下には方三寸の小瓣があり、瓣は上に開いて下に閉ぢてゐます。輪の兩側から坑内に方八寸の繩を通じ、坑底に達してゐます。坑夫は板の一端に上つて之を壓し、更に一端に疾跳します。交互疾跳の結果、空氣は次第に坑内に送入されます。坑内の一側に梯子を備へ、坑夫の昇降に便にしてあります。鑿井が進み、油層に近くなりますと、徑四吋長さ十呎餘の鍛鐵管を嵌入します。井戸口から高さ十尺の所には、徑一尺許りの木滑車を設け、索條を懸け杵を垂れます。井戸の中の土砂は此の杵に盛つて坑内に運び出されます。鑿井が成功して坑油を見ますと、それを桶で汲上げます。上總掘は普通掘抜井戸を掘鑿する方法と同じです。竹杆又は鐵杆の先端に鐵錐を附け、地底を衝鑿しつゝ掘り進みます。鐵錐を衝鑿するには坑夫の手に依りませんが、丸竹の弾力を利用して其の力を省くやうに仕掛けてあります。上總掘及び手掘は費用

を要することが少ないのですが、堅磐に遇ふと掘進することが出来ません。又水止が困難で且つアメリカ式鑿井法のやうに、深く掘進することが出来ません。アメリカ式鑿井法は、重量の大なる鐵杆の先端に鐵錐を附し、地盤を衝鑿しながら、掘進するに従つて鐵管を挿入して以て油層に達せしめるやうに仕掛けてあります。坑井を掘進するには腕木の一端に鑿井用具を懸垂して、蒸氣機關の動力に依つて大車輪を廻轉し、腕木に上下動を起させ、鑿井錐をして地下を衝撃せしめ、順次に掘進するやうに仕掛けてあります。坑井内の土砂を地上に運び出すには砂唧筒を用ひます。砂唧筒は樓上の小滑車に懸かる索によつて上下せられ、又坑井内に鐵管を嵌入するには、天車及び大車輪を用ひます。鑿井が成功して油層に達しますと石油が噴出します。時には強大な壓力で樓上に噴油することもありますが、通例は鐵管内に溜ります。油井の深さは通常千尺内外で、最も深いものは三千七百尺に達します。此の教材は其の鑿井油川の噴出の光景を見るが儘に描き出してゐます。

「一行の乗つた列車は、やがて西山停車場に着いた、油田は停車場から三四丁、一同は勢揃ひして其の方へと出かけた、云々」

此段は全篇に對して序説の形で、噴油の光景を見物に行く迄の有様を叙してあります。教

材には省かれて居ますが原文を見ますと、案内者は寶田石油の鑿井技師小松徳太郎氏で、「案内の人の語るを聞けば云々」は同氏の説明になつてゐます。こゝら原文には

「一行の列車が西山停車場へ着くと、大勢の出迎への中に、懐しや小松徳太郎君が見える。ニコ／＼と僕の方を向つて笑つてゐる。小松君は「寶田」の鑿井技師で、去年も一昨年も、新津で逢つて、油井の案内も頼めば油井の講釋も聞いて、時には一つになつて飲んだこともある。去年から此の西山へ轉地したのださうで、油田は停車場から三四丁、一同は勢揃ひして出掛けた云々」

とあります。教材にはそこらを一切省略して、單に案内の人としてありますから、幾分不明瞭の感がないでもありませんが、そこらは適宜附説して教材を活して取扱ふ工夫が欲しいものです。

西山は越後鐵道の一驛で、長岡の西北里餘のところであり、東山新津などと共に有名な油田の所在地です。

「時計を見ると、三時少しまはつてゐる、云々」

此の段は筆者の思出と其の感想です。物凄い噴油の有様を想像したり、まだ見ぬ壯觀に憧

がれたりして、聽て來たらんとする噴油の光景を呼起す枕としてゐます。「何だか楽しみなやうな心配なやうな気がして、微か胸の打騒ぐを覺えた」に筆者の氣持が付度されませう。

「忽ち「それ出た」と誰やらの呼はる聲が聞えた。ちやうど途中で、井戸櫓を建てるところ、それから井戸を掘るところ、掘終つていよいよ汲出すところなど、云々」

これからいよいよ其の噴油の有様です。突如「それ出た」に筆を起して、先づ讀者の興味を唆つてゐます。斯うして噴油の光景に移つて「赤犬の大きなのが、頭を振りながら何物かにざれ狂ふやうにうごめいてゐるのが見える」と言ひ「赤ちやけた大蝸が頭をのべ脚をもがいて。よろ／＼と飛上りかけては落ちる」と言ひ、それが落ちてまた上る毎に、一尺、二尺、一間、二間と、だん／＼高くなつて行く」と言つた邊りは、眞に光景目睹です。殊に後半の「油はだん／＼に落ちては高まり、落ちては高まる、其の邊に立働いてゐた人夫は、手に／＼菰をかぶり笠をかざして、右往左往に迷惑ふ」と言ひ「一天俄にかき曇つて、沛然として驟雨の將に至らんとするとき、先づほたり／＼と大粒の雨が先驅となつて落ちて來たときの光景を思はせる」と言つた邊りの叙述の巧妙さは何とも言へません。

「且落ち且上る」に、赤犬の頭が蝸の脚のやうになり、云々」

此段は前段を受けていよく其の壯觀さで、湧出した油が高く噴出する有様を見るやうに描き出してゐます。「赤犬の頭が蝸の脚のやうになり、云々」といひ、「古い草雙紙の繪などにある波の花のやうに、云々」と言ひ、「黄龍の天に昇るが如く」と言ひ、「末は雲の如く霧の如く」と言ひ、「落下る油は夕立のやうに降りかゝる」と言ひ、巧妙な譬喩で其の光景を描き出した邊りは流石です。此の文は全篇譬喩が能く利けてゐて、巧な形容によつて光景目睹の感を興へた所に、言ふに言へない味があります。

「噴上ること約十分、最高二十餘間に達してからは、又次第に下つて、云々」

此の段も矢張噴油の壯觀さで、「噴上ること約十分、最高二十餘間」に其の壯觀さが想像されませう。こゝら原文では、

「立上ること約十分、最高二十餘間に達してからは、又次第に下つて、雲霧は黄龍となり、波の花となり、蝸の脚となり、赤犬の頭となつて、はては跡もなく消えてしまふ。消えてつて十分とたゞぬ中に、又そろ／＼と上りかけて、且下り且上る。二度目は前にもまして勢猛に、其の響も物々しい。大抵は二回にして終るさうだが、これで噴出する油の量は約二十石、時價にして三百圓位と云ふ。皆が皆まで逃げもしまいが、二十石皆流したとて、

三百圓は歓迎費として安いものだ、小松君は左も得意げに元氣よく笑つた。」とあります。

「此の井戸が出来て以來、最も多い時は一日に四百十二石、少い時でも三百十四石取れた云々」

此の段は噴油の量の多いこと、噴油が引火した時の物凄さとを叙してゐます。「一日に四百十二石」と云ふに先づ其の莫大さを想はせ、「火柱の立つたやうに、四時間半燃え續けた」と云ふに其の物凄さを想像させてゐます。

「噴油が終ると、雨のはれ間を待ちかねたやうに、菰をかぶり蓆をかざした人夫が、續々歸つて来る、云々」

此の段は噴油が終つた後の光景で、「菰をかぶり蓆をかざした人夫が、云々」と言ひ、「ほゝかぶりした若い女が、柄の長い柄杓をもつて、云々」と言ひ、噴油後の光景を見るやうです。こゝら原文には、

「噴油が終ると、雨の霽れ間を待ちかねたやうに、菰をかぶり蓆をかざした人夫が續々歸つて来る。其の中には、頬被した若い女が柄の長い柄杓をもつて、ともすれば他所に流れ

んとする油を汲んでゐるのがある。頬彼の隙から、白い顔がちら／＼と見える。油を汲む女にも松風村雨があらうが、油を賣りに來た東京の記者團の中に、業平卿のありやなしやは、先づは言はぬが花か。」

とあります。末段は特に楚人冠らしい筆の冴えを見せてみますが、惜しいかな讀本の文には、そこらがすつかり省かれてゐます。

補充文には同じ筆者の手になつた名著「へちまのかは」の中から、次の「潮の岬」をあげておきませう。「へちまのかは」は大正名著の一つに數へられてゐます。

潮の岬

とかくして、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間に薊・蒲公英が咲いてゐる。背を屈めたやうな磯馴松がぼつり／＼と處々に立つて居て、それに繋かれた牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が、此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲が遠くで聞える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として空中に聳え、左には、無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の

波に洗はれて地骨あらはになつた巖が幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどう／＼と、寄せては返し／＼してゐる。

余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。打開けた太平洋の海面、雲煙淼渺として其の果て何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニアを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて北亞米利加カリフォルニア州のロスアンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が即ち日本と世界との接觸する處なのだから、面白

まづ、此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに、海軍の望樓に至つては、夜となく、日となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては、其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々として、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來たのも無理はない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國とも心得てゐるだらう。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だなど考へながら、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の廿二日、去年は愈々紐育の見物を終へて、明

第九課 旅行先より先輩へ

日大西洋に乗出さうとした日、一昨年は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峡を過ぎて、ケント州の櫻・桃・杏・梨の今を盛と咲亂れた中を走つてみた頃である。

折しも、望樓で頻りに信號旗を揚げる。それとばかり、友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立て、ある望遠鏡の下に座つて、信號旗を上げよ、下げよ、と忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばち／＼とけたまひい音を立て、電信をかけてゐる。今まで静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の「淀」が行く。

第九課 旅行先より先輩へ

巻の二の「人を紹介する手紙」の續き教材です。

人を紹介する手紙

拜啓寒氣漸く相加り候處愈々御清福賀し奉り候きて御存じの田代喜作氏の息喜太郎君並に小生隣家の畑謹一君今回當村青年團より選拔せられ近縣農家副業の實況見學の爲御地に參る事に相成候兩君とも御地は始めてにて全く不案内の上見學につきての便宜も少き由に候へば何分宜しく御願ひ申上候尙兩君には來る十五日早朝當地出發途中大野驛にて下車其の附近一見の上午後同地出發の由に候

へば御地着は多分同日夕刻と存候到着の上は早速御宅へ伺ふはずに候間夜分にて恐縮の至りに候へども何卒御引見なし下されたく候先づは御紹介かた／＼御願ひまで 敬具

年 月 日

豊 田 耕 一 郎

瀬 川 清 之 助 様

座 右

これで見ますと田代・畑の兩青年は青年團から選拔されて、近縣の農家の副業の實況を見學する爲に旅行したのです。手紙の相手豊田耕一郎は兩青年を瀬川清之助に宛て、添書を附けた其の地方の青年指導者で、瀬川は兩青年が視察に出掛ける地方の實業家です。此の手紙は斯うして視察に出掛けた視察地から、色々世話を受けたり紹介の勞を取つたりした先輩の豊田耕一郎に宛て、出した手紙です。こゝらの關係がハッキリしまと、此の紙の取扱も自ら面白く工夫されませう。

もう此の學年位になりますと、實際に役立つやうな教育が必要になつて來ます。此の手紙などもさうで、學校を卒業しましたらこんな場合は屢々起きて來ませう。だから何處迄も村

第九課 旅行先より先輩へ

の青年と言つて考へて指導し、實際生活を基調にして取扱はなければなりません。其處に現實味も出來て來ませうし、讀むにも讀ませるにも大きな意義が生れて來ませう。

紹介の手紙には、田代・畑の兩青年が今度當村の青年團から選抜されて、農家の副業の實況を見學の爲に御地に參ることになつて居ますが、兩名共に御地は初めてで、全く不案内な上に見學に就いても便宜が至つて少ないのですから、何分宜しく御願ひ申上げる。尙來る十五日の早朝に當地を出發して、途中で下車して附近を見學し、午後同地を出發して御地に向ひますから、御地に着くのは多分同日の夕刻だらうと思ひます。到着の上は早速御宅へ伺ふ筈ですから、夜分で洵に恐縮ですがどうか引見下さいますやうに御願ひ申上げると云ふのであります。

こんな紹介狀を持つて、二人の青年は視察に出掛けて、豫定通りに先方に着いて、紹介先の瀬川氏の御厄介になつたのです。さうして色々視察に就いて便宜を與へて貰ひ、尙又態々案内迄して貰つて、視察に少からぬ便宜を得たのであります。二人の青年はそれが非常に嬉しかつたと見えて、旅行先から視察の様子や、紹介された瀬川氏から色々世話を受けたと云ふことを知らせてよこしたのです。「先日出發の際は種々御懇諭をかたじけなうし候のみならず云々」と言ひ、折角多數中より選抜せられたの視察ながら云々」と言ひ、「これも偏に御配慮の賜物と嬉しく存じ奉り候云々」と言ひ、感謝に満ちた兩青年の氣持が手紙の到る所に感上つて居ます。

こんな文は餘り深入りしないで、唯あつさりと取扱つて、此の手紙がどんな場合に書かれたか、又どんな用件が書かれてゐるか、それ等を忖度させるだけで結構です、文題も大人向きで、可成老成た氣持もしますが、もう高等科の子供ですから川語や其の他に大した困難も感じますまい。唯あつさりと讀ませて、其の内容を掴ませることが出來たら、それで十分でありませう。

補充文には村上浪六氏の「初旅」と、樋口一蕪女史の「旅にある友へ」の二つを擧げておきませう。

初 旅

父はなくとも子は育つ。貧に暮せど成長は人に後れず、母が涙の露に潤ひて、枯れもせず潤みもせず、予は既に十六歳、身に纏ふものこそ垢染みて、所々に破れを補ひたれど、人知れず心に織り

第九課 旅行先より先輩へ

たてし綾錦、やはか何物にも劣るべきかと、一郷の青年を眼下に睨みて嘲笑ひしは、當時の子が意氣なり。従つて自然郷里に師友なき心地せらる。

鳥は空の高きに翼を張り、士は都の廣きに志を伸ぶ。睡れる如き片田舎に、もはや一日の空しきを堪へ難く、物々たる氣は既に東京を夢む。されど我が身を顧れば、學を給せらるべき家にあらず。出で、半日の旅費さへ覺束なきのみか、幼少より一方ならぬ憂きが中に育てられ、不肖ながら子としては外に持ち給はぬ一人の母、しかも多年の疲れにや、此の頃俄に老い給へる姿を見つ、争でか遠く遊ばるべき。眼前の飢渴に迫らるゝよりも、其の子を奉公に出せば、せめて片袖の涙も干ぬべしと、さまざま人に勧められし時すら、此の身を離し給はざりし母を残して。

心の胸の手綱を絞りに幾度か引戻せど、やゝともすれば轡を切り錠を外し、たゞ眞一文字の蔭地に乘せて走らん堪へ難さ。我こゝに在りとも、今は店賣の駄菓子一個に値するものをも産み出さず。日夜に運び給へる針の目の一寸を縫ふだけの助けにもならず、只徒に母の苦勞を重ねて、母の賜物を費すのみと思へば、忍び難き今日を忍びて、孝を他日に盡すべき道あり。

一夜この理を説いて母に乞へば、案外に子が志の健氣なるを喜び給へり。「されど如何にせん貧しければ」とて、只その一事を歎き給へるに、予は思はず飛びたつ心地。「はや既に十六歳、牛にも踏まれず馬にも蹴られず、東海道は人の荷を負ひ人の車を曳いても行くべし。都門に入れば學僕勞

働の暇に修養すべし」と誓ひし我が顔を、つくづくと今更涙に曇れる目に見給ひて、「親甲斐のなき母親を持ちし哀れさよ」と勿體なし。此の言葉を聞きし時、予は母の前に兩手をつきしまゝ、暫し頭を擧げ得ざりき。

東上の許を受けし身の嬉しさ。此の嬉しさには、過ぎし幾年の貧苦も一時に忘れ、前途如何なる運命の來るも思はず、只年少客氣の五體ぶるゝと勇み震ひぬ。されど其の目にさへ足らぬ勝の中より、皮肉を削るが如くに著へ置かれし七圓の金。堪忍せよ、此の外に母の力なし」と泣いて與へられし時、思はず總身は寒く縮みて、生涯またこれほどの苦痛なし。

十月の二十五日、いよいよ出立の朝。昨宵より寝もやらで一夜を明し給ひ、我が子の首途祝はむと、眞心をこめられし小豆飯に味噌汁、小さけれども魚類の玉とせる鯛の焼物。亡父の位牌に線香を立て、其の前に母は打伏し、「悴は只今これから旅へ行きます。影身にお添ひくだけよ」と泣かれたり。

生れて始めての旅にも、常着のままの袷に綿ネルの襯衣、鼠色となりし木綿の兵兒帯だけは、三日前に洗ひて白く、母が手に仕立て給ひし紺の脚絆、背戸の豆賣る老爺が自慢に造りくれし草鞋を履き締め、二枚の布子と數冊の寫本とを肩に振分け、雨をも防げ山坂の杖ともせよと、知人が餞別の蝙蝠傘を携へ、近處の人々にも懇ろに母を頼みて出でたちぬ。態と我が家をば振返らず、殊更足

第九課 旅行先より先輩へ

第九課 旅行先より先輩へ

早に二町餘りを行きし頃そつと後を見れば、母は半町ほどの此方まで送り來りて佇み給へり。數多の子を持ちて富み榮え、落着く處も家も定りて、何不自由なく汽車・汽船の便にて送るさへ悲しきは親の常なるに、是は浮世の憂きが中に抱き合うて、互に泣き來りし親一人子一人の別れなればさもありぬべし。

旅にある友へ

軒ばに山あり、垣根に川ある御旅宿の、しかも主は旦那様の御弟子にさへいらせらるゝ由、うき旅などは御かごとにて、羨みねとぞ聞え候。さもあれ夕の雲に日の照りて、松風あはれに音づるゝ時、都の空思しめし出でらるゝは、實に〜と思ひやり聞えさせ候。

都は昨日も今日も雨淋しく、何時も御入の時めで給ひし隣家の琴の音、あればかりを慰めにして過し申候。

御出立の後まだ僅かに候へども、此の程に變りし事は、私宿への曲り角に、舟板塀をかしく、瀬戸もの、表札かけたる女名前の家のありし、あれは御前様御同藩の何がしとやらが控家と御仰に候ひしが、五日程前の夜、物置に火を放ちしもの候うて悉く焼失せ申候。ゆき來に見あげて懐かしと思ひし一もと松、思はぬ煙に成り候うて、残念この事に候。

嬉しき事に指を折れば、宿の小犬の病の癒えたる、失せぬと思ひし頂戴の歌集見出でたる、勝手もと働くとよき女子の参りたる、猶それよりも妹が例の支度にと御相談願ひし染物のこと、あがり殊に見事にて、少しも派手なることはなく、當人の喜、一重に御す、め故と辱く嬉しく候。日毎のやうに御めもじ、て、猶物足らぬ心地に候ひしを、況して此の朝夕の淋しき、文參らせたまにも御宿り定まらねば、何んかはし候はん。日々に此の愚痴申出しては、妹に笑はれ申候。御歸京は來年とや、ゆる〜の御ありきに書きあつめ給はん御旅日記、拜見いつと楽しみ居候。此の次の御文は又いつ頃の御便りなるべき、其の程いと待遠にも候かな、やがて時雨れん紅葉のかけに御風めさぬやう御用心ひあらまほしく、其の事祈り居候。かしこ。

第十課 ナポレオン

舊讀本の教材其の儘です。

ナポレオンは近世史上の大立物で、彼が生涯の事業には近代的の思想と反した所がないでもありませんが、それは時代の然らしむる所で、彼が困苦缺乏と戦ひ、剛毅不屈の氣象を助成して、敢然歐洲の天地を席卷し帝王の帝王としての榮冠を戴くに至りたる迄の活歴史は、

近代人に取つても確に一服の清涼劑たるを失はないであります。之を攻城野戰の武夫とのみ見ましたら問題も起りませうが、此の意氣と此の努力を、近代的に利用しましたら、きつと偉大な結果を見るに違ひありません。現に發明王エヂソンの如きもナポレオンの傳記を讀んで大に感動し、大ナポレオンを理想として今日の如き大を成したのであります。

西曆一千八百八十九年、それは佛國巴里に於て、萬國博覽會の開かれた年でした。各國の粹を蒐めた出品物は、目を追ふて博覽會の會場を埋めました。

北米合衆國からの出品は會場中の異彩でした。而も其の中の三分の一強は、トーマス・エヂソン氏の發明 埋められました。

エヂソンの出品物は其の數實に三千數百個、運賃二千五百弗、出品價格七萬五千弗と云ふ莫大なもので、其の出品物の上には出品者自身の發明になる無數の電燈がキラ／＼輝いて、燦然として滿場を壓してゐました。

敬虔な學者エヂソン氏は、出品者として將又歐洲の天地に學ぶ所あらんとする一個の學徒として、婦人及び令嬢を具して巴里の土を踏みました。

今や彼は四十二歳、溫顔無髻の好學者でした。

昔の劣等兒アルでもない。

勿論新聞賣子でもない。

旅から旅へと、放浪の青年でもなかつた。

何時か彼の知らない間に、人類十六億の最も優れたる權威者となつてゐました、

「科學界の偉人來る、發明王エヂソン來る。」

巴里の驛頭は、人類全體の聲を以て彼を歡呼して迎へました。

ベルサイユの宮殿の扉は開かれ、彼は善美を盡した王宮の賓客となりました。

一萬人に及ぶ貴顯紳士は、彼の爲に乾杯し、詩人は爲に歌ひ、音樂家は彈奏して彼を祝福しました。

彼は今や人類中の、最も恵まれたる唯一人者であります。

彼の座席は、ルイ十四世の占めてゐた跡でしたらうか。又將大ナポレオンの踏んでゐた敷石の上でしたらうか。

彼の左右には列國の帝王、大統領、首相、大臣、其他一流の名士が彼を中心にして居

流れました。

帝王も、首相も、一平民の彼を彼等の尊敬すべき恩人として歓迎しました。

寡言な彼は、唯微笑を以て、それに答ふるばかりでした。

その昔、ユーロンの屋上に夢見た大ナポレオンの面影、生きてあらばと思ふ母の面影、無量の感慨は彼の全身を埋めました。

彼は佛國史を追想しました。佛國革命時のブルボン王朝の滅亡を靜かに追想するのでした。

それは榮華から廢滅に歸すべき、果敢ない夢の後でありました。

全歐洲の天地を席卷したコルシカの一青年士官ナポレオンの廣い額と、鋭い眼とを追想するのでした。

「我に不能の語あらんや。」

アルプ越のあの壯大な進軍の光景を心に描いて見るのでした。しかしそれは餘りに悲しむべき哀史でありました。

モスクワの全滅、セントヘレナの配流、去れるものは總べて夢であります。

「我をして大成せしめたるは、奈翁に對する信仰である」
とは彼が心の底から湧き起る感謝の聲でした。

發明王エヂソンは奈翁の意氣と性格とに憧憬して、生涯唯一の模範人物としてゐたのであります。

こんな教材の取扱ひは、斯うした意味に於て非常に大きな價值があるので、之を單に一篇の物語りとして慢然讀過させてしまひましたら、折角の教材も何等生命なきものと化してしまふのであります。少年時代には矢張一度はこんなものを讀ませるが宜いと思ひます。青少年の意氣と性格とは理窟ばかりではいけません。少年の意氣と性格とは、斯うした所に培はれるものだと言ふことを忘れてはなりません。殊に彼が全半生の花やかさに對して、其の最後の如何に悲痛哀愁を極めたかは、有爲轉變の人間生活の實相をまぎく／＼と見せつけられたやうな氣がします。榮枯盛衰は人の常、此の意味からしてナポレオンの生涯も確に一篇の詩を成してゐるのであります。

文は(一)が八段に分れ、第一段は生立、第二段は將軍時代、第三段四段は大統領時代、第

五段は帝號を稱するに至つたこと、第六段はトラファルガーの敗戦、第七段はアウステルリツツの大戦、第八段はプロシヤの攻略となつてゐ、(二)が三段に分れ、第一段はライン同盟と、ロシヤ遠征、第二段は晩年のナポレオン、第三段はナポレオン評となつてゐる。

「十九世紀の英傑ナポレオンは西曆一千七百六十九年、地中海上の孤島コルシカに生まる、云々」

此の段は生立です。彼がコルシカの一孤島に生れ、艱難辛苦の間に人となつて、十七歳にして砲兵少尉となり、其の忠實と勤勉と克己とは常に上官の歎稱を受けたことを叙してゐます。後半のルソーの書を繙いて、其の豫言に發奮したと言つた邊りには、幼時の感化が將來に如何に大なる影響を及ぼすかとを物語つてゐます。こゝら附説の資として、拙著「ナポレオン」の中から次の數節を擧げて置きませう。

風薫る地中海の一孤島

風光明媚。

風薫る地中海の一孤島コルシカ。

不世出の英雄ナポレオンがこのコルシカの島に生れたのは西曆千七百六十九年八月でありました。今から百五十年ばかり昔の物語であります。

その當時のフランスの國の有様はどうであつたでせうか——物語はそこから書き起さなければなりません——當時、フランスの國はその内政が麻の如く亂れてゐたのであります。弱肉強食と云ふ有様です。強い者勝ちと云ふ有様です。強者とは貴族です。然しこれは今に始まつたことではありません。それはフランスの王室貴族達が、代々、餘りに専横を極め、餘りに奢侈に流れ、日夜、詩歌管絃の愉樂に我を忘れ國を忘れ民を忘れて、大厦高樓に棲み、豪華な生活をしてゐた結果、遂に王室も貴族も持つてゐる限りの金を費して貧乏しなければならなかつたのですが、彼等は尙も華かなその生活を續けるために、人民達から澤山の税金を取りたてなければなりませんでした。

その税金には人頭税、什一税、土木税、鹽税など、云ふものがありました。

その人頭税は始め貴族が兵役を逃れるかほりに納めた税金でありましたが、ずるい貴族達はこれを一般の人民達から取り立てました。また、什一税と云ふのは、各人の収入のうちからその十分の一を取り立てたのであります。而かも貴族達は五十分の一を納めればよかつたのです。猶、土木税と云ふのは、道路や橋梁などを工事する時に、一文の勞働賃金も與へないで、勝手に人民達を使用

することを云ふのです。それから鹽税と云ふのは、七歳以上の人民達には凡てこの税金をかけたので、人民達の一家の鹽税は實にその収入の八分の一に當つてゐました。また、斯うした税金の外にも、猶、百姓達は田畑の收穫の半分を政府に、それから十分の三を領主やお寺へ納めなければならなかつたのです。従つて、百姓達が、一年間に汗水を流して、雨の日も風の日も働いて、實際に自分のものになるのはその五分の一の収入に過ぎなかつたのです。これでどうして人民達が暮してゆけませう。

人民達は皆ないつも破れた着物を着てゐます。

住む家には雨も漏るであります。

ろくろく食べるものもありません。

——これでどうして人民達が暮してゆけませう？

何と云ふ悲慘でせう！

それなのに、まあ、どうでせう。王室貴族達は美しい家に住み綺麗な着物を着て美味しいものを食べて、毎日、愉樂に日を送り迎へてゐたのであります。

これでどうして國家が立つてゆきませう。

フランスの國の内政は麻の如く亂れてゐたのです。

國は日に日に衰へてゆきました。

人民達の不平の聲は野にも山にも満ち充ちてゐると云ふ有様です。

「人民の敵！」

「それは王室である、それは貴族である！」

「貴族は我々の敵である！」

「貴族を仆せッ！」

「王室を亡ぼせッ！」

「人民の敵！」

「……………」人民達は口々に叫びました。

そして暴徒はあちらでもこちらでも起ると云ふ有様です。

やがて華の美しい巴里の街にも砲火の恐ろしい音の轟く日がまゐりました。

——ナポレオンの生れたのは恰度この時代だったのであります。

風薫る地中海の一孤島コルシカの島にも人民達の暴徒が起りました。コルシカは既にフランスの領土となつてゐたのです。で、本國から貴族一味の軍隊が攻め寄せて来て、平和で靜かなこのコルシカの島も、今は、恐ろしい兵火に包まれたのであります。

コルシカの人々は愛國心に燃えてゐます。

ナポレオンの父のカルロもその愛國の士の一人だったのであります。

彼はよく奮戦しました。

が、衆寡敵せず、遂に、降伏のやむなきに至つたのであります。

ナポレオンは子供心にもこのことを非常に悲しみ憤りました。

「屈辱！ この屈辱を雪いでみせる！」

彼は自分で自分の胸にこの復讐を誓つたのです。

——その時、ナポレオンは僅かに八歳の子供でした。

「俺は軍人にならう！」

彼はその時決心したのです。

その翌年、彼はブリアンヌの兵學校に入學しました。彼は石のやうな子供でした。いつも石のやうに黙りこんでゐると云つたふらな、友達などとも口をきかない子供だったのです。

「石！ 石！ あれは石だ！」

彼はそのやうなアダ名さへつけられてゐました。

それでも尙ナポレオンは口をきません。

「亡國民の子だ！」

そんなことさへ云はれてゐたのです。

「屈辱！ 復讐！」

彼の胸にはますます復讐の念が燃えてゆくばかりでありました。

冷笑慢罵。

ナポレオンはちつと眼をとちて我慢してゐます。ひと言も口ごたへをしません。相變らず黙々としてゐます。そして一分一秒と云ふ時間も惜しんで勉強しました。ことに、地理と歴史と數學とが好きでした。英雄傳、戦争物語は片時もその身から放さなかつたと云ふことであります。成績はいつも最高點でした。

「今に見ろ！」

「今に見てをれッ！」

彼は強い敵愾心に燃えてゐました。

在學六年間、彼はいつも一等の學業成績だったのであります。

で、その兵學校卒業のあかつきは、多數生徒の中から拔擢されて、巴里の士官學校に入學を命ぜられて、その翌年には既に陸軍少尉だったのであります。——その時のナポレオンの歳は僅かに十

七歳でした。

刻苦勉勵と天品優秀の結果に外なりません。

十七歳の陸軍砲兵少尉です。

彼はヴランスのラフェール砲兵聯隊附を命ぜられました。

こゝでも刻苦勉勵。讀書を以つて唯一の樂としてみました。小さな一室に寄寓してみました。そして年俸千二百二十法の大部分を書籍費に投じてゐたと云ふことであります。軍務の餘暇、孜々として、彼は研究に努めたのであります。

一年過ぎました。

ナポレオンは休暇を得て、生れ故郷のコルシカ島に歸省して、久し振りで、懐しい母や弟とも顔を合はせました。ああ。懐しいコルシカの島！ ナポレオンにも生れ故郷はいゝものであります。而かも、彼は父親の血を享けて、愛國の念に燃えてゐたのでありますから、その懐しさはまたかく別であつたこと、思はれます。

當時のフランスの國勢はますます亂れてゆくばかりであります。

またしても巴里市の暴徒！

ナポレオンは暫らくコルシカの島にとゞまつて、都のこの有様を眺めるやうにして、日を送り迎

へてゐたのであります。と云つて、そのあひだ、ただ徒食して醉生夢死するやうなナポレオンではありません。彼は、ひとり、靜かに、自分の志の達せられる日を持つてゐたのであります。

その志とは？

——それはフランスの國に對する復讐です。

彼はコルシカの獨立を片時も忘れませんでした。悲憤慷慨の字句を以て愛國論を草し、或ひは、公然と、コルシカ島の人民達を鼓舞して、大いになすところあらんとしてゐたのであります。

一方、フランスの國の内政は麻の如く亂れ、更に亂れた上にも亂れてゆくと云ふ有様でした。

有史以來の大動亂は果して起りました。

一隊の女軍が太鼓を打ちならしながら、ヴェルサイユ宮殿に押し寄せたこともあります。

國王が王子と共に宮殿を逃れ去るのを捕へてこれを牢獄に入れたこともあります。

人民達も今は王室貴族の專横に我慢が出来なくなつたのです。

——斯うして日に日に人民達の權勢は強くなつてゆきました。猶、共和黨の首領等は現在の國家を破壊して、新らしく人民達の國家を樹てようとして、その反對黨を澤山に殺しました。巴里の市街は鮮血に染められたと云ふ有様です。——ナポレオンは斯うした世の中の動亂最中、コルシカ島に歸國してゐたのです。

「わが島が獨立するのは今だ。今こそ、我々に天が時を與へ給ふたのである。いつまでもフランスの屬國となつてゐることは屈辱である。すみやかに獨立の計劃をたてねばならぬ……」と騒ぎ立てる人民達の、その先頭に立つてゐたのは云ふまでもなくナポレオンポナバルトでした。

コルシカ島は、たうとう獨立の軍を起すことになりました。

フランス本國では慘憺たる大革命の勃發。

バスチーニ獄の砲撃。

ヴェルサイユ宮殿の襲撃。

國王の逃亡。

王政の顛覆。

一轉して恐怖時代となつたのであります。かの有名なロベスピエール、ダントン等と云ふ政府黨の時横暴殘虐。人を屠る幾千萬、血は流れて河となり屍は積み山となり、腥風慘雨全國に漲り、父子夫妻の流離して他郷に客死するもの擧げて數ふべからずと云ふ有様です。

——この機に乗じてコルシカ島獨立の旗を擧げようと云ふのであります。

コルシカ島の獨立運動。

このことはフランス本國の國民議會のはうへもきこえました。で、議會は早速コルシカ島民に自

由を與へることを決議しました。これを聞いた島民は、今までの憤慨をすっかり忘れて了ひました。さうして軍を起すことを中止したのであります。

ナポレオンも獨立の計畫を捨てました。

と同時に、これまで永い間持つてゐたフランスに對する敵愾心も心から洗ひ流してしまひました。

かうして彼は當時軍職を置いてゐたオーゾンヌの聯隊へ復歸したのであります。

この時、彼は自分の幼い弟のルシアンを伴つて行きましたが、彼自身はきたない小さな一室に生活して、コルシカにゐる故郷の母へ送金して、その家計を助けたと云ふことであります。ナポレオンと雖も有り餘る俸給を貰つてゐたではありません。したがつて彼は非常な困窮に陥り、その部屋には一個の粗末な机と二脚の椅子があつたばかりだと云ふことです。終日、彼はパンと水との生活が続けてゐたと云はれてゐます。而かも彼はこのあひだに非常な勉強をしました。昔に變らぬ刻苦勉強です。

彼の努力は報ひられました。

彼は中尉に昇進しました。と共に、ヴァランスの砲兵聯隊に移動を命じられました。

フランスの暴徒はますます悪化してゆくばかりです……。

その餘波はコルシカの島へも押し寄せて來ました。

ナポレオンはフランス本國の軍隊にゐます。

「彼は國賊である！」

血迷つたコルシカの島民達は、あれ程故國を愛してゐたナポレオンを遂に國賊とまで叫ぶやうになつたのであります。

刻々と彼の身邊は危険になつて來ます——その時てうど彼は歸國してゐたのです。——彼は泣きました。泣きながら、彼は老いたる母と幼い妹とを連れて、ツィロンへ逃れました。

千七百九十三年の五月。

野も山も新緑です。

彼は故國コルシカ島を見捨てたのであります。

彼は泣きました。

然しそれ程のことで自分の前途を失望するやうなナポレオンではありませんでした。

心機一轉彼はみづから進んであの恐ろしいフランス革命の騒動の中へ身を投じたのであります。

「フランス大革命の起りしは、一千七百八十九年にして、ナポレオン二十一歳の時なり、云

云」

此の段は彼が將軍時代で、フランス革命當時から説起して、彼が歐洲の天地に其の名を轟はれるに至つた迄の事蹟を物語つてゐます。十九世紀の初頭の形勢を眺めると、彼の自由平等の炬火を提けて、歐洲に臨んだ佛國に於ては、悲惨なる恐喝政治の幕を閉ぢて、新に總裁政府の成立を見るに至り、佛國民は一時其の小康を得たのを喜びました。總べて大破壊を事とした革命の運動の後には、大建設を主とする新勢力を要するのが自然であるのに、總裁政府は其の勢力至つて微弱で、何の爲す所もなく纔に現状を維持するばかりでありました。斯うして革命當初の目的も今や半途にして挫折すべき恐がありましたから、佛國民の胸中には一偉人が出て新たな社會を形成し、鞏固な政府を創設せんことを切望してゐました。ナポレオンは、正に此の時代の使命を遂行せんとして佛國民の前に現はれたのであります。こゝら附説の資として、拙著讀本物語の中から次の數節を擧げて置きませう。

太陽の如く輝く

怖ろしいフランス大革命！

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

ナポレオンはみづからその動亂の中に身を投じたのであります。

彼は不遇な自分の身を嘆きながらも、なほ、遠大な希望を胸に秘めて、母と妹とを伴なつて、故國コルシカ島を去り、フランスのヴァレットと云ふ小さな町に暫らくは淋しい生活を續けてゐたのであります。やがてマースの聯隊附士官として任命されました。

その當時、フランスには、まだ死刑にされた國王ルイ十六世を慕つて、尙、王政復古の計劃をしてゐる勤王黨が澤山にゐました。彼等は遂に英國にすがつてその援助を求めたのであります。英國は早速これを承知しました。そしてツォロンに向つて英國軍の出動を見るやうなこともなりました——今やフランスの内憂は外患となつたのであります。

勤王黨のよろこびは申すまでもありません。

彼等はルイ十六世の子をルイ十七世としてフランス共和黨に對して遂に反旗をひるがへしました。

その背後には英國がゐます。

勢ひなかなか、あなどり難いものがありました。

勤王黨はツォロンに據りました。ツォロンは難攻不落の要塞地です。

戦端は開始されました。

戦は幾日も幾日も續きました。

敵も味方も屍の山を築くと云ふ慘劇です。

ナポレオンは共和黨の配下として出征しました。

その時ナポレオンは大尉に昇進してゐました。その材幹技倆が衆に勝れてゐたからであります。大尉となつたその翌年の秋、彼は拔擢せられて、このツォロン包圍軍の砲兵司令官に任ぜられたのであります。

これが彼の初陣だつたのです。

彼はこの初陣に際して、作戰計劃よろしきを得、苦もなくツォロンを陥れたのであります。で、同年の末、その軍功によつて、一躍陸軍少將に任命されました。

武運赫々として輝く。

彼の前途はまことに洋々たるものであります。

その翌々年には巴里の暴徒の動亂を鎮定して更に陸軍中將に任ぜられました。

そして伊太利遠征軍司令官に補せられたのであります。

佛蘭西絶世の美人と云はれたジョフィヌと結婚したのは二十七歳の時でした。

その後、ナポレオンは總裁政府の委任の下に總司令官として伊太利に出發しましたが、途中到る

第十課 ナポレオン

ところに、オーストリアの軍を破つて大勝を得ました。

アルプスの山々はまだ丈餘の雪が積つておりました。ナポレオンは軍をポー河の平原へと進めたのであります。この平原は土地が非常に肥えてゐて、充分な作物もありましたので、こゝで暫らく兵士を休養させることにしました。ナポレオンは部下の兵士を自分の子供のやうに愛したと云ふこととであります。ですから兵士達も彼のためには生命を賭けて奮戦奮闘を続けました。

「愛する兵士達よ！」

ナポレオンは常にさう云つておりました。

連戦連勝。

一年餘の奮戦の結果、彼は遂に伊太利の全土を平定したのであります。

空前の武功でした。

威風凛々。

彼は巴里に凱旋しました。

その捕虜は十一萬五千、軍旗百七十七旒、大砲千四十門、全く有史以來の大勝利だと云はれてゐます。

巴里の市民達は歡喜してこの蓋世の英雄を迎へました。

武威赫々、まことに彼の名は全歐を壓すると云ふ有様でありました。

巴里へ凱旋して歸る途々、ナポレオン歡迎の國民達の聲は、ナポレオンをして思はず耳をおぼはした程でありました。

フランス全土は沸きかへるやうな騒ぎです。ことに巴里の市民達の熱狂は想像以上で、全市が發狂したのではないかと思はれた程でした。

この時の彼は僅かに二十八歳の若者でした。

フランスはナポレオンによつて救はれたのです。

凱旋の日、この驚くべき名將を見たいと、街路に集つた市民が雑鬧を極めたのも決して無理からぬことでありませう。

全く沸きかへるやうな騒ぎでした。

ナポレオンは凱旋軍の先頭に馬を立て、ゐます。

「萬歳！ 萬歳！」

「おお、ナポレオン！」

「偉大なるナポレオン！」

「ナポレオン萬歳！」

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

「ナポレオンは我々の恩人である！」

「我々のフランスはナポレオンによつて救はれた！」

不出世の英雄。

蓋世の名將。

彼に送る讚美の叫び……。

彼に送る讚美の叫び……。

やがて巴里では盛大な凱旋式が行はれたのであります。

妻ジョセフィンヌの喜びはどうであつたでせう？

母のよろこび！ 妹や弟のよろこび！

然し乍らナポレオンの遠大の希望と功名心はこれほどのことで満足されるものではありませんでした。

彼は更にエチプト遠征の許可を政府から得たのであります——。

當時オーストリアやイタリーは既に和を請ひ、ただ、フランスを敵としてゐるのはイギリスばかりでありましたが、然し、このイギリスはほんの小さな島國で、その本國に大きな力を持つてゐたわけではありません。屬國に印度と云ふ寶庫を持つてゐるために、こゝからすべての軍資を仰ぎ、こ

のフランスを敵としてゐたのであります。

ナポレオンはエチプトを征復して、それからこゝを根據として、印度を征伏しイギリスを屈服させようと考へてゐたのであります。

千七百九十八年五月。

ナポレオンは三萬五千の兵士と二十七隻の軍艦と四百隻の運送船を率ゐて、威風堂々、ツォロン港を出發して、エチプト遠征の途に登らうといふのです。

その威力！

海も鳴を静めたでありますやう！

「ナポレオン！ 萬歳！」

「フランス！ 萬歳！」

市民達の歡呼に送られてナポレオンは勇ましく出征の途に登りました。

エチプトの金字塔——この國は世界で一番早く開けた國です。太古から非常に文化が發達してゐたのです——ナイルの河畔、船の上からもピラミッドは見えます。

「見よ！ ピラミッドを！」

ナポレオンは船の上で叫びました。

第十課

ナポレオン

第十課 ナポレオン

「ピラミッドは今我等の前に立てり。世界の學問の寶庫はあのピラミッドの中にある。あのピラミッドは今や我等の所有たらんとしてゐる」と、ナポレオンは叫びました。

實際彼はそのつもりで本國から澤山の學者を連れて來たのでありました。

學問の研究——彼はそれを忘れませんでした。

ナポレオンは最初の血祭としてマルタの島を難なく占領しました。そしてアレキサンドリアの港に向つたのであります。この港は世界の學問の府と云はれてゐた程文化の發達していた都會だつたのであります。こゝには多くの學者もゐます。ですからナポレオンがこの港へ眼をつけたのは最もなことでありませう。

しかし、このアレキサンドリアの戦はフランス軍にとつてもなかなかの難事だつたのであります。

熱帶地——

七月の太陽は焼きつけるやうに頭上を照らしてゐます。

部下を愛することの厚いナポレオンです。

彼はどのやうにか深く兵士達をいたはつたことでありましたらう。

だがアレキサンドリアの港もナポレオンの敵ではありませんでした。

彼は更に軍を首府のカイロに向けました。

一大戦闘——これが有名なピラミッドの大戦です。

このエジプトには、マメリュークと云ふ大變に強い騎兵隊がゐて、ムラッドと云ふ會長がこの騎兵隊を率ゐてゐましたが、その勢力は實にエジプトの太陽だつたのであります。

その騎兵隊の乗る馬と云ふのがまた名馬ばかりでした。

——この名馬と剽悍な騎兵。

而かも彼等は生れ落ちるときからこの熱帶地方の風土になれてゐます。

それに對してフランス軍はどうでせう。

エジプトに上陸して以來、まづ、敵と戦ふ前にこの暑さと戦はなければならぬのであります。加ふるに、エジプトには砂漠が多かつたのです。飲む水にも困りました。怖ろしい熱病も流行しました。フランス軍はこの熱病とも戦はなければなりません。——ナポレオンの氣持はどうであつたでせう——彼はこの有様を見て心を痛めずにはゐられませんでした。

然し雄心勃勃たるナポレオンです。

「愛する兵士達よ！」

彼は部下の者を激勵しました。

「我が愛する兵士達よ！ 見よ！ この沙漠に並ぶあの夥しい金字塔を！ 彼等は二千年の歴史を

有つてゐる。その二千年の歴史は汝等の奮戦を見おろしてゐるであらう。ああ、偉大なる金字塔よ！フランスが如何に勝れた將士を持つてゐるか、卿は今にそれを知るであらう。知つて、而して、彼等の勇敢に歡呼の聲をあげるであらう。今に見てゐろツ！ああ、我が愛する兵士達よ！奮起せよ！奮起して戦へ！偉大なる幾多の金字塔は必ずや汝等の奮戦を萬代に語り傳へるであらう」と叫びました。

このナポレオンの激勵にフランス軍は暑さを忘れ、渴も忘れ、そして慄悍なマメリユークの軍と戈を交へたのであります。

砲弾は雨と飛びます。

金字塔のあたり。

エチプトの沙原は血に染められました。

砂塵立つ沙漠！

ああ、勇ましきフランス軍。

「勝つた！勝つた！」

「ナポレオン！萬歳！」

戦勝に酔つたフランス軍は、一氣に敵の首府カイロを陥れたのであります。

ナポレオンは學者達をこの地にとめて、エチプト太古の文明を探究させました。

そして、更に、東方へとその雄圖を伸してシリアに浸入しました。

ああ、ナポレオンの雄圖！

末代に輝くその偉勳！

「此の間にイギリス・オーストリア・ロシア・ポルトガル・トルコ等の諸國、フランスに對し同盟の結び、兵を派して、云々」

此の段と次の段とは彼が大統領時代で、ナポレオンの生涯中最も活躍した時代です。エジプト遠征と言ひ、アルプ越の壯舉と言ひ、何れも逸語中の逸語として、今尙人口に膾炙されてゐます。こゝら附説の資として、拙著讀本物語から次の數節を引用しておきませう。

ナポレオンがエチプトで戦つてゐたその留守の間、今こそフランスを攻め亡ぼすべき時だと躍起したのは、ロシア皇帝パウル一世でありました。パウル一世は、さきにさんざんフランス軍のために蹂躪されたオーストリア、トルコ、イタリーなどに使者を送つて、それ等を煽動したのであります。尙その上にイギリスとも同盟を結びました——これは勁敵フランスに對抗した一大同盟で、一舉に

フランスを亡ぼさうといふのであります。
狼狽したフランスはやむなく諸將をやつて、この同盟軍に對抗させたのであります。
が、それは全くフランス軍の連戦連敗に終りました。
その度毎に多くの財は失はれました。
多くの兵士は斃れました。

そればかりではなかつたのです。
ナポレオンの本國留守中をねらつて、政界の人々が、各自に勢力を争ひ始めたのであります。
國內の暴徒も各地に起りました。

巴里の街はその渦中に投ぜられてゐると云ふ有様であります。
フランスの國は日一日と危険となつてゆきます。

「ああ、亂れたフランスの母國、それを救ひ出すのはナポレオンのみである。」

「ナポレオンの歸國はフランスの再生である。」

「ああ、偉大なるナポレオン！」

國民達は口々にナポレオンの名を叫びました。

それは、まるで、早天の續く日に雨を望むやうなものであります。

政府では早速使者をシリア遠征の途に登りつゝあつたナポレオンの陣中へ送つたのであります。
使者はフランス本國の情況をつぶさにナポレオンに告げました。

「このフランスを救ふ者はナポレオン將軍のみであると國民達は口々に叫んで居ります。」と使者は云ふのです。

「よろしい。承知いたしました。」

ナポレオンは大きくうなづきました。

この時ナポレオンの胸の裡に「フランス皇帝」といふ夢がきざしてゐなかつたとどうして云へませう。それはひとつの夢想に過ぎなかつたでせうか。

彼はひそかに會心の微笑を洩らしました。

「帝王中の帝王！」それがナポレオンのたつたひとつの、然し怖ろしい遠大の希望だつたのであります。

ナポレオンは早速フランス本國に歸つて來ました。

巴里に到着した日！

國民達はどのやうにか歡呼してこの將軍を迎へたことではありませんたらう。

フランスは蘇生つたかのやうに見えました。喜びは國民ばかりではありませんでした。諸將もそ

第十課 ナポレオン

の膝下に馳せ参じました。政府の議員もかけつけました。在野の政客も争ふて彼の門を訪れると云ふ有様であります——ああ、かくて「新らしきフランスの國」がナポレオンの胸三寸によつて生れ出ようとしてゐるのであります。

實際、ナポレオン自身も久し振りで歸國して見て、フランスの内憂外患、その政界の餘り亂れてゐるのを知つて、吃驚りした程でありました。

「折角、自分が多くの愛する兵士達の血と汗とを流して勝ち得たフランスの國勢と國富、ああ、それが今は泥土にまみれようとしてゐるではないか。」

さう云つたナポレオンの憤怒のほども想像されるであります。

ああ！ 遂に！

ナポレオンはこの機運に乗じて、總裁政府を倒し、みづから第一統領として、フランス文武の權を掌握したのであります。

X

X

X

X

X

當時フランスが持つてゐる兵力は二十五萬でした。

ナポレオンは更に十萬の兵を募集しました。

そして一舉オーストリアを征伐しようと決心しました。

千八百年の五月でした。

彼はみづから大軍の先頭に立つて巴里を出發したのであります。

まもなくゼネバに到着しました。

有名なアルプスの山越えはこの時のことであります。

ナポレオンはまづ工兵を先發隊としてその山路を調査しましたのです。

「極めて險惡な山路、この大軍があゝの山路を越すことは、到底、不可能であります」と云ふ報告で
ありました。

「不能？」

ナポレオンは叫びました。

「不能の文字はフランスの辭典にはない、否、余の持つてゐる辭典には不能の文字はない」とナポレオンは云つたのです。

——これは有名な言葉であります。

さうしてナポレオンは軍をアルプスの山頂めがけて進めたのであります。

海拔一萬尺のアルプス山。

山には丈餘の雪が積つてゐます。

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

而かも山また山の險難八十五哩と云はれてゐるのでした。

兵士達は肌を刺す寒氣からだの自由も思ふにまかせぬ程でありました。

雪がなだれ落ちて來ます……。

そして人も馬も大砲も谷底へ雪崩れのためにつき落されるのです。

その困苦の有様は實に名狀し難いものであります。

「ああ、愛する兵士達よ！」

ナポレオンはその度毎に自分の愛する兵士達の捨てる生命を惜しんで、どのやうにか、嘆き悲しんだことでありましたらう。

然しナポレオンは斯う云ふ嘆きと悲しみにも負けず、困苦と闘つて、よく士氣を鼓舞し、前後僅かに八日間の日數を費して、遂に、このアルプスの險路を突破したのであります。

斯くて彼は兵をマレンゴの平原に進めたのです。

オーストリアの方でも總數四萬の大軍を送つて、このマレンゴの野に破竹の勢を以つて前進して來ました。

一大戦闘は開始されました。

ナポレオンが左の足に傷を受けたのはこの時のことでありました。

「將軍傷く！」……フランス軍の士氣は甚だしく沮喪しました。

これを見てオーストリアの軍はすつかり心をゆるめてしまつたのであります。ナポレオンはオーストリアの軍がこの僅かの勝利に心をゆるめてゐるのを知ると「今だ！」と叫んで蹴起しました。そして、電光石火！ 全軍に對して逆襲を命じたのであります。敵軍は全くこの逆襲に狼狽しました。

この時、ナポレオンはみづから先頭に立つてゐたのであります。

彼は足の負傷を忘れてゐたかのやうに思はれました。

そして叫んだのです——。

「愛する兵士達よ、進軍は今なり！ 勝負の決は最後の五分間にあり。進め！ 勇敢なる兵士達よ、進軍は今なり！」

「最後の五分間！」

兵士達も口々に叫びました。

猛烈なるフランス軍の逆襲です。

この逆襲に敵しかねたオーストリア軍は間もなく練退却を始めました。

——この時間僅かに三十分。

第十課 ナポレオン

三十分にしてナポレオンはコレンゴアの戦に大勝を得たのであります。

敵軍は休戦を乞ひ、アレキサンドリヤに和陸條約が成立したのです。これでフランスはオーストリアの勢力を地に落したわけでありませう。其後ソローレンスの條約では、エルバ島や中央伊太利の大部分をフランスの領土とし、猶、ロシアを降し次いでポルトガルを降服させました——斯うして歐洲大陸の全土がナポレオンの命のまゝとなるやうになつたのであります。

唯、海を隔てたイギリスだけは依然フランスの敵國でしたが、これもナポレオンの威力に恐れをなしたと見えて、その國內に平和論者や和陸論者などが現はれて來ると云ふ有様でした。

戦の戈はおさめられました。

斯くてヨーロッパの全土には平和の曙光が見え染めたのであります。

そこでナポレオンは軍をおさめて専心國政の事に當ることにしたのです。

國民達の信頼と敬慕とは日に日に増してゆくばかりでした。

フランス元老院では——

「ナポレオンを終身第一統領とすべし。」

と、決議したのであります。

憲法の改正が行はれました。

人民達が國政に參與する権利を得たのも、この時のことであります。

——フランスの當時の國民達がナポレオンを「神」の如く思つたのも、決して無理のない話ではありませぬか。

「こゝに於て、ナポレオンは一時外征の鋒をさめ、専め力を内治に用ひて、云々」

此の段は彼が帝號を稱するに至る迄の事蹟で、攻城野戰の雄は内治民政に於ても亦倫を絶してゐたことを物語つてゐます。其の民望を博し、終身頭領に選ばれ、終に國民多數の希望に依つて、帝號を稱するに至つたと云ふあたりに、ナポレオンの得意の程が想像されませう。こゝら附説の資として讀本物語から次の二節を引用して置きませう。

彼は軍事のみに生きてゐた英雄ではありませんでした。

長い兵亂のために衰へてゐた宗教の復活にまづ意をそゝぎました。

衰へてゐた教育を隆盛にしました。

なほ交通運輸の便をはかるために道路運河を修築しました。

ことに、このナポレオンが第一統領時代の偉業として、今なほ歴史に語り傳へて、その功績を萬

代に残してあるものは、かの有名なナポレオン法典でありました。法典は國を治める根本ですが、當時フランスには法典と云ふものがなかつたのであります。ナポレオンはそれを憂へて、全國の學者や法律家を數十名集めて、自分もみづからその討議の席に参列して、それから數年の日數を費してこゝに法典を完成したのであります。ナポレオン法典と云ふのがそれです。この法典は諸外國も争つてその當時それを採用したと云ふことであります。

——斯うしてナポレオンに對するフランス國民の信望はいよいよ高くなつてゆくばかりでした。

その後いくばくもなく萬民の輿望を一身に負ふて、ナポレオンは光榮ある佛蘭西皇帝の位に登りました。

彼はその時三十五歳でした。

千八百四年の十二月二日と云ふ日です。

即位の戴冠式はノートルダム寺院に於いて行はれました。ジョセフイヌも今は皇后であります。冬ながらも春のやうに晴れ渡つたほがらかな日でありました。ナポレオンは皇后と共に、美麗を極めた八頭の白馬の馬車に駕してチュイレリーの宮殿からノートルダム寺院へ向つたのです。あとには文武の百官が従つてゐます。市民達は道に堵をなしてゐます。ナポレオン萬歳の聲！

この日のナポレオンの得意が思ひやられませう。

皇帝の冠はローマ法王の手によつてナポレオンの頭上に置かれました。

ジョセフイヌにも皇后の冠が捧げられました。

と、皇帝ナポレオンは立ちあがつて、

「朕は朕の生命を賭けてフランス國民の福利と名譽とを増進せん。」と、いとも莊重な語調で、神に宣言したのであります。

寺院の鐘の響……。

「皇帝萬歳！」の聲。

ああ、コルシカの一孤島に生れたナポレオン——。

今や彼はフランス皇帝です。

彼はその後歐洲の大同盟軍と雌雄を決すること前後幾十回。

而かも彼の作戦たるや鬼神をも顔を背けたであります。

連戦連勝です。

向ふ處敵なく幾多の國々を馬蹄に蹂躪しました。

威風凜凜。

第十課 ナポレオン

天地を震撼せしむるの概がありました。

ウルムに於て、アウステルツクに於て、イエナに於て、フリードランドに於て、或ひはソモシエラ、マドリッドに於て、乃至はワグラムに於て、彼は常に空前の大捷を博したのであります。

斯うして歐洲の大部分はその勢力範圍に收めることが出来たのであります。

英雄中の英雄でありました。

帝王中の帝王でありました。

彼の勢力は千八百年に至つてその頂點に達しました。ただ、全歐洲中、僅かに英國の一國を除く外、悉く彼の命を奉ぜざるなきに至つたのであります。

彼が多年辛苦を共にしてゐた愛妻のジョセフィヌを離別したのは、不幸にも皇后に子供がなかつたためでありました。彼は涙を揮つてこの離別をしたのです。それは皇太子と云ふあつぎのことを考へたからであります。彼はこの年にオーストリアの皇女マリア、ルイドを迎へてそれを皇后としました。そして翌年一男兒を擧げることが得ました。

「皇子生る！」「皇帝萬歳！」の聲は全國に充ちました。

彼は今や旭日冲天の勢でした。

「此の年、ピット再びイギリスの首相となり、オーストラリア・ロシア二國及びスイスと聯合して、フランスに反抗の態度を示せり、云々」

此の段はトラファルガーの敗戦で、英將ネルソンの偉勳を物語つて居ます。此の敗戦はナポレオンに取つて、終生忘るべからざる一大屈辱で、彼は終生、此の屈辱に對して煩悶と焦慮を續けたのであります。「あゝ余をしてイギリス海峡の主たらしめば必ず世界の大王たるを得べきに云々」に其の悲憤の程が覗はれませう。

「ナポレオンは、銳鋒を一轉して東方に向ひ、三度オーストリアに侵入してウィーンを占領し、オーストリア・ロシア二國の聯合軍をアウステルリッツに撃破す、云々」

此の段は有名なアウステルリッツの大戦で、ナポレオンに取つて最も得意な戦争です。此の勝報に接して英國の首相ピットが悶死したと云ふ一事でも、此の戦争が如何に重大な意義を持つてゐたかと云ふことが想像されませう。

「ナポレオンは更に大軍に將として、プロシヤの軍をイエナに破り、進んでベルリンを陥れしかば、プロシヤ王、國都を棄て、東方に走る、云々」

此の段はプロシヤの攻略で、ナポレオンの得意の絶頂に達した時です。神出鬼没、戦へば

勝ち攻むれば取ると云つたナポレオンの神籌奇策は、歐洲の天地を震撼させたのであります。こゝら附説の資として、讀本物語から次の數節を引用して置きませう。

ナポレオンの政策は全然侵略的に傾きました。

全歐中彼の意の儘にならないのは、英國一國であります。——英國には當時名宰相ピットがゐました。ピットはフランスとの國交をこのまゝに持續していつたらば、やがてナポレオンのために征服されて、イギリスの根本政策である殖民地もフランスの手中に落ちるかも知れないと考へました。さうしたならば英國は僅かに北海の小さな二島内に雌伏せなければならぬ位置ともなるのであります。尤もな話です。ピットはこの點を力説したのであります。——で、遂に英國は一國をあげてナポレオンの軍に當ることに決意したのであります。

イギリスがオーストリア、ロシア、スウェーデンの三國と第三回のヨーロッパ大同盟を結んだのはこの時のことであります。

「余はこのことあるを待てリッ！」とナポレオンは叫びました。

ナポレオンは大兵をブローニウに集めて一舉英京ロンドンを衝かうと決心したのです。

フランス艦隊十八隻、イスパニヤ艦隊十五隻、巡洋艦五隻と砲艦二隻、それに四千の陸兵を乗せ

て、威風堂々、その全長正に五哩、海を覆ふて進軍したのであります。

イギリスは昔から海軍の國です。

海の猛將ネルソンがその總指揮官です。

一千八百五年十月のことでありました——。

夜がほのぼのと白む頃、共に進路を進めた兩艦隊はトラファルガルに於て、互に、砲火を交へたのであります。

「大英國の興廢はこの一戦にあり。大英國の運命は汝等の双肩にあり。」

ネルソンは甲板上に叫びました。

全くこの一戦は英國の興廢にかゝつてゐたのであります。

英艦は死守して戦ひました。

ネルソンは名譽の戦死を遂げました。

が、遂に、トラファルガルのこの一戦は、英艦隊にとつて千古未曾有の大勝利だったのであります。

ナポレオンはどのやうにか残念に思つたことではありませんたらう。彼の望みは今や全く斷たれたかのやうに見えました。然しながら、この一時の失敗を嘆いてばかりゐるやうなナポレオンではあり

第十課 ナポレオン

ませんでした。彼は猛然として大陸の敵を撃破する策を樹てたのであります。彼はみづから大軍の將としてウキンナに攻め入りました。そして軍をドナウ河に進めたのであります。

この時ロシア皇帝アレキサンデル一世は、皇帝みづから大軍を率ゐて、オーストリア皇帝フランシス二世の軍を助けて、ウキンナの北方オウステリツクに於てナポレオンと雌雄を決することになつたのであります。

——これが有名なオウステリツクの戦です。

激戦數回！ フランス軍全勝！

この全勝は英國の名宰相ピットを悶死させた程でありました。

二

「ナポレオンの隣邦を征服するや、王國を廢して共和國とし、また改めて王國となし、一弟・二弟を國王に封じ、オーストリア・プロシヤ以外のドイツの諸邦をつらねてライン同盟を作り、自ら其の保護者となれり。云々」

此の段はライン同盟とロシア遠征で、彼が得意の絶頂から失脚の第一歩に踏込むに至つたことを叙してゐます。後段の「勢に乗じて自ら制することを知らざるは人間の弱點にして、

云々」の批評は、此邊を意味してゐるのであります。こゝら附説の資として、拙著讀本物語の中から次の數節を引用して置きませう。

ナポレオンが巴里に凱旋したのは千八百六年でした。

その年、彼は自分の兄ヨセフをナポリ王に封じ、南ドイツ諸邦をしてライン同盟を組織せしめみづからその統監となりました。それからオラノダを改めて屬國となし、弟ルイを封じてこゝの王としました。また、末弟ジェローをウエストアフリア王としました——斯うしてナポレオンのボナパルト家は一家一門悉く王侯の榮位を極めたのであります。

しかし、ただ、ひとつ、ナポレオンの意の如くならないのはイギリスでありました。

トラファルガルの敗戦！

この一時は片時もナポレオンの頭から去りません。

「英國を征服しないうちは死んでも死にきれぬ。」

「どうしてもあの英國を征服しなければならぬ。」

彼の胸には英國に對する憤怒の炎が燃えてゐます。

彼はそのことばかりを考へてゐました。

斯うして四のうちに一年たち二年たち、月日は次第に過ぎてゆきます。が、彼は遂に一策を案出しました。

千八百九年十月のことです。

これが有名なベルリン勅令と云ふのです。

歐洲大陸をしてイギリスとの貿易を一切嚴禁せしめようといふのであります。

「よろしく英國を封鎖すべし——」。

今後イギリスと交通する者は事の如何を問はず嚴罰に處すべし、フランス及び同盟國內に居住するイギリス人はこれを發見し次第斬殺すべし、英國の生産物はいつさい歐洲の地に入るべからず、もし發見せし者は即時沒收すべし——と云ふ勅令なのです。

云ふまでもなく、この勅令は、イギリスをして無援孤立の位置に置かうと云ふのであります。これはイギリスにとつても打撃であつたに違ひありません。然し、この打撃は歐洲諸國も同様だつたのです。歐洲諸國はこれまでイギリスから買入れてゐた生活の日用品に困つてしまつたのであります。鐵器、咖啡、茶、砂糖、毛織物など、云ふ、一日も缺くことの出来ない日用品のすべてはイギリスから輸入されてゐたからであります。従つて、その勅令が出ると同時に、全歐の物價は甚だしく騰貴して來たのであります。

これでは不平の起きて來たのも無理ではありません。で、一番に反對の聲をあげたのはロシアでした。

ロシアは國をあげてナポレオンのこの勅令を無視し、イギリスと交易を行ひ交通を續けたのであります。

これがナポレオンをして露西亞遠征の壯舉を敢てせしめた所以でありました。

尤もナポレオンはずつと以前から、ロシアに對して面白からぬ感じを抱いてゐました。それはナポレオンがマリヤ、ルイザをオーストリアから迎へる以前のこと、彼はかつてロシア皇帝にその皇妹を皇后として所望したことがあります。するとロシアでは「まだ幼い」といふ理由でその懇望を却けたのであります。ですからそれに對する憤怒もナポレオンの胎の底にはあつたわけでありました。

ナポレオンはその頃からロシアに對して惡感情を持つてゐたのであります。で、早速戰鬪準備にとりかゝりました……………。

露西亞は嚴寒の國です、ですから其の準備には可なりの日數を要しました。

かくて千八百十二年ナポレオンは五十萬の大軍を率ゐて長驅モスクワに軍を進めました。

旗鼓堂々……………。

第十課 ナポレオン

沿道の國々はその威風に怖れて、風に靡く草木の有様でありました。

フランス軍は勇ましい行軍を続けました。

それは長い行軍でありました。

やがてモスクワに到着しました。

すると意外、モスクワの街には人影ひとつ見えません。

「どうしたのだらう？」兵士達はみんな顔を見合せました。

敵兵一人見えないのみか、市民達の影一つ見えないのです。それにはナポレオンもあツけにとられませんでした。

「皇帝の威力に恐れをなして、いづこかへ逃げたのであらう。」

「皇帝萬歳、フランス萬歳！」

「戦はずして既に勝つ！」

兵士達は口々に叫びます。

ナポレオンは得意です。

彼はロシア皇帝の宮殿に侵入して、長途の旅の疲れを休め、その夜はそこで旺んな宴會を開きました。

その宴會の眞最中——。

これは、また、一體、どうしたと云ふのでせう？

夜になつて、モスクワの街の一角には、突然、火の手が揚りました。

「火事だ！ 火事だ！ 火事だ！」

たま／＼その夜は烈風が吹いてゐたのです。見る見るうちに猛火は満都を包んで了ひました。

フランス軍は防火に努めなければなりませんでした。

モスクワの街が燃えてしまつては、この嚴寒に、五十萬のフランス軍は眠るに家なしと云ふ有様でした——それがロシア皇帝の策略だつたのであります——今は、フランス軍も袋の中の鼠同様です。

食糧も焼き盡されるであります。

「しまつた！」

流石のナポレオンも、この時になつて、始めて敵の策略を知つたのであります。

「退却だ！ 退却だ！」

ナポレオンはもうどうすることも出来ませんでした。

火は四晝夜の間燃え続けました。

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

猛火は狂ひに狂ひ、さしも華麗のモスクワも灰燼となつてしまひました。火は消えました。

一面焼野原です。

焼跡の上に雪は降り積つてゐました。

身を切るやうな寒さ……。

食糧は全く盡きてしまひました。

この寒さと飢えとで、どうして、フランス五十萬の大軍が生きてゆけませう。

「退却だ！ 退却だ！」

ナポレオンは兵士達を勵ましました。

が、時既に遅し——。

この時、忽然、このフランス軍に攻め寄せて來たのは慄悍決死のコサツク騎兵でありました。

フランス軍はさんざんな敗北です。

今は戦ふ勇氣さへもありません……。

四離滅裂！ 右往左往！

もうどうすることも出来ません。

「退却だ！ 退却だ！」

ナポレオンは三度叫びました。

百戦百勝の猛將、全歐の覇者ナポレオンも、悄然として、モスクワの地から退却しなければなりませんでした。

露軍は逃げるフランス軍のあとを追ひました。

「今だ！ ナポレオンを生捕るのは今だ！」

露軍はナポレオン一人を目がけてゐます。追撃いよいよ急。

ナポレオンも今は絶對絶命、やつとのことで、一方の血路を破つて、逃げのびました。

無慘！ 五十萬の精銳は雪に死屍を埋めたのであります。

悲惨凄絶！

何といふあはれなことせう。

あ、英雄の末路、彼も亦其の例に洩れなかつたのであります。

彼はやつと身を全うして、生命からしく、首府巴里に逃げ歸りました。

が、……これまでかざくの凱旋と較べて、何と云ふみじめな有様でしたらう。

敗軍の將は兵を語らずと云ひます。

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

ナポレオンは馬上に悄然として巴里の都に歸つて來たのであります。

しかし市民達は誰一人、彼のために萬歳を唱へる者もありませんでした。

あゝ、この末路。

ナポレオンは天を仰いで嘆息しました。

彼は更に數十萬の大軍を集め再びドイツに軍を進めましたが、運命はもうどうすることも出来ません。この時、既にイギリス、ロシア、ドイツ、スエーデンの聯合軍は組織されてゐたのであります。

ナポレオンの敗戦に力を得たのでありませう。

「この機を失ふな！」

「フランスを亡ぼせ！」

「ナポレオンを殺せ！」

その聲、今は、全歐を壓すると云ふ有様であります。

翌年の春にはフランスの首府巴里も聯合軍のために陥られました。

ナポレオンを苦しめたのは、この外敵ばかりではなかつたのです。

「皇帝の位を退け。」

「フランスを此の苦患から救ひ出せ。」

貴族達は口々にナポレオンに迫るのでした。

今はナポレオンも運命の盡きと見えました。

あゝ、人生は無常！

積年の榮華も今は一朝にして夢と化し去つたのであります。

「こゝに於て、列國は會議して新にフランス王を立て、更に全權をウィーンに會して、ナポレオンの侵略せし領地を各國に返し、新に境界を定めしむ、云々」

此の段は晩年のナポレオンです。ナポレオンの失脚、エルバ島の配流、同島の脱出、さてはワーテルロトの大戦、セントヘレナの配流、ナポレオンの末路も亦儼然なものでした。こゝら附説の資として、拙著讀本物語の中から次の數節を引用して置きませう。

花に千日の紅なし

ああ、運命の轉變！

第十課 ナポレオン

花に千日の紅なく人に萬年の榮なし——。

歴史は常に榮枯盛衰を語つてゐます。

不世出の英雄ナポレオンが巧みに機運に乗じてよく風雲を叱咤し、忽ちにして歐洲の中原に颯爽たる雄姿を現はすや、あだかも燎原の火のやうに、その勢を以つて欲するがまゝ、におのれの持てる武略を揮ひ、一躍して伊太利司令官となり、再躍第一統領に進み、三躍遂に佛國皇帝の榮位に登つたのであります。

そして列強の帝王を頤使し——。

帝王中の帝王となつたのであります。

が、露西亞遠征の失敗以來、時利あらず、權勢既に地に落ちて、今は施すに道なく、遂に涙を揮つて帝位を退かなければならなくなつたのです。

のみならず彼は孤島エルバに追放される身ともなつたのであります。

運命のいたづらか——。

昨日までは勢威ならぶ者もなき全歐洲の盟主も、今日は空しく孤島の配所に多恨の日を眺める身

——これこそ運命のいたづらとも云ふべきものでありませう。

千八百十四年の春四月です。

彼は多年自分と辛酸を俱にした近衛軍に盡きぬ名残りを惜しんで、フォンターヌブローの宮殿をあとにして、ブレチコーの港に到着しました。夕刻です。港内に碇泊してゐた一隻の英國軍艦はボートを派して彼を海邊に迎へました。斯うして、その夜、彼はいよいよ佛國をたつてエルバの孤島へ流竄せられる身となつたのであります。本艦へ乗り移ると、二十一發の砲音は、轟々として、靜かな夜に響き渡りました。

「ああ、懐しきフランスの母國よ！」

ナポレオンはその二十一發の砲聲をどう云ふ思ひで聞いたことではありませんたらう。

感慨無量！

とばかりでは、その時のナポレオンの氣持を云ひ盡したものは云へないであります。

い、月夜でした。

皎々たる月は清き光を放つて艦上を照らしてゐます。

「ああ、さても、懐しき我がフランスの母國よ！」

ナポレオンは甲板上に立ち盡して、飽かず母國の夜景を眺めてゐます。

一隊の騎兵はその海濱に整列してゐます。

ラツバの音。

第十課 ナポレオン

軍馬の嘶。

親愛なる舊主ナポレオン皇帝に最後の別をなさんとして集まり來れる群衆の聲。

凄愴の念。

斷腸の思。

ナポレオンの頬には涙が光つて居りました……

風吹き荒みて浪高きその響！

船の動搖が激しくて、従者等は頗るそれに悩んでゐましたが、ナポレオンは、ひとり、甲板上に立つて、思ふまゝに海氣を呼吸してゐたのであります。悠々迫らざるその態度！ この態度には居合せた人々も嘆稱したと云はれてゐます。

故國を發つてから五日——

艦はつゝ、がなくポルト・フェラジョーの港外に着きました。これはエルバ島の首都であります。

ナポレオンはただちに同市に上陸しました。多数の文武官が列をなして港に彼を歓迎したのであります。

市長は銀製の盆の上に市の鍵を乗せて、これをナポレオンに捧げました。彼は市廳に向つて進んだのであります。この時のナポレオンは緑色の制服に白色のズボンと云ふいでたちで、エルバ島の

徽章である三箇の蜂をつけた帽子を戴き、その胸には燦として輝くレジオン・ドモール勳章を帯びて、まつききに進んでゐます——これが敗軍の將ナポレオンとどうして見えませう？

街路は美しい草花で飾らはてゐます。

市民達はこの不世出の英雄を見ようとして、路に堵をなして群集してゐます。

一行は街の中央にある市廳に到着しました。

玉座は既に準備してあります。

聖歌の啾唳たる音。

かくてナポレオンは配竄の身であり乍ら、今はこの孤島の王者だつたのであります。

彼はその玉座に立つて、エルバ島の古い歴史を語りました。

その該博なる智識は聞く者をして驚嘆せしめたと云ふことであります。

この日、ナポレオンは寺院を訪ふて、一般の市民に謁見を許しました。

「ナポレオン萬歳！」

いたる處でその聲をきゝます。

市民達はその夜全市に燈火を晝の如く點じて、この新君主の來着を心から喜び祝したのであります。

ちやうど、その日は、ルイ十八世が巴里に入つて、これまでナポレオンが住んでゐたチュレリイ宮殿で眠つた夜でありました。

榮枯盛衰、彼も亦感慨無量だつたに違ひありません。

その翌日から、ナポレオンは侍臣を伴つて、十数日間、あまねく島内の諸村落を巡察しました。

「ナポレオン萬歳！」

島内、到る處で、住民達の歡呼のその叫び聲をききます。

住民達は彼の萬歳を祝すのであります。

彼はその巡察中、主として注目したのは、島内の要塞と防護の地點でありました。

ナポレオンは假の宮殿としてゐた市廳の住居が、自分に不適當であるのを知つて、市外の、とある丘の上に立つてゐる風車場をとり毀して、みづから設計した一屋を建築しました——これは廢車宮（バラック・オデイ・ムリニ）として今の世にも語り傳へられてゐるものであります——

その宮殿は二階建てでした。階下には庭園に面した廣間があります。その他、舞踏室、浴室、球撞室、食堂寢室などもあります。また、階上は大きな客室で、八箇の窓があり、その内の四個の窓は市街に向ひ、他の四個の窓は海に臨んでゐます。

云ふまでもありません。

こゝで、彼は捲土重來の計劃を立てようと云ふのであります。

それから旬日を出でずして、微少なりと雖も、彼はこのエルバの島に、陸海軍を設置しました。かうして彼は、淋しくはあつたが静かな、そして平和な、エルバ島の生活の續けたのであります。

静閑な日が過ぎてゆきます。

彼は毎朝三時か四時頃に起きて、書齋に這入つて讀書します。八時頃再び寢室は這入つて、また十時頃に起きて來ます、それから島内の各地を巡察するのです。

或る英人はその頃のことを次のやうに書いてゐます——

予は生來未だ嘗て彼の如く活動と堅忍の人を見たることなし。彼は斷えず活動するを大なる快樂と感ずるに似たり。その従者にして彼と行動を共にして、甚だしく疲勞する場合すくなくならず、予の如きもその一人なり。彼はその健康の續く限り勞作して擲ます。嘗て彼は炎暑の日、午前五時より午後三時に至るまで徒歩にて軍艦を訪ひ、それより馬に乗ること三時間に及び、是れ疲勞を癒せんがためなりと云へり……。

ナポレオンは眞に精力絶倫の英傑だつたのであります。

エルバ島には静閑な日が續きました。

或る日のことでありました。

ナポレオンの母親は、我が子のエルバの孤島に流さるゝを聞くや、その不幸を慰めようと思ひ立つて、夏も八月、六十餘歳の老齡にもかゝらず、はるばるフランス本國からこの孤島へナポレオンを訪ねて来たことがあります。

航海中、彼女は自分の乗つてゐる船のマストの上に登つて、遙かにエルバの島のはうを眺め乍ら、「我が子が配所の月を眺むる悲慘の邸宅はいづこぞ？」と云つて叫んだと云ふことであります。

この母とこの子！

眞に涙ぐましい劇的場面ではありませんか。

ナポレオンは、少年時代からたいへんな母親思ひだつたのであります。

生別か死別か

さて、エルバの孤島に配所の月を眺める身の、その後のナポレオンはどうしむたのでありませう？

ナポレオンはさきにフォンテーヌブローの條約で、佛國政府から歳費二百萬法を受けることになつておりましたが、佛國政府ではその條約を忘れたやうな顔をして、この契約を履行しないのであり

ます。これがために、エルバに於ける彼の財政は甚だ窮乏に陥りました。一方、エルバに於ける歳入は極めて僅少で、さきの條約を佛國政府が履行しない以上は、到底、ナポレオンはその財政を維持してゆくことが出来ませんでした。このまゝに放置してをいたら今二三ヶ月のうちに破産しなければならぬやうな状態となりました。

ナポレオンは政府に條約の履行を要求した書面を送りました。

その返書は極めて曖昧なものであります。

「御身はエルバ島にて生活し得る資財を有する間そこに滞留すべし。且つフォンテーヌブロー條約の違反は、是れ政府の犯罪にあらずして、ただ一種の誤りである」と云ふやうな曖昧な返事だつたのであります。

當時のナポレオンがどのやうに財政の窮乏を感じてゐたかは、一英人の書いた手記によつても想像されませう。それには次のやうに書いてありました。

ナポレオンの財政は非常に窮乏し、流竄の際佛國から持ち來れる金は既に消費し盡しぬ。而かも佛國より受取るべき歳費は六ヶ月を過ぐるも未だ來らず、是れ實に厭ふべきことなり。彼は佛國を去る時、貴重なる一切の物品及び寶石等の私財を毫も持ち來らざりしを以て、その窮乏は一層甚だし。彼はエルバよりセント・ヘレナに移さるべしとの噂あるも、彼は武力にあらざ

第十課 ナポレオン

れば斷じて他に去らずと云ひたり……。

その頃のことでありました。

ナポレオンを更に遠島トリニダッドに流竄しようとする秘密會議はウキーンに開かれたのであります。

また、英國政府は佛國政府に密書を送つて、

「コルシカの人食鬼（これは勿論ナポレオンのことを云つたのです）はトリニダット島に送るよりも、寧ろサンタ・ルシア島へ移した方がよい。トリニダット島は風光佳絶の健康地だが、サンタ・ルシアは絶海の孤島で、世界から速かに彼を除き去るに恰度の地である。」と云つて來たのです。

ナポレオンを亡き者にしようとする密書でありました。

また、或る者は彼を獄に投じようとする主張し、また、或る者は彼の暗殺さへ企て、したのであります。

そればかりではありませんでした。

佛國政府は條約上の歳費を彼に支拂はうとしなかつたのです。

のみならずオーストリア皇帝は自分の皇女であるマリア・ルイゼ（ナポレオンの愛妻）とその孫

ローマ王（ナポレオンの一人子）とを彼から奪つて了ひました。

ナポレオンのその時の氣持はどうであつたでせう？

四面楚歌の聲。

それはまさしく斯う云ふ時のナポレオンの氣持を云ふのでありませう。

また、エルバの島ではナポレオンの身にまつはるいろいろな噂が持ちあがりました。

衆説紛々。

到る處の咖啡店や街路はその噂で持ち切りと云ふ有様でありました。

「ミユラー將軍來りて皇帝と共に伊太利に赴く可し、」とか。

「マツセナ將軍は皇帝を佛國に伴ひて最後の活躍を試む可し、」とか。

「トルコは皇帝を迎へて征露軍の總帥たらしめんとす、」とか。

噂はとりどりでありました。

その噂は自然ナポレオンの耳にもはいりました。

捲土重來——彼のその氣持が英國や佛國政府にきこえればきこえる程、彼の身には危害が迫つて來るでありませう——ナポレオンもそれを知つてゐた筈であります。

ナポレオンはいつも微笑して斯う云つてゐます——

「皇帝は既に死せり、予は死人なり、最早何事も爲すこと能はず」と云ふのです。

果してナポレオンは既に死人同様だつたでせうか？

ごらんなさい。

やがて胎蕩たる春風がエルバの孤島を訪れる頃――

彼は書齋の讀書に倦むと、島内の道路を改築したり、尙、養蠶をするために數百本の桑樹を植ゑつけさせたりしました。また、或る時は、植物學や農學を研究し、みづから弊衣を身にまとうて、一農夫となり、鋤を手にして田畑を耕したりしました。

――果して、ナポレオンはこのエルバの孤島で、このやうにして、老ひ、且つ朽ち終る人であつたでせうか？

その頃のことでありました。

クオルリーと云ふ一人のフランス人が、飄然としてエルバの島へナポレオンを訪ねて來ました。

會見の密議は二日間も續きました。

その密議とは？

無論誰一人知る人もありませんでしたが、後にそれと分りました――それはナポレオンのエルバ脱島だつたのであります。

フォルリーは佛國政府の一官吏に過ぎませんでしたが、前々から、ナポレオンの大なる崇拜者だつたのであります。彼は表面上はエルバの孤島に舊主を訪ねて敬意を表すると云つてゐたのであります。その實は、以前にナポレオンの腹心の臣であつたマレーから或る使命を帯びて來たのであります。フォルリーはフランスを出發する時、マレーに向つて「皇帝が若し予に脱島の好機なるや否やを訊ねたとしたら、予はどのやうに答へたらいいであらう」と相談しかけるやうに訊ねたのであります。その時、マレーは斯う答へたのです。

「予は斯かる重大問題に對して忠言を與へることが出來ない、たゞ御身は皇帝に佛國刻下の形勢を説明すればいいのである、さうすれば皇帝はみづから最良の手段を講ぜられるのであらう」と答へたのです。

けだしこのマレーはずつと以前からナポレオンの胸の裡にあるものをよく知つてゐたのであります。

ナポレオンは初めからエルバで餘生を送らうと云ふ氣持はなかつたのです。

その上、歐洲列強の迫害の計劃が頻々として自分の耳へはいればはいる程ナポレオンはますます脱島の時機を得たいと云ふ氣持に傾いて來たのであります。

ナポレオンはフォルリーと會見して、佛國刻下の形勢をつぶさに聞きました。

彼はいよいよ最後の決心をかためたのであります。

——斯うして脱島の準備は急がれたのです。

やがて脱島の準備は出来あがりました。

その日、ナポレオンはいつものやうに母親や妹などと一緒にミユリニ宮で晝飯を食べてから、加留多などをして遊びました。

が、急に思ひ立つたやうに、彼は、突然、部屋を出て庭園へ行きました。

と何かを思ひつめたやうなナポレオンの顔色です、——子を見ること親に如かず——母親はすぐにナポレオンの胸の底を察したのです。

母親は庭園へ出たナポレオンのあとを追つて來ました。

「何事もこの母に打ち明けよ」と母親は云ひました。

「私は、明朝、エルバを去つて巴里に行かうと思つてゐます。」

「……………」

驚くと思ひの外、母親は顔色ひとつ變へません。

「母上はどうお考へですか？」とナポレオンは訊きました。

母親はナポレオンの額に接吻しました。

「我が子よ、御身若し死せざる可からずとすれば、御身の空しく安逸に朽つることを許さざりし天は、必ずや御身の毒死を許さずして、その戦死を宥し給ふべし。是れこの母の望むところなり」と母親は云ひました。

寔に立派な意見でした。……

翌朝、ナポオレンはエルバを脱島する意志を部下の者に告げました。

然し島民には何事も知らせませんでした。

「佛國上陸までは秘密を守れ」とナポレオンは部下の者に命じたのです。

その日はわざと近衛兵を農園に出して労作をさせた程でありました。

ナポレオンは懐しき母と相抱いて、別離を惜しみました。

生か死か。

生別か死別か——誰がそれを豫言し得ませう。

南歐の春の夜、月は繪のやうに波に浮んでゐました。

海上、月夜を縫うて、遂に、ナポレオンはエルバを脱島したのであります。

再び大舞臺に立つ

エルバ脱島。

それは極めて危険多き航海でありました。

エルバとコルシカとの間の水路は、當時四隻のフランス艦隊に依つて警備されておりました。尙、その上に、數隻の英艦は絶えずその近海に出没してゐたのであります。

ナポレオンにとつては實に危険な、しかも冒險な航海でありました。

彼は各艦に命じて別々の航路をとらしたのであります——たとへばナポレオンがエルバを脱島してゐることがわかつたとしても、扱て、どの船にナポレオン自身が乗つてゐるかを知らせないためだつたのです——かくて、ナポレオンを坐乗してゐるアンコンスタン號がコルツ岬附近に達するや、信號兵は突然、

「前方より一隻の佛艦來れり！」

と、報告したのであります。

艦長は吃驚りました。

「陛下よ！ 危険迫れり！」と歎びました。

そして速かに航路を變ずるか、又は引き返した方がいゝと云ふのです。

然しナポレオンは更に動く様子も見えません。

「恐れること勿れ！」と言。

「危険なり！」と艦長は繰り返します。

「このまゝ、船を進めよ、彼若し我れを砲撃せば、我も亦これに應戦せんのみ。」とナポレオンは云ひました。

彼はいつでも死を覺悟してゐるのです。

佛艦はいよいよ近づきました。

その佛艦と云ふのは「微風號」でした。

この「微風號」の艦長と、ナポレオンの坐乗してゐるアンコンスタン號の艦長とは、昔からの友達だつたのであります。

「貴艦はいづこへ行く？」と微風號から信號がありました。

「予はゼノアに航せんとす。」

と、嘘を云つたのです。

微風號のほうではそれをすこしも疑はなかつたのであります。

「偉人ナポレオンはエルバの島にて健在なりや？」と、また、信號で訊いて来ました。
「頗る健在なり」と答へました。

なる程、健在には違ひありません。

斯うして二艦は無事に通過し去つたのであります。

佛國は近づいた。

ナポレオンは甲板の上で一條の演説をしました。

「……史上如何なる實例を以つてするも、朕をしてこの舉を企てしむるに足らず。朕は人民の驚愕、輿論、同名國に對する憤懣、及び、我々軍隊の朕に對する信愛を思つて、敢てこの不意の計劃をなしたのである。今や人々は種々の隱謀を企てつゝあるを以つて、朕はこれに先だつて我が目的を達せんとするのみ。見よ！ 朕は一彈をも發せずして巴里に到着することを得るであらう」と語りました。

ナポレオンの手には二通の宣言書がありました。

一通は佛國民及び佛國軍人に與ふる書。

一通はエルバからはるばる伴つて來た將卒に與ふる書——彼等は、こゝで、彼のために死を賭して奮戦することを誓つたのであります。

順風は吹いて來ます。

船は矢のやうに走ります……。

遠く地平統上の彼方には、雪をいたゞいたアルプスの峻嶺が白く日に輝いて聳え立つてゐます。

彼はあのアルプスの嶺を越えた日のことを思ひ出しました。

「余の辭書には不能の文字はない。」

と、彼が勇ましく叫んだのはあの時のことではありませんか。

不能の文字！

彼が持つてゐる辭書には「不能」の文字は見出せなかつたであります。

やがてナポレオンの艦隊はアンチープ岬沖に集合しました。

各艦にはその時エルバの國旗がとりはづされて、新たに、佛國の旗が掲げられました。

艦の人々も一齊にフランス帽を冠りました。

「ナポレオン萬歳！」の聲。

暫らくは鳴りもやまずと云ふ有様です。

僅かに千二百餘名の兵士。

然しその意氣は戦はずして既に天を衝いてゐます。

第十課 ナポレオン

兵士達は續々とボートに分乗して、バベル附近に上陸しました。その兵士達の中にはボートの歸りを待つ間遅しと、海中へ飛び込んで、泳いで上陸するものもあると云ふ有様であります。

全員、上陸を終つた頃は、日も暮れかけてゐました。

彼等は海岸に繁茂してゐる橄欖の林でその夜は露營しました。

その時のナポレオンの態度は實に悠々然としたものであります。

彼は直ちに一隊の兵士をカンヌへ派遣したのです。そして同地の一切の通信機關を停止させました。と云ふのは、云ふまでもなく、佛國政府の準備を懸念したからであります。

それからその土地では、出来る限り多數の馬を買はしめました。

「朕は一滴の血をも流さずして我が帝位を回復せんと欲す。愛する兵士達よ。朕が意に背くこと勿れ」と、ナポレオンは兵士達に云ひ渡しました。

ナポレオンはその夜兵士達に武器の手入れを命じました。

美食を與へました。

且つ二週間分の給料をも渡しました。

その夜もいゝ月夜でした。

カンヌに派遣された兵士達の一隊は、その月光を利用して同地に到着したのであります。

「海賊來れり！」

「すみやかに門を閉ぢよ。」

「門を鎖せよ。」

カンヌの住民達は狼狽して口々に叫びました。

兵士達の一隊はまづ市廳と郵便局を襲ひました。

翌朝、まだ、夜も明けきらぬ未明——。

ナポレオンは軍隊を率ゐてグラッセの街道へと進みました。

沿道の一村落に到着しました。

寒い日でした。

ナポレオンは兵士達に命じて篝火を焚かせてみました。と、彼とはかねて顔馴染のヴァンス公モ

ナコーが、どこかの歸途と見えて、馬車に乗つて通りかゝりました。

モナコーはナポレオンを見て吃驚りしたのです。

「閣下よ、いづこへ行き給ふ？」とモナコーはきゝました。

「モナコーよ、君はいづこへ？」と云つてナポレオンは訊きました。

「予は歸宅の途中なり。」

「お、モナコよ、このナポレオンも亦た歸宅の途中なり。」

「歸宅とは？」

「巴里の宮殿へ——」

ナポレオンはさう云つて微笑するのでした。

ナポレオンは尙も軍をグラツスに轉けて急がせました。

まづ、先發隊がさきに行きます。

先發隊はやがてグラツスの市に到着しました。同市は僅か三千の守備兵を持つてゐるに過ぎません。市民達はその先發隊の到着を見て、がやがやと、街路に集合して騒ぎたてゝゐます。

市長が出て來ました。

「糧食を用意せよ」と先發隊は市長に命じました。

市長にもこれは意外です。

「御身は如何なる君主の名に依つて、我等に糧食を要求するか」と市長は訊ねました。

「皇帝ナポレオン！」

「ナポレオンは我等の君主にあらず、我等は我等の君主を有してこれを敬愛す」と市長は答へました。

「黙れツ！」

「……………」

「我等先發隊は御身と政治を談せんがために來たのではない。ただ、糧食を得んとして來れり。我が軍隊は直ちにこの地に到着するであらう」と云ふのです。

市長と政治を談せんとして來たのではないと云ふのです。

「……………」

市長には返す言葉もありませんでした。

いやいや、さうではありません——市長には最早それを拒絶する勇氣がなかつたのであります。

ナポレオンの軍は進軍を續けてゐます。

グラツスの市を去る一哩のところロツヤヴィギヨンと云ふ高原があります——今ではこれをナポレオン高原と云つてゐます——その高原に到着しました。

「ああ、皇帝ナポレオン！」

「我等の皇帝——」

高原へ集まつて來た附近の住民達は、さういつてナポレオンをとりかこみました。

住民達は手に手に莖の花を持つてゐます。

——彼等はナポレオンがこの花を一番愛してゐたことを知つてゐたからでありませう。その時、一人の盲目の老士官がその妻に手をひかれて、ナポレオンの前に進み出ました。

「ああ、懐しき我が皇帝よ！」

老士官はナポレオンの前に膝まづきました。

「懐しとは？」

ナポレオンは不思議さうに盲目の老士官を見つめました。

「アウステルリッツの戦役でこの名譽ある負傷をいたしました……」と云ふ返事です。

その戦役はナポレオンにも思ひ出深いものでありました。

ナポレオンの眼には涙が光つてゐます。

「尊顔を拜することあたはず、せめては陛下の御手に接吻を許されよ」と老士官は云ひました。

ナポレオンは両手を差し出しました。

老士官はむさぶるやうにその両手に唇を押へつけたのであります。

——老士官の眼から涙が流れ落ちてゐたのは云ふまでもありません。

ナポレオンはやがてグレッツツの市に到着しました。

「皇帝萬歳！」

ナポレオンは佛國上陸以來國民達のこの叫び聲を、その日、始めてきいたのであります。

その時のナポレオンの氣持はどうであつたでせう？

彼は日に夜をついで軍を巴里に急がせます。

道々の村々町々！

到る處でナポレオンの軍を觀迎しました。

そればかりではありません。

我も我もとナポレオンの軍に従軍する將士達が出て來ると云ふ有様です。

かつて、ナポレオンは「朕は一彈をも發せずして巴里に達するを得可し」と云ひました——が、

全くその通りでした。

最早、ナポレオン上陸の報は巴里にも到着してゐます。

一通の密書がどこからかルイ十八世に手交されたのであります。

が、ルイ十八世は更に驚いた様子もありません。

「ナポレオンがプロヴァンスの海岸に上陸したと云ふ報告の書狀である。この書狀を陸軍大臣に渡せ、さうすれば、陸軍大臣は相當な處置をとるであらう」とルイ十八世は云ひました。

巴里の政府でもいろいろとそれに備へるところがあつたやうであります。

秘密會議も開かれました。

然し、もう時は遅れてみました！。

ナポレオンの進軍するところ、「皇帝萬歳！」の聲は、佛國の津々浦々に響き渡つてゐたのであります。

ナポレオンは政府の軍隊に近づきました。

「佛國の將士達よ、汝等は朕を知らざるか！」とナポレオンは叫びました。

彼は自分の外套の胸を開いて、毅然としてその胸を指さしてゐます。

「若し汝等のうちにその皇帝を殺さんと欲する者あれば、そはいと易きことなり、朕はこゝに立てり！」

「……………」

佛國の將士達は返す言葉もありません。

その刹那！

「皇帝萬歳！」の聲——

その叫聲は俄然として敵の陣中に起つたのであります。

隊伍は忽ち亂れました。

「ナポレオン萬歳！」

「ナポレオンは我等の皇帝だ！」

「ナポレオン萬歳！」

ナポレオンは沈痛な語調で一場の演説をしたのです——

「汝等軍人よ。朕は少數の勇士を率ゐてエルバの孤島を脱して汝等の前に來れり。これ、けだし、

朕が汝等と國民とを信頼してゐるからである。ブルボン王家、現佛國政府は國民の賛同を得たるものに非ざるが故に正當のものに非ず。汝等の父祖はブルボン王家の政治時代に於て、貴族僧侶等の專横によつて、塗炭の苦しみを受けたではないか、かの、フランスの大革命の慘劇は何故に起つたか、その慘劇を救ひ、我がフランスを世界の覇たらしめたのは誰だ？——汝等はそれを忘れたのか——朕は汝等の皇帝である！」

「然り！」

「ナポレオン萬歳！」

誰も彼も異口同音に叫びました。

「朕を愛する者は朕と共に來れッ！」

ナポレオンは聲を勵まして叫びました。

「皇帝萬歳！」

またしてもその叫聲！

將士達は續々としてナポレオンの周圍に集まりました。

「捧げ銃！」の命を發しました。

そしてナポレオンはかねてみづから用意してゐた秘藏の鷲章旗を取り出したのです——その鷲章旗！ その旗の向ふところ敵なし、往時のナポレオンを將士達は誰も彼も思ひ出したことでありませう——兵士達は雀躍して喜びました。

鷲章旗の萬歳を唱へました。

彼等はその軍旗を柳の枝につけて、先頭に押し立て、進軍したのであります。

「皇帝萬歳！」の聲。

「亡びよブルボン王家！」の聲。

「自由萬歳！」の聲。

聲は聲に和してゆきます。

——その聲は天地を震撼せしめたであります。

ナポレオンがリオンに到着した時は、まるで、もう、彼がフランスの帝位を回復したもののやう

な權勢を得てゐたのであります。

市民達の熱烈な歡迎の宴を受けました。

市民を始め、市吏も法官も僧侶も學者も、彼に忠誠を盡す誓言を立てたのであります。

彼は文武官を任免しました。

そして次のやうな諸令を發布しました——

一、國王旗、白色帽章、及び封建の稱號を廢する事。

一、瑞西聯隊及び王室を解放して三色旗を回復する事。

一、ブルボン家諸王族の公有財産を沒收し、同盟軍侵略後佛國に歸り來れる凡ての舊貴族を

國外に追放する事。

一、貴族院及び衆議院を廢止する事。

威風堂々、強勢を極めたものであります。

佛國政府の方はどうでせう！

有名なネイ將軍は、巴里を出發する時、ルイ十八世に約束して斯う云つたのです。

「ナポレオンを鐵檻に入れて國王に獻ずべし。」

また、市民達へは、

「余は生けるナポレオンよりも寧ろ死せるナポレオンを巴里に護送して、市民達の土産となすべし」と約束したのであります。

ネイ將軍は僅かに六千の兵を率ゐて巴里を出發しました。その途中の出来事であります。

ネイ將軍はナポレオンから自筆の親書を受け取つたのです。

「朕は一弾をも發せずして巴里に達せんことを欲す、無益に愛する市民達の血の一滴をも流すを欲せざればなり。」と云ふ文字も、その親書の中には見えました。

「……………」

ネイ將軍はナポオンのその親書を受け取つて甚だ迷ひました。

ネイ將軍と雖ももとはナポレオン部下だつたのであります。

王命に従ふべきか。

舊主に従ふべきか。

——ネイ將軍はそれを迷つてゐるのです。

彼はその夜一睡も眠りませんでした。

彼は部下の將士にひそかに相談しました。

「舊主に従ふべきだ。」と云ふ部下の將士達の意見です。

ネイ將軍も今は意を決しました。

彼は翌朝全軍を整列させました。

軍鼓は鳴ります。

ネイ將軍は聲を勵まして、

「將士達よ、余は永遠にブルボン王家を棄てたッ！」と叫んだのです。

するとどうでせう。

その刹那、「ナポレオン皇帝萬歳！」の聲がその將士達の間にも、俄然として、轟き渡つたではありませんか。

ネイ將軍は更に言葉を續けて云ひました。

「かつて國民の採用せる正當の皇帝は、今また帝位に復せんとす。この善美の國に君臨するの權は、ひとり、皇帝ナポレオンの有するところなり。余は今や御身等と共にこの皇帝を巴里に導かんとすと宣言しました。

將士達は喝采しました。

將士達は歡喜の餘りネイ將軍を抱いて、ナポレオン皇帝に互に忠誠を盡すべきことを誓つたので

第十課 ナポレオン

ありました。

斯くて、ああ、遂に、ナポレオンは一彈をも發せずして、ネイ將軍の案内で、巴里に入城することを得たのであります。

ナポレオンとネイ將軍とは久し振りの對面であります。

ナポレオンは云ひました。

「朕が親愛なるネイ將軍よ、朕を抱擁せよ、朕は御身を見るを楽しみとなせり、何等の辨解も説明をも要せず。」

「陛下よ、小官深く陛下を愛す。されど小官は何物よりも國家を愛す。小官は陛下が何物よりも佛國の福利のために努力せらるべきを信ず。」とネイ將軍は云ひました。

「朕は愛國者なり。」ナポレオンは大きくうなづきました。

斯うしてナポレオンは再び歐洲の大舞臺に立つ身となつたのであります。

最後の活躍

佛國ブルボン王室では、始め、ナポレオンがエルバ島を脱して佛國に上陸したと知つた時、「彼今に到りて何をなさんとするや」と云つて輕蔑してゐたのですが、それから旬日を出でないで、

沿道の住民が歡呼してナポレオスを迎えるときいた時の、ブルボン王室の狼狽はどうでありませう。

あらゆる方法は講ぜられました。

然しそれはみな徒勞に終るのであります、のみならず、ますます、ブルボン王室にとつては、不利なことばかりが起つて來ると云ふ有様です。なぜと云ふに、ナポレオン征討のために派遣せられた軍隊が、その中途から、ネイ將軍を始め、誰も彼も申しあはしたやうに、反つてナポレオンの麾下に投じて、佛國王室の敵となるからであります。

巴里の市民達も今はナポレオンに傾いてゐます。

市のところどころには、次のやうな諷刺的な貼札をする者さへあつたと云ふことです——

「ナポレオンはルイ十八世に向つて曰く、親愛なる我が兄弟よ、最早これ以上余に軍隊を送るは無益なり、余はこれにて充分なり。」と云ふ貼札であります。

送る軍隊も送る軍隊も、次から次へとナポレオンの味方をするを諷刺的にからかつたものであります。

千八百十五年の春です。

王黨員の妻子は續々として巴里を通れると云ふ有様です。

第十課 ナポレオン

街道は革命當時の光景を思ひ出させます。

國王は始め強硬な態度をとつておりましたが、今では、鷲の前に於ける小雀と何等異なるところもありませんでした。

戦々恟々。

ですから逃走の策を講じてゐます。

國王もいよいよ巴里を出奔することになりました。

その日――

天氣晴朗。

太陽はまるでナポレオンのこの再度の活躍を讚美するかのやうに、赫々として光いかゞやいてゐます。

「斯かる晴朗の白日の下には到底不名譽なる遁走をなすことを得ず。」と云つて、王は嘆息をもらしたと云ふことであります。

それがためか王は夜になるのを待つて、巴里の市を逃げ出したのであります。

各大臣や王族もこれに従ひました。

彼等の遁走――その狼狽は極度に達してゐたものと見えます――彼等は政府としての重大な書類

を取出すことを忘れて、そのまゝ、遁走した程でありました。

夜もいと更けてゐます。

チュイレリーの宮殿は今死のやうに静かであります。

ナポレオンがこのチュイレリー宮殿の玉座に、一年の星霜を経て再び座つたのは、國王の遁走したその翌日のことであります。

多數の群集は國王の末路を感みました。

と、同時に、ナポレオンの復活には滿腔の歡喜を絶叫したのであります。

市廳の屋上にも三色旗が翻へりました。

街の店々はいづれも國王の薔薇の花の飾を捨て、ナポレオン帝の鷲や蜂の旗號で裝飾されるといふ騒です。

宮廷内の裝飾も數時間の後全く一變しました。

その日は晩がたから、霧が深く、小雨さへ降り出したのでありますが、市民達は、白晝のやうに輝いてゐるチュイレリーの光景と、彼等が渴仰してゐる皇帝の再來とを見ようとして、雲霞のやうに集合して、民衆達は夜が明けるまで宮殿の前を去らなかつたと云ふことであります。

「皇帝萬歲！」の聲。

その夜のナポレオンの夢は、どうであつたでせう？

多分、彼は、多年住みなれた自分の書齋で、會心の微笑を洩らしたことでありませう。

——ごらんなさい。

彼はエルバの島を脱して、佛國に上陸してから、僅々二十日間の間、巴里に入城し、一滴の血も流さずして帝位を回復したのであります。

彼はたゞちに各大臣を任命しました。

翌日の巴里の新聞は、

ブルボン王家は昨夜遁走せり。

今日の巴里は安全と歡喜の光景を呈して、皇帝萬歳の叫聲は四方に起る。

と云ふやうな記事を掲げてゐました。

斯うして復活した帝國の組織は全く完成したのであります。

ナポレオンは北方に亂の起ることを豫想してゐました。と云ふのは佛國の北方には多くの王黨員の巢窟があつたからであります。そればかりではありません。英國の兵やベルギーなどの兵が彼等の反亂を援助することも懸念してゐたからであります。

ナポレオンは國王を國外に驅逐しようと云ふ計劃を立てました。そしてまづ一將に命じて、一隊

の騎兵を率ゐさして、巴里及びその附近から國王軍の戦隊を追撃したのであります。

巴里を遁走した國王は、始め王黨員の巢窟のあるフランスの北方へ逃げようとは思つたのですが、途中から心を變じて、英國に亡命しようと決心しました。

それから一週間とた、ないで、フランスの大部分は、この新政府を承認して、三色旗をかゝけることになりました。

が、歐洲の列強はこのナポレオンの再起の知らせを聞いて、どのやうにか驚いたことでありませう。

ウキーンに列強の會議は開かれました。

はじめは「羽翼を断たれた鷲に何程のことが出来よう——」などと云つてゐたのではありまが、今はそれどころではありません。

愕然！

爲すところを知らずと云ふ有様です。

その會議の席上では、

第一、ブルボン王家の救済。

第二、ナポレオンに關する一般國民への宣言。

——この二つが熟議されたのであります。

その結果、次のやうな宣言書が發表されたのです。

ナポレオンはフォンテーヌブローの條約を破棄してエルバ島を脱したり。(その實この條約をその歳費問題でナポレオンを苦しめたのは佛國政府だつたのであります)よつて、以後、我等は彼を法律の保護外に置き、世界平和の擾亂者としてこれを處刑すべし。

——と云ふ宣言であります。

この宣言は歐洲の列國に異常な感動を與へました。そして眞先に賛同したのは露西亞皇帝其の人であります。

然しナポレオンの恐れてゐたのは、この野心の多い寡帝でもなければ、また、ウキーンの會議でもなかつたのです。ナポレオンが眞實に恐れてゐたのは、彼が統治下にある佛國民のそれなのであります。熱し易いと同時にまた甚だ冷却し易い佛國民——ナポレオンはそれを恐れてゐたのです。

商人にその租税を収めるのをきらう者はないか。

軍隊の懲發を恐るゝ農民はないか。

愛兒の戰場に行くのを悲しむ母親はないか。

——ナポレオンは實にそれを恐れてゐたのです。

が、彼等はその盛んな治道の歡迎と、巴里市民の歡喜とを見て、大いに心を安んじたわけでありましたらう。

當時のイギリス政府ではげしい政争が続けられておりました。

議會では平和論者と主戰論者との二派が出来ておりました。

そして彼等は互に争ひ、互に戦つてゐるのであります。

が、遂に、主戰論者が勝を得たのです。

主戰論者は次のやうな意見を發表しました——

ナポレオンは千八百十四年に一度非常なる窮地に陥いつたが、彼は頑強にして飽くまでをのれの不利なる講和に應じようとはしなかつた。今や、彼は再び帝位に登りて、頗る權勢を得、佛國民また大多數これに悦服してゐる。だから彼はたうてい歐洲列強に有利なる平和の條件を是認することはないであらう。且つ彼の過去の經歷から考へて見ても、彼は赫々たる武勳によつてコルシカの一介の匹夫から皇帝の尊位に登つた、で、その志望決して小ではない。したがつて彼が今後戦争を避けて平和なる晩年を送らうとは殆んど想像することが出来ない。宜しく彼の未だ充分に兵備を整へざる以前に、一舉にして彼を征服すべきである。

——と云ふ意見なのであります。そしてこの偉大なる英雄の再起に恐怖をいだいてゐる諸國は、悉くこの意見に賛成したのであります。

斯うしてナポレオンに對して恐るべき大同盟が成立したのであります。

——これはナポレオンにも強敵です。

ナポレオンはこの大同盟を妨害しようとした。

たまたま、その時、ルイ十八世が巴里を狼狽て、遁走した際、官廷に遺失してあつた或る密書があつたので、それを利用して、この大同盟妨害の目的を達しようと思つたのであります。その或る密書と云ふのは、オーストリアとフランスが聯合して露國を撃たうと云ふことを約束したものであります。

ナポレオンは、これをウキーンにゐた露西亞皇帝の許に送つたのです。露國皇帝の憤慨は云ふまでもありません。

ナポレオンは自分の目的を達しかけたのです。然し露國皇帝も考へました。「大敵前に迫る。今は一項事のために同志互に反目すべき時に非ず」と考へたのです。

皇帝はその密書をオーストリアに送り返して、今後かゝる小策を弄することをやめよ、而して共

に協力して歐洲平和のために盡せ」と申送りしました。

オーストリアは謝罪しました。そしてこの密書はたうとう火中に投ぜられたのです——で、ナポレオンはこの目的を達することが出来なかつたのであります。

ナポレオンも今は意を決しました。

この強敵を前にして——

彼は兵備をさをさ怠りなかつたのであります。

千八百十五年六月一日と云ふ日。

ナポレオンはシャン・ド・メイと云ふところで盛んな觀兵式を行いました。

彼はその時も軍隊に對して熱誠なる訓示を與へたのであります。

そして、みづから鷲章旗を各部隊に授與しました。

「誓つて忠誠を盡す。」それは將士達の誓言でした。

一般の國民とは新たに起草した憲法の遵奉を約束したのであります。

國民歡呼の聲は股々として天地に轟きました。

士氣は横溢!

あたかも往時の全盛時代のそれを偲ばしめる程でありました。

當時のナポレオンの軍隊は、露西亞遠征以來會て見なかつた程の強勢だと云はれてゐます。その年の六月下旬までには五十萬の大軍が鷲章旗のもとに集まりました。

「必ず同盟軍に致命傷を與へ得るであらう。」

さう信じてゐたのはひとりナポレオンのみではありませんでした。

然しそのナポレオンにもたゞひとつの失望をどうすることも出来ませんでした。——それは多年千軍萬馬の間に驍名を馳せてゐた老将の多くが、露西亞遠征の時死んで了つたと云ふ一事でありました——それも今はやむを得ません。彼は年少なる諸將と共に戰場に出でなければならなかつたのであります。

然し、兵士達は、みなみな、

「我等は皇帝のためにきつと敵を征服する。でなければ唯一死あるのみだ」と誓ひました。

彼等は萬死を賭して同盟軍に當ることを誓つたのであります。

斯くてかの有名なウアーテルローの戦は近づきつゝあつたのです……

ウアーテルローの戦

ウアーテルローの戦は近づきつゝありました。

まづ、その戦前に於ける同盟軍の形勢からお話しませう——

一隊のオーストリア軍はフランスの東南に陣して居りました。

十七萬の露軍と二十五萬の奥軍は漸次アルサス・ローレンヌに進軍しつゝありました。

それから十二萬の普軍はリエージュとシャルロアの間に宿營してゐたのです。

英、獨、和、自の根成軍十萬の總指揮はイギリスのウエリントン將軍でありました。

彼はブルツセルとモンの間に滞陣してゐました。

ウエリントンの意氣は大にあがつてゐました。

彼がその時露帝に送つた手紙には、六月の二十日頃から、同盟軍は一齊に攻撃を開始して巴里に向つて進軍すると云ふ意味のことが書てありました。

彼の腕は鳴つてゐたのです。

彼は同盟軍の悠長な作戰計劃に大反對だつたのであります。

ごらんなきい——

ナポレオンの猛烈な進軍に依つて、同盟軍は急にその作戰計劃を變更しなければならなかつたではありませんか。

ナポレオンの作戰計劃は次のやうでした。

第十課 ナポレオン

- 第一、ベルギーに向つて進軍し、同盟軍をブルッセル附近で破る事。
- 第二、而して、ベルギーを同盟から分離して、味方に合同せしむる事。
- 第三、ウエリントンの軍及び普軍を粉砕する事。
- 第四、ルイ十八世を追撃の事。
- 第五、オランダを領有する事。

——この五つでありました。

斯うしてナポレオンはオランダやベルギーから軍資を得ると共に、ウエリントンの敗北に依つて英國內閣の主戦論者に打撃を與へて、平和主義者である民権黨をして内閣を組織せしめようと云ふ企だつたのであります。

ウエリントンは必勝を期してゐます。

と同時に、ナポレオンも亦何を措いても、まづ、ウエリントンを仆さなければならなかつたのであります。

戦の日、兩軍の相まみゆる日——

その日は日一日と近づいて來ました。

ウエリントンが、佛軍の進撃して來るであらうと考へた三道を——それはトルネーとモンと、さ

うしてシャルロワの三道でした——監視してゐた時のことであります。

「佛軍の來襲！」

さう云ふ報告を受け取つたのです。

來襲！

ウエリントンはすくなくから驚愕しました。

彼は狼狽て、前進の命を下したのです。

ナポレオンは初めからこのウエリントンを輕侮してゐました。

「無才無能のウエリントン」と云つたことさへあります。

ザニイで兩軍はまづ對陣しました。

ナポレオンは丘の上に立つて敵の陣地を觀望してゐます。前面の光景は極めて明瞭に彼の双眸に映つてゐます。

遙か彼方には一條の大道が通じてゐるのです。その兩側には田圃が横たはつてゐます。その前方の楕圓形の傾斜地に敵の陣地があります。そのあちこちに村落が點々として見えてゐます。

——暑い日でした。

亂雲は空に搖曳して、遠雷の音さへ聞えて來ます。

第十課 ナポレオン

河が一筋流れてゐます。

その河の向岸が普軍の陣地になつておりました。

ですからそこらには比較的要害の地と云はなければなりません。

そこへウエリントンの軍が到着したのです。彼は普軍がナポレオンの砲列にその軍隊を曝露さし

て、而かも斜地に陣地を張つてゐるのを見て吃驚りました。

「戦はず味方の敗北であらう、何故に斯う云ふ不利の地に陣地を張つてゐるのであらうか。」

さう云つて、ウエリントンは普軍の參謀長に注意を與へた程であります。

かくていよいよ猛烈な戦闘は開始されました——。

佛軍の砲撃頗る激烈。

劍戟相磨すると云ふ血戦です！

焼くが如き炎暑。

戦塵濛々。

同盟軍も力戦苦闘よく努めました。遂に敵せず、すこし河岸のはうへ退却しました。

佛軍は勢に乗じてますます追撃します。

鮮血は附近の田圃を紅に染めると云ふ有様です。

肉片飛散。

凄を極めたものであります。

ウエリントンはよく部下を指揮しました。

然し普軍はひどく佛軍の砲火に惱まされました。

むく／＼と立ちのぼる砲煙のために、太陽は密雲に蔽はれたやうに四面は朦朧としてゐます。七

の中に砲火が閃めいてゐるのです。

凄絶！ 凄惨！

と、突然、大雨が降り出しました。

佛軍はこの機に乗じて猛烈に敵を攻撃したのであります。

ウエリントンの苦戦は一通りではありません。

死者は兩軍とも一萬を超えました。

が、勝敗はまだ何れのものとも決せられません。

夜に入つても戦は續けられました。

ウエリントンは決死の勇を奮つて部下を激勵しました。そして吶喊又吶喊、猛烈に佛軍に肉迫し

たのであります。

砲門は盛んに火を吐きます。銃剣からは火花が散ります。砲聲股々！ 吶喊又吶喊 まるで一大修羅場です。

そのうちにナポレオンは急に騎兵團に命じて英軍を追撃せしめました。

佛軍は潮の如く英軍の陣地へおし寄せます。

「退却！ 退却！」

ウエリントンは素早く全軍に退却を命じました。

戦機を察して有利の地に退却しようといふのでせう。

聯軍は續々と退却を始めました。

「追撃！ 追撃！」

佛軍は猛烈に追撃を續けます。

が、さつきの急雨で、あたりは一面の泥海、泥濘膝を没するといふ有様です。

佛軍の追撃は思ふ通りに行きません。

ナポレオンは部下を勵ましながら、英軍を追撃して、やつとウァーテルロー附近へ到着したのであります。

するとどうでせう。

ウエリントンは既にこの地に到着して、要塞を築いて佛軍を待受けてゐるではありませんか。

「しまった！」

ナポレオンは暫く敵陣を見つめてみました。

が、やがて彼はにつこりと微笑をもらしました。

大に決する所があつたからであります。

斯うして振天動地の大戦は、刻々と迫りつゝあつたのであります。

ウァーテルローに於ける英佛兩軍の陣地——それは此の大戦で見のがし難い重要な點だつたのであります。

ウエリントンの陣地はサン・ジャン山の前方の高地にありました。これに反してナポレオンの陣地はラベルリアン後方の低地にあつたのであります。

守勢軍である英軍が、高地から低地に向つたのは頗る有利でした。

が、攻撃軍である佛軍が、低地から高地へ向つて進んだのは全然不利だと云はなければなりません。

——ウエリントンはこの時たしかに地の利を占めてゐたわけでありませう。

ナポレオンは後年——ウァーテルローで、ウエリントンの陣地を精細に偵察しなかつたのは、遺

憾の極みであつたと云つてゐます。

これけたしかにナポレオンにとつて、千秋の恨事だつたでありませう。

ウエリントンの陣地は、その高地を中心として、右には防禦に便利な要塞を持つてゐました。そして、左には險崖と沼地とを控へてゐたのであります。

守戦には極めて有利な地點です。

ナポレオンの軍は七萬四千。

ウエリントンの軍は九萬二千。

——凡てがウエリントンに有利でありました。然し、五ヶ國の異なる兵から成つてゐる混成軍を指揮する、ウエリントンの苦心のなみなみでなかつたことも想像されませう。

夜來の雨は未だやみません。

道路は泥濘を極めてゐます。

佛軍の攻撃は頗る急です。

英軍はウエリントンの指揮よろしきを得て、よく死守してゐました。

激戦數刻。

死屍累々。

死傷するもの算なく、ために綠草は紅色に變すと云ふ有様、叫喚の聲は砲聲劍戟の響は相和してうたた酸鼻を極めたものであります。

ウエリントンの軍はまことによく力戦しました。

「勇敢なる英軍は我等に背後を見せず」と云つて、流石のナポレオンも敵の力戦を賞揚したと云ふことでもあります。

突然、英軍の陣地へは普軍の援兵が到着しました……。

佛軍は混亂し始めました。

ウエリントンはこの好機逸すべからずと、挺身みづから同盟軍を指揮して、佛軍の陣中深く突撃しました。

夕陽はまさに地平線下に没しようとしてゐます。

茜色は物凄い餘映を戰場に投じてゐます。

ナポレオンの期待してゐた援兵遂に來らず……今は佛軍の意氣も全く沮喪しました……隊を亂して、さきを争ふて、逃げると云ふ有様です……。

「ああ、我が愛する兵士達よ、汝等は如何にして死すべきかを忘れたるか。」

第十課 ナポレオン

ナポレオンは絶望して叫びました。

ナポレオンのその時の氣持はどうであつたでありませう？

「戦場で討死するのは勇士の譽だ。」

ナポレオンは劍をひつ提げて敵中へ突貫しようとししました。

彼も今は死を覺悟してゐます。

この時、一人の部將がその馬の手綱をかたく握つて、

「陛下よ！ 死は易く生は難し、尊き陛下の身を、みだりに敵卒の手に委ねてはなりません」と切

諫しました。

ああ、萬事は休す！

ナポレオンは僅かばかりの將士と共に、馬車に乗つて、戦場をあとにして巴里へ遁走したのでありました。

ウアーテルローの役は古今未曾有の大決戦でした——。

この時のナポレオンの健康は餘りすぐれてゐなかつたのであります——秋を知る！ 肉體の秋を知るとでも云ひませうか——天下無敵の馳名を馳せたナポレオンも、不幸、この時、健康がすぐれ

なかつたため、この無様な敗北を見たのだと云ふ歴史家もあるぐらゐであります。

或る歴史家は「ウアーテルローの役當時のナポレオンは以前の如き剛邁の氣質を更に持つてゐなかつた、全くその時の彼は前身の影に過ぎなかつたのである」と書いてゐます。

モスクワ退却の時、既に往年の面影を見なかつたと云ふ者もあります。

年々歳々彼の精力が減退したのは事實のやうであります。

エルバ島流竄の一ヶ年も、確かに彼の健康にはよくなかつたのでありませう。

人の肺病をも貫ぬいたその炯々たる眼光！

それにも今は力無く、顔の色も青ざめて陰鬱を極めてゐました。

その當時の彼を追想して、

「彼は全く往時と異なれり。果斷にして力行を尊びし彼は饒舌の人となり、飽くまで自説を主張せし彼は好んで他の言に耳を傾くる人となり、全力を一事に集中せし彼は心常に動搖する人となり、勤勉なりし彼は怠慢となりて睡眠を愛する人となり、全く昔日の面影なし。余は往年の彼を追想して甚だしく悲哀の感にうたる」と云つた人もありました。

百戦百勝の鬼神！

鬼神にも肉體の秋の訪れる日が来たものと思へます——これがどうしてあのウアーテルローの敗

第十課 ナポレオン

北の原因のひとつでなかつたと云へませう。
この戦役の間にも、ナポレオンは屢々馬から降りて、軍用地圖を調べてゐたと云ふことでありませう。長時間の乗馬に堪えなかつた、めたに、屢々、休息する必要があつたのでありませう。

運命は我に非なり

ウアーナルローの敗戦！

それでもナポレオンはまだそれを自分の最後の運命だとは考へなかつたのであります。

最後の運命——そのやうなことを信ずるやうなナポレオンではありませんでした。

「再舉、而してかの惡むべき同盟軍を一舉にして粉碎して呉れよう」とナポレオンは決心してゐたのです。

それは彼がこの戦役の翌日、兄のヨセフに宛てた手紙を読めばわかります。

その手紙には次のやうなことが書いてありました——。

兄は迅速に三十萬の軍を得て佛國を防護せよ。朕は新たに十萬の兵を募集して彼等に充分の武器を供給し、人民を鼓舞して敵を征服するであらう。而して國民も亦た朕を、援助し決して朕を憫まされぬであらう。この度の朕の敗戦は議會に對して如何なる影響を與へたるか。兄は朕に

議會の形勢を報告せよ。この危機に際し、彼等議員のとるべき任務は、朕が周圍に集合して佛國を救済することを忘れないことである。

——と云ふ手紙です。

ナポレオンは自分を除いては他に誰一人佛國民の福利のために努力し、佛國の幸福をもたらす者はないと信じてゐたのでありませう。

然し議會では彼の讓位を今にも迫らうと云ふ形勢でした。

「若し朕が皇帝の位を去らば、敵は一週日のうちに巴里の城門に肉迫するであらう。ああ。朕は我が國民を勝利にのみ慣させてゐるために、今や、國民は僅か一日の朕に對する不平を忍ばうとはしないか。佛國の前途まことに痛心に堪えず」と云つて、ナポレオンは歎息を洩らして居りました。

然し議會はますます彼に讓位を迫ります。

ナポレオンは聲を勵まして云ひました。

「これは實にフランスの國にとつて重大な問題である。議員等は朕に讓位せしめんとするも、朕の讓位に依つて如何なる結果を生ずるかを知らない。軍隊は朕が名に依つて召集したものである。故に朕が讓位はたゞちに軍隊の解散を意味してゐる。朕若し讓位せば、二日にしてフランスの國には軍隊なしと云ふ状態にもなるであらう。而かもこの場合、フランスを救ふものは朕にして議會にあ

第十課 ナポレオン

らず。然るに議會は朕に讓位を迫る。朕はかゝる議會に對しては解散を命ずるを至當と認む。」然し議員達は更に解散しようともしませんでした。

斯うしてたうとうナポレオンは讓位をしなければならなくなつたのであります。

それを知つた巴里の市民達はエリゼ宮殿の周圍に集まりました。

柵によち登る者もあります。

宮殿の中を伏し拜む者もあります。

或は彼の徳を稱揚して、その讓位を歎く者もありました。

涙に咽び、聲をあげて泣く者さへあると云ふ有様です。

ああ、しかも、遂に、運命は彼に非なり。――

ナポレオンは讓位しなければならなかつたのであります。

「ああ、ナポレオン！」

「ナポレオン皇帝！」

その聲は巴里全都に満ち充ちてゐます。

而かも運命既に彼に非なり……………。

ナポレオンは讓位しなければならなかつたのであります。

フランスの國難はまさに危機に瀕してゐます——。
ごらんなきい。

オーストリア軍は瑞西及びサヴオヤ方面から佛國の國境に迫つて來たではありませんか。また、ウエリントンは東北から進み來つてライン河を渡らうとしてゐるではありませんか。而かも一方、ロシア皇帝はみづから二十萬の大軍の先頭に立つて、明日の日にも巴里に殺到しようとしてゐるのです。

斯くて佛國は將に百萬に近い聯合軍のために蹂躪されようとしてゐます。

佛國議會の狼狽は云ふまでもありません。

彼等議員は急いで次のやうな決議を發表したのであります——。

第一、海軍大臣はナポレオンを米國へ護送するため、ロシユフォルの港に碇泊せる二軍艦にその準備を命令する事。

第二、若しナポレオンの請願ある時は、ロシユフォルの港に至るまで護衛兵を隨行せしむる事。

第三、ナポレオンの一行が軍艦に塔乗するまでの途中の宿所は、遞信大臣これを指揮すべき事。

第四、海軍大臣は該軍艦の米國に着せる時は、ナポレオンを上陸せしめ直ちに歸航せしむべき事。

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

第五、該軍艦は政府よりナポレオンの旅行免狀到着するに非ざれば、決してロシユフォル港を解纜す可からざる事。

第六、海軍陸軍及び大蔵の三大臣は、この決議の實行に關して、適宜の處分を施行すべき事。假政府の實行委員はナポレオンを米國へやること、この際、最も安全な方策であると考へたのであります。

ああ、絶世の偉勳を奏せる不世出の英雄も、今や、孤影悄然、一朝の蹉跌より萬乗の尊位を捨て、懐しき帝都を後にして、ロシユフォルの港へと向つたのであります。痛ましくも又無慘の光景……。

見る者をして思はず落涙せしめたことと云ふことであります。

ナポレオンの搭乗した軍艦はベレロフォン號でありました——彼は、今、この失意の英雄の萬斛の悲愁を乗せて、英國に向つて出帆したのであります。

その時のナポレオンの氣持はどうであつたのでありませう……。

感慨果して如何？
權威赫赫として聲望一世に高かりしナポレオンも、今はをれの郷國に身を置くところなしと云ふこの有様、ああ、運命は彼に非なり、千秋の恨を懐いて、敵國にその保護を託せんとしてゐるの

であります。

ベレロフォン號は英艦なのです。

寔にこれは人生の轉變であります。

千八百十五年七月。

ナポレオンは英艦ベレロフォン號に搭乗してロシユフォル港を出發しました。

船は白浪を蹴立て、矢のやうに英國に向つて進みます。

英佛の兩國は累世の仇敵です。

ナポレオンも今はその仇敵の英艦に身を託してゐます。

が、艦長のメイトランドはもともとナポレオンを非常に敬服してゐた人であります。彼は常にナポレオンに陛下の尊號を用ひました。艦長がさう云ふわけですから、其の他の一般の將卒も亦たまるで自分の國の國王に對するやうな態度でナポレオンに接したと云ふことであります。一般の將士達はナポレオンが甲板へ出る毎にうやうやしく脱帽して最敬禮を行ひました。ナポレオンも亦た帝王のやうな態度であつたと云ふことであります。

「英國無かりせば朕は久しき以前東洋の帝王となつてゐたであらう、されど苟くも船の浮ぶべき水あるところ必ず英艦あるを如何せん。」

第十課 ナポレオン

とナポレオンはこの艦中で語つたさうであります。
航海中、彼は極めて快活をよそほつてはゐましたが、その胸の底には、無限の悲愴があつたことだらうと思ひます。

兎角彼は冥想に耽りがちでありました……。

それを慰めるために、艦中では、或る日、素人演劇を催したこともありました。

彼は何人に對しても親愛の態度を示して居りました。

船は次第に英國へ近づいてゆきます。

ナポレオンは屢々甲板に出て来て、そのポケットから小形な双眼鏡を出して、前方を眺めながら、

「いつ頃英國へ着くだらう。」

と、云つて、しばしばその着陸の時間を訊ねたと云ふことであります。

英國着陸の日。

その日は朝早くから甲板へ出て前方を眺めてゐました。

船はトルベイの沖に投錨しました。

「美しい國だ。」

ナポレオンには英國は初めて見る土地だったのであります。

澤山のボートがペレロフォン號の周圍に集まりました。
海岸も亦た人の山でした。

幾萬の英人はこの絶世の英雄を見ようと思つて、早朝からこの海岸に集まつて來たのであります。
當時の英國の二三の新聞紙は、この時既にナポレオンがセントヘレナへ護送されるであらうと云ふことを想像して、その記事を掲載してゐたのであります。

艦は一夜をその沖合で明かしました。

翌日も同じ記事が新聞紙には見えてゐたのであります。

「……………」

ナポレオンはそれを知つて非常に憤慨しました。

「朕は死すとも斷じてかゝる邊土へ流竄せられず」と彼は云つたさうであります。

ナポレオンは甲板に立つてゐます。

群集はいつせいに彼に敬禮しました。

ナポレオンも亦たそれに答禮することを怠らなかつたのであります——その有様、こゝでも、これが敗軍の將であらうとは思はれなかつたと云ふことです。
當日のことを一英人は次のやうに書いてゐます——。

私はその日休日を利用して海岸を散歩してまゐりました。二隻の軍艦が沖合に投錨してゐます。そして多数の人々がこれを見るために四方から集まつて來てゐるのであります。何事であらうかと私は考へました。そして傍にゐる人にたづねたのです。と、それは前佛國皇帝ナポレオンがこの軍艦中の一隻に搭乗して、はるばる我が英國へ來たのであると云ふ返事でした。私は大いに喜び、ひと眼なりとも、この不世出の英雄を見たいと思つて、ボートへ乗つて軍艦ベレロフォン號の舷側に漕いでゆきました。あれがナポレオンだ！ 人々がさう云つて噂してゐる一人のフランス人はこの時甲板の上に立つて居りました。背の低い、肉のしまつた人でした、黄金の肩章をつけた緑色の制服を着て、白色のズボンをはいてゐました。ああ。これがナポレオンその人でありました。彼は帽子をとつて私達に會釋しました。私達も亦た脱帽してこれに答禮したのであります。艦上を見てみると、英國士官も彼に對しては充分の尊敬と敬意とを持つてゐると見えて、彼と何事かを語る時は必ず脱帽して居りました。ナポレオン來着の報は、その日の正午頃英京ロンドンに達したのです。晩方になつて、多くの紳士淑女を乗せた馬車は陸續としてこのトルベいの港にやつて來ました。附近の人々の中には或ひは徒歩で來た者もあつたやうです。或は船で來た者もあつたでせう。或は馬に乗つて來たものもあつたでせう。トルベいの港は雜鬧を極めてゐました。人々はいづれも先を争つてボートを雇ひ、ベレロフォン號の舷側に近づきました。まるで祭のやうな騒ぎでした。」

と書いてゐます。

英國政府は、國民のこれ程の歡喜と感激の歡迎にも拘らず、ナポレオンの上陸を禁止したのであります。

ベレロフォン號はその日の夕刻、英國政府からブリーマス港へ赴く可きことを命じられました。

翌朝未明からその準備にかゝつて、そして、早速、また、トルベいの港をあとにして出帆したのであります。同じ日の午後ブリーマス港に着きました。

この日はナポレオンが帝位を退いてから、二十五日を過ぎてゐたのであります。が、今となつてどうしたわけでせう。

ナポレオンは亞米利加へ行くのではなかつたのでせうか。

ベレロフォン號がブリーマス港に到着するや否や、艦員の舉動も一變しました。

陸上の光景も一變してゐます。

銃を持つた兵士達が澤山のボートに乗つて、ナポレオンの搭乗してゐる船の周圍を斷えず巡視してゐるではありませんか。そして見物人の近づくことを制止してゐるのです。甚だしきは發砲して近づいて來る見物人を追ひ退けるやうなこともしました。

また、二隻の英艦がやつて来て、ベレロフォン號の兩側へ碇泊してゐます。これは、一體、どうしたといふのでせう。

云はずとも知れてゐます——それはナポレオンを監視するためでありました。

まもなくベレロフォン號に乗つてゐる隨行員の多くは、この二隻の英艦に移されました。

ナポレオンも流石に不安を感じました。

「我等の本國のツールに送り返されて、終身禁錮に處せられるのではなからうか」と云つてその隨行員達は囁いてゐます。

「ナポレオン皇帝は遠くセント・ヘレナに流竄せらるゝ、今は、何の疑ひもない」と云つて囁いてゐる者もあります。

不安の念は刻々として迫つて來ます。

一人の隨行員はその時のことを次のやうに書いてゐます——。

私達隨行員の心痛はたうてい筆紙にも盡し難く、中には最早生きてゐる心地のない者もありました。陸から來た消息も、艦内の噂も、また英國新聞紙の記事も、それ等を聞いたり見たりして、胸騒ぎばかりしました。安き心ありませんでした。

願はくばナポレオン皇帝の上に幸あれかし、と誰も彼も隨行員はそればかりを祈つてゐたのであ

ります。

英國諸新聞は私達に對して憎惡の意を表してゐました。

また、艦内の英國艦員も今は表面では敬意を現はしてゐますが、その内心では、漸次私達を輕視するやうになりました。

私は英國の新聞紙を読んで、それを皇帝に告げましたが、皇帝は更に憂ふる様子もなく、日々の行動はすこしも平素と變つたところがありませんでした。毎朝早朝甲板へ出るのがその習慣でした。その時刻には見物人がボートに乗つて一時に集まつて来て、皇帝の風采を仰ぎ見るや、何れも尊敬の態度を示して敵對を現はす者と云つては一人もなく、ただ、皇帝の姿に接して、ますます愛慕の情を増すと云ふ有様でありました。

群衆中には默禮する者もありました。また脱帽する者もありました。また時としては萬歳の聲を發する者もありました。

そればかりではありません……。

或る年の若い男女は、わざと皇帝の徽章をその衣服に附けて、見物に來た者さへあつたぐらゐであります。

然し英國國民の皇帝に對するこの愛慕は、却つて私達の身にはひとつの禍となつたのであります。

第十課 ナポレオン

なぜと云ふに、そのことは却つて英國政府の私達に對する憎惡の念を増さしめて、ますます私達を困難な境遇に導いたからであります。

——と書いてみます。

その當時の有様が眼の前に浮んで来るやうではありませんか。

英國政府は懐にはいつた窮鳥を、無慘にも迫害しようとしてゐるのであります。

ナポレオンの胸も不安な思ひでいつばいです。

が、彼は何事も覺悟をきめてゐたものと見えます——彼は毎朝必ず鬚を剃ることを忘れませんでした。

彼は毎朝早朝に起床して甲板上を逍遙し、朝食の後にも再び甲板上に出て、雙眼鏡を手にして、群集せる觀覽者を見、雷の如きその歡呼を耳にして微笑したと云ふことであります。

その時は既にナポレオンのセント・ヘレナの流竄は、動かすべからざる程に確實なものとして、英國新聞紙はそれを報じてゐたのであります。

七月三十日です。

遂に、英國政府は使者をベレロフォン號へ派遣して「ナポレオンの處分書」を交附しました。

果して、その處分書の中には、ナポレオンをセント・ヘレナへ流罪にすることが明記してあつた

のであります。

ナポレオンは英國政府のこの處分が、道義に反してゐることを難責しました。

「余は英國の賓客なり。決して捕虜に非ず。みづから英國に來りて、その國法の保護を依頼せる者なり。然るに何ぞ！英國政府は余の自由を奪つて、無道の迫害を加へんとす。余は斷じて斯かる屈辱に甘んずること能はず」とナポレオンは云ひました。

その時の英國政府の處分書には次のやうなことが書いてあつたのです——。

ナポレオン將軍にして、再び歐洲の平和を攪亂する方法、または機會を有することあらば、我が國及び我が國王の同盟國に義務を缺ぐこと、なるべければ、やむなくその行動と自由を制限せざるべからず。

セント・ヘレナ島を以て將軍今後の居所として選定せり。

將軍に對して警戒するの要あるを以つて、同島を選定せるなり。

隨行員の中、將校二名、醫師一名を選ぶを許す。

他の隨行員は悉く本國へ送り返すべし。尙、右三名の隨行員は凡て我が政府の許可なくして、妄りに同島を離るゝこと能はず。

喜望峯及びその近海の司令官たるジョルヂ・マックバンは、將軍及びその隨行員をセント・ヘ

第十課 ナポレオン

レナ島に護送すべし。

尙、精細の事項に關しては、我政府の訓令を待つべし。マツクバンは遠からず出發して將軍と會見するならん。乞ふ、それまでに速かに將軍自ら隨行員を選定せらる可し——。

斯うなつては、もうどうすることも出来ません。

ナポレオンは泰然としてゐます。

それだけに、また、彼の胸中の憂悶はさこそと想像されるのであります。

——これは確かに苛酷な處分です。

英國政府は正義と公道を無視してゐます。むしろ殘虐と云はなければなりません。

英艦ベレロフォン號はこゝまでナポレオンの運命を乗せて來たのであります。

天涯の一孤島

ナポレオンはあはれ懐しき故國を去る千里、天涯の一孤島セント・ヘレナに流竄の身となりました。

過ぎにし榮華も今は夢であります。

ロングウッドに彼は寓居を定めました。

眺望絶佳。

然しそれがこのナポレオンにどれだけの慰めとなるでございませう。

しかも、このセント・ヘレナは、決して健康のために良い土地ではありませんでした——。

この地には一年中日月を見得る期間甚だ短かく、而かも霖雨と烈風多く、眼を喜ばし得る綠蔭清水なし、而して戸外に出づれば炎熱燒くが如し、「余は深くこの地を厭ふ」とナポレオンも云つてゐたぐらゐであります。

ロングウッドの寓居……。

往年歐洲列強の君主を驅使した彼を知つてゐる者の眼には、この寓居はうたゝ悵然として暗涙を催さしめるものがあつたであります。

或る日のことでありました。

ナポレオンは侍醫を伴つて庭園を散歩してゐました。

落莫荒涼たる巖崖があります。

ナポレオンはそれを指さして、

「英國は寛大な國だと聞いてゐたが、愚かにも不運に會してやむなく身をまかせたこの薄命者を遇するに、この巖崖に流竄するの寛大を以てする、弱きを苦しめ強きを誇ることが、果して稱すべき

ことであらうか」と云つてナポレオンは苦笑したさうであります。

英國政府のナポレオンを虐待したのはそればかりではなかつたのであります。

英國政府はロングウッドの周圍十二哩の地を限つて、ナポレオン散歩の地と定めたりしました。また、英國官吏の附添ひがなくしては、自由に運動することも許さなかつたのであります。重要と覺しき場所には警護の番兵が嚴重に配置されておりました。夜間の出入は特に嚴禁です。そしてまた邸宅の四方には晝夜巡回の兵を置き、幾百尺もあらうと云ふその屋敷の輪崖にも注意を怠りませんでした。そればかりではありません。海上には絶えず一隻の軍艦がゐて警戒してゐます。外國船と雖もこの島岸へ碇泊することは許されなかつたのです。島民の漁船も亦た軍艦の監督を受けなければならなかつたのです。日没以後は海上へ出づることも嚴禁です。そして毎日二回宛ナポレオンの起居動靜を偵察せしめて、その報告書は英國政府へ送られます。書信なども英國官吏はこれを嚴重に監査しました。

——これでは鐵鎖がないと云ふだけで、全く、ナポレオンは牢獄にゐるのと同様だつたのであります。

ナポレオンの部屋には、愛兒ローマ王の大理石の半身像や、マリア・ルイゼとジョセフィヌの畫像、母親の畫像などが飾られておりました——ナポレオンにはみな忘れ難い人々の面影であります。

——その人達は今どうしてゐるでせう。毎日、毎夜、ナポレオンの思ひ出となるのはその人々のことでありました。

が、その頃から、ナポレオンは隨行員の一人に命じて、自分の傳記を口述して筆記させたのであります。

——それは毎日のナポレオンの日課のひとつだつたのです。

月日は徒らに過ぎて行きます。

千八百十六年四月、ハドソン・ロウと云ふ人が新らたにセント・ヘレナの知事として赴任して來ました。今後はこのハドソン・ロウがマツクバンに代つて、ナポレオンの警護の任に當ることとなつたのであります。

ロウは英國政府の公文書を持參しました。

それには「ナポレオンに従ひて、セント・ヘレナに赴ける者は、この際自由に本國へ歸ることを得べし、若し尙永く滞留せんと欲する者は、ナポレオンと同一の警護を受くるも可なる旨を誓ふべし」と云ふやうなことが書いてありました。

英國政府はこれだけの不自由ではまだナポレオンを遇することが足りないと思つたのか、遂にナポレオンをセント・ヘレナに一人ぼつちにししようと考へたのであります——これにもナポレオンは

英國政府を怨みました——彼は早速三人の隨行員をロウの前に呼び出して、「余と共にこの島に留まらんと欲する者はこれに署名す可し、然しそれは凡て本人の自由意志である」と云ひましたが、誰一人ナポレオン一人をこの島へ残して本國へ歸らうと云ふ者はありませんでした。

「どのやうな不自由があらうとも……」

彼等はみなさう云つて、また、改めてナポレオンと生死を誓つたのであります。

ナポレオンはロウを顧みて云ひました。

「余が始めこの島に到着せる時、その志望を問はれし故、我が身の自由を許すか然らずんば死刑に處せられたしと答へしに、貴國政府は禮節を解せずして、余を囚人と同一の待遇をなすこと斯くの如し、たとへ無智蒙昧の野蠻人なりと雖も、余がこれまでの地位と身分に對して、決して斯くの如き無禮をなさざるべし」

「……………」

ロウもそれには返す言葉がありませんでした。

「余はさきに貴國政府へ抗辯書を送りしが、貴官はそれを知れりや」とナポレオンは訊ねました。

「……………」

ロウもそれを知つてゐない筈はありません。

「知らざれば、余は、その草案を貴官へ朗讀し聞かすべし……。」

それは次のやうな一文だったのです——。

予は茲に予に對して非儀非禮を加へたる者に向ひ、神と人との前に於て嚴正に抗議せんとす。予は人の最も貴ぶ可き身體の自由を毀損せられぬ。予はみづから進んで英艦に投じたる者にして、決して捕虜に非ず。予が本艦に投じたるは艦長の勧誘せしに依るなり。當時、艦長は政府の訓令を受けたれば、予若し英國に赴くを望まば、同伴して必ず優待すべしと云ひぬ。故に予はその言を信じて來れり。予は毫も疑ふ處なく、みづからその身を英國法律の保護のもとにゆだねたる者にして、予が英國に來れる後は英國人と毫も異なることなし。然るにいかん。英國政府若し艦長をして予を勧誘せしめ、詐りて予を陥れんとする奸策なりとせば、是れ英國みづからの名譽を毀損するものなり。自國の國旗を汚辱せるものなり。英國にして斯かる行爲をなさば、爾來、英國は其の誠實其の法律及び自由に關して、如何に誇稱するも何の益あらんや。英國の信義は予が本艦に搭乗せしより全く地に墜ちたりと云はざるを得ず。而して歴史は必ず語らん。二十年間英國民と戦ひたる敵將が、戦利あらずして、みづから進んで英國國法の下に來りて保護を求めたるは、是れ英國國民に對して尊敬と信任との明證を示さんとしたるに非ずや。然るに英國は斯の如き俗達の態度に對して如何なる事をなせしか、英國は齋にその信義を發表し得ざるのみならず。表面こ

れを誘致して裏面に於てこれを殘虐したるに非ずや——。

「この抗辯書を君はどう思ふ？」

かう云つてナポレオンはちつとロウの顔を見詰めてゐます。

「……………」

ロウにも、また、返す言葉がありませんでした。

ナポレオンは矢つぎ早に胸の底へ持つてゐた憤懣の情を、この新任知事の前に叩きつけたのであります。

「貴國政府の示せる訓令には、予の所有物をも悉く検査せらるゝとの條項ありしが、余は甚だ不快なり、斯く検査などを受けんよりは、寧ろ一切の所有品を海中に投棄せん。」

「尙、また、貴國政府は余の佩劍をも奪はんとする由なるが、これ、余を蔑視せる無情の處分に非ずや。」

「……………」

「余は改めて貴國政府の反省を促したい！」

ナポレオンの詰問はますます急であります。

「……………」

ロウは黙然としてうなだれてゐます。

「貴國の新聞を読むに、余に關する記事の誤傳虚報甚だ多し、貴國人は斯かる新聞記事を悉く信ずる程愚直なりや？」ともナポレオンは云ふのです。

が、いくら云つても、今は所詮徒勞なことでありました。

新知事ロウの來島してからと云ふものは、それから二週間もたないうちに、島内一般の有様は層一層、ナポレオンの身にとつては、不利のはうへ一變したのであります。

商人に對しては「爾來、現金に非ざれば、佛國人に一切物品を販賣す可からず」と云ふ嚴命が出ました。

若し貸賣りをした者があつたら、これを處罰すると云ふのであります。

また、何人と雖も知事の許可なくしては佛國人と書狀の往復をしてはならない。これを犯した者は島外に放逐すると云ふのです。

そればかりではありません。

佛國人を訪問することさへも禁じたのであります。

ナポレオンがこの新任の知事をどのやうに深く惡んでゐたか、それは次のナポレオンと侍醫との會話でもわかることだと思ひます——。

侍醫の名はオメーラと云ひました。

彼は英國人でありました。

「御身のこの島に來たれるは、余の特に望みて選定せるものなれば、余は、今、御身の信義厚きを信じ、すこしく訊ねたきことあり。眞實を余に語られよ。」

とナポレオンは云ひました。

「何事でございますか？」

「御身は余の侍醫なるか？」

「左様でございます。」

「それとも囚人の醫師なるか、而して御身は余との談話及び余の疾病のことに關して、これを總て知事に報告すべき任務ありや、毫も腹藏なきところを語られよ。」

「私は陛下の侍醫にしてまた陛下の臣下であります。陛下が萬一重病に悩まされ給ふやうなことがありまして、他の醫師の助言を求める必要がありましたら、場合によつては御病狀を報告することがあるかも知れません。しかしそれ以外には何さへ命令に接して居りません。」

「御身若し囚人附きの醫師として任命せられ、余の談話を悉く知事に報告する如きことあらば、余は再び御身の顔を見ざるべし。余は決して御身を探偵なりと思ふ者に非ず。また、從來とても御身

にかゝる行動ありしを認めず。故に余は深く御身を信頼せり。されど御身は英國人にして英國政府より俸給を受くる身なれば……」

「……………」

侍醫は繰返して忠實を誓ひました。

ナポレオンは満足さうに頷いて、更に言葉を續けました。

「余、若し重病に罹れるため、他の醫師を呼ばんとする際は、まづ、御身の診断せるところを余に告げ、然る後に余の意向に従ひて事を處置せられよ。余は近來知事のために外出を妨げられ、數日間健康勝れざりしかば、知事は病氣見舞ひの口實を以つて、彼の侍醫を送らんと申し來れるも、余は隨員をしてこれを謝絶せしめたり。余の側には余の信任せるオメーラ、御身あれば、その儀に及ばず、且つ、余は獨り自宅に静臥するを好む旨を答へしめたり。されど余にして若し今後數日間外出せずんば、知事は予を見舞はしめんとて、何人をかこの室内に送らん。然れども、よし、何人たりと雖も、強ひて余がこの室に侵入せんとする者あらば、その者は瞬間に於いてその首を失はん。」

「……………」

ナポレオンは更に激越な語調で語り續けました。

「人を害すればをのれも亦た害せらるゝこと當然のことなり。余は常に覺悟せり。されど余は從來

幾度か死地に入らせしを以つて、毫も死を恐れず。余は過日知事に向ひ、余を殺すの容易なる手段は、強て人を余の許可なくしてこの室へ入らしむることなり、余はその者を殺すべければ、余も亦た殺されん、然る時は御身は政府に報告して、ナポレオンは争闘して死せりと云はゞ、知事として御身の職務は果さるべし。余は獨りこの室に居るを好む、御身の來訪は悪意を懐くが如くにして、余に不快を與へること多きを遺憾とす。と、余は知事に云ひたり。實に、余は、これまで世界諸種の人種に接したることあるも、未だ曾てこの知事の如き悪相を見たることなし。その日、知事のこの室に來たりたる主なる用事は御身を余より遠ざけ、彼の侍醫を余に送らんとするにありしが、余は斷然これを拒絶したり。余が知事の申し出を拒絶せる時、彼はまことに恐ろしき容貌をなしぬ。余は限りなき不快を感じたり。彼の飲みたる珈琲茶碗を、余は彼がこの部屋を去りたる後、直ちにその茶碗にも彼の毒氣觸れて不潔となりしならんを思ひ、これを窓外に棄てしめたり。余は最早彼の顔を見るに堪へず、今後は余を殺す時の外、決して再びかゝる悪相を示して余を苦しめざらんとを御身より知事に傳へられよ。」

「……………」

ナポレオンは泣いてゐました。侍醫の眼にも涙が光つて居りました。が、この頃、ナポレオンの肉體には既にだいぶ衰へが見えてゐたのでありました。

彼の死期は近づきつゝ、あつたのです。

奈翁の臨終

ナポレオンは藥餌を退けました。

「英國は我が死體を求む。余は英國の望に従ひ藥餌を服用せずして死せん。英國の閣員はこの恐るべき孤島を選びて余の謫所となし、以つて余の生命を奪はんとせり。余はこの島に着せる後如何なる待遇を受けたるか。余はあらゆる凌辱と迫害を受けたり。未だ何人にも禁じられたることなき家族との通信すら余は拒絶せられ、歐洲よりは何等の音信も余に達せず、余の妻子はあだかも亡き者に等し。余は六ヶ年の間監禁の苦惱を嘗めたり。世界中如何なる熱帯の蠻地と雖も、この島より健康に有害なる處あらざるべく、而かも英國はこの最悪地を余の住所に指定せり、嘗ては全歐洲大陸を馳驅せる余をして、この險惡なる氣候中、四圍岩壁を廻らせる狭小の地に幽閉す。ああ、知事ハドン・ロウは英國閣臣のために偉勳を奏したり。英國閣臣はロウの功業に依りて大なる名譽を得たり。」とナポレオンは憤慨してゐます。

彼は一切の藥餌を却けたのです。

死はもとより覺悟の上です。

「余の死や遠きに非ず。余の死後は余の屍體を解剖せよ。されど英國の醫師には余の屍體に手を觸れしむる勿れ。御身は余の心臓をとりてこれをアルコールに漬け、バルチに於ける余の親愛なるマリア・ルイゼに送り届け、且つ、余は深く皇后を愛して一日も忘却せることなしと傳へよ。而して御身の余に關して知れる一切のことを皇后に告げよ。また、御身は余の胃を精査し、これを巨細に余の太子に報ぜよ。斷えず嘔吐あるより察するに、余の最大の病患はこの胃中に在るべし。余の病患は父の病患と恐らく同じなるべし。胃癌は遺傳すると聞けり。お身は是等の點を精密に検査して太子に會せる時、適當なる藥餌を彼に呈せよ。余の死後、御身は羅馬に赴き、母君及び家族を訪ひ、この寂寞たる孤島に於ける余の生活及び病死等に關して、御身の知れるところを報ぜよ。」と云ふのが、ナポレオンの侍醫に告げた遺言でありました。

ああ 彼はみづからの病氣を恐れずして、その疾患の愛子に遺傳することを案じていたのであります。

最愛の妻子——彼はそれを一日も忘れたこと、云つてはなかつたのです。

母の慈愛！

が、さうした人々も彼の臨終の枕頭には待することが出来なかつたのであります。

胸中の寂寥。

ナポレオンのその時の胸のうちはどうであつたでありませう。

千八百二十一年五月五日と云ふ日でありました。

この日こそ、實に、古今の歴史にたづねて唯一人と云はれた千古の英雄がその臨終の日でありました。

「佛蘭西！」

「戰場！」

さう云ふうわ言を繰り返しました。

「陣頭！」

それがナポレオンの最後の言葉だったのであります。

隨員の人々は一同肅然として、その死床の左右に侍してゐます。

「陣頭！」と云ふ最後の言葉——彼は、に瀕し乍らも、猶、大軍の陣頭、その陣頭に立つてゐることを夢みつゝあつたのではないでせうか。

みなみな聲をあげて咽び泣きました。

窓外の風颯々。

天地暗澹。

風雨狂暴。

天も亦たこの偉人の永眠を哭せんとする故か、その臨終にあたつて、俄かに、暴風雨が吹き出したと語り傳へられてゐます。

ああ、この悽愴！ その中をナポレオンの靈魂は天に昇つたことでありませう。

五十三歳を一期として……。

遺骸は其の後、故國フランスへ送られました。

斯くてこの英雄は、生前希望せる如く、風濤く草青きセーヌの河畔に、今猶、靜かに眠つてゐるのであります。

奈翁以前に奈翁なく、奈翁以後に奈翁なし。

ああ！

「ナ、ポ、レ、オ、ン、常、に、い、へ、ら、く、「不、能」と云ふ語は唯、愚、人、の、辭、書、に、在、り。」と、「云々」

最後の一段は、ナポレオンに對する批評で、此の一段で全篇を總括してゐます。「不能と云ふ語は云々」に其の長所を挙げ、「勢に乗じて自ら制することを知らざる云々」に其の弱點を

別決してゐます。最後の「ヨーロッパの天地を震撼し、帝王の帝王と歌はれたる身を以て、空しく絶海の孤島に憤死せる其の末路、何ぞそれ哀なる。」は、彼が五十有三年の生涯を述べ盡してゐます。

補充文には「悲絶壯絶英雄の末路」の中から、次の「ナポレオンの最後」を擧げておきませう。

ナポレオンの最後

いざさらば母國よ

それは八月半頃であつた。藍色の浪が軽く柔かに膨れ上つては、又平かに伸してゆく靜かな夏の海を、英國の軍艦ノルサムバーランド號は、悉く張つた帆に豊かな風を孕ませながら駛るのであつた。掃き清められた艦の甲板には、帆綱の影が黒く映つてゐるばかりで、一人の水兵も出てゐなかつた。

大きな帆柱の陰から、こつ／＼と靴の音がして、一人の人が出て來た。少し離れて四人の人が俯きがちに歩いて來た。何れも黙つて甲板に立止つた。一番前に居る人は、やがて靜かに右の手で帽

第十課 ナポレオン

子をとつた。左の手はそつと後へ廻して腰の上に當てた。青い山の影がはつきりと見えた。佛國のラホーグ岬である。

帽子を説いだ人の顔は蒼白かつた。廣い額の中程に、半月形の髪が垂下つて居た。緑色の上着は胸の中央から左右に分れて、二列に並んだ胸ぼたんは運命の星の様に輝てゐた。奥深く湛へた碧色の眼は、何物にか魅せられた様に怪しく光つた。腰に廻してゐた手を劍の欄へ掛けて、後の四人を振返つた。四人は一樣に恭しく頭を下げた。甲板の上へはら〜と涙が噴ちた。振返つた人け言葉なく又前方を見入つた。大きな白い翼を張つた海鳥が二三羽、さわさわと音を立て、舷を掠めて飛んだ。此の塑像の如く突立つてゐる人こそは、纔か二月前に十數萬の大軍を率ゐて、ウォーゲ！ロの野に大激戦を演じた皇帝ナポレオンその人である。

最後の激戦に打負けて、一旦は巴里の都へ還つたけれども、西に傾く落日は到底招き返されない。「今一度盛り返しては。」と、膝に縋つて勸めた弟の願も退けて、遂に身を囚人の如く英艦に任せ、今しも大西洋中の一孤島セント、ヘレナへ流されて行くのである。歐洲の天地を震ひ動かした英雄も、數十萬の精兵を己が手足の如く指揮した皇帝も、敵國に囚はれては、憫むべき一個の囚人たるに過ぎなかつた。斯うして敵艦の甲板に立つて、次第に消え行く佛蘭西の岸をひたとばかりに眺め入る時も、あゝ、其の身邊を守つて居る家臣としては、唯この四人許りである。

潮の香を含んだ夏の風は、翼を張つた様な帆を又帆綱を、はたはたと鳴した。四邊は何時の間にか陰つて來た。離れ行く佛蘭西の岸は、山は、青い影は、やがて浪の上に曳く一筋の絲となつて、遠く幽かに消えようとした。五人は瞬もせず眺め入つた。

海の上は蒼く陰つて行つた。廣い海と廣い空は、其の中間に一筋の絲となつて、消え残つた佛蘭西の最後の影を、永久にナポレオンの眼から奪ひ去つた。

「愛する母國よ、いざさらば。」

主従五人は默然として甲板を降つた。

夢の五十三年

十月十四日、ノルサムバーランド號は、セント、ヘレナの岸近く錨を下した。ナポレオンは例の如く、四人の従者を伴つて上甲板に昇つた。殆ど巖ばかりかと思はれるやうな島には、物淋しい秋風が吹いてゐた。空高く聳え立つた山と山との間の狭い谷川に沿うて、穢い家がばら〜と建ち並んで居る。山の上には所々砲臺があつて、大砲は丸で刺の様に逆立つてゐた。

ナポレオンは雙眼鏡で四邊の様子を眺めた。六年の後は彼の墓場となるべき孤島を、今日の前に見た彼の胸の中は、嗚呼、果して行うであつたらうか、然るに彼の顔は晴々しかつた。其の翌日

第十課 ナポレオン

第十課 ナポレオン

彼等は遂に上陸した。

此の日から殆ど六年間、彼は嚴重な冷やかな無禮な英國人の監督の下に、四人の従者を相手として、淋しい哀れな餘生を送らねばならなかつた。海風の吹き荒れる灰色の霧に包まれたじめじめとした離れ島の濕つた土は、次第々々に彼の健康を損ねて行つた。光も花もない牢屋のやうな生活の後には、只「死」が其の冷い手で首を捲きに来るばかりであつた。

千八百二十一年四月の初頃から、彼の病氣は漸く悪くなつて來た。どう云ふものか、彼はひどく藥を嫌つて、成るべく飲まない様にした。或日、「東の空に彗星が見える。」と、人々が聲高に叫んだのを耳にした彼ば、傍に居た醫師に向つて、「昔英雄シーザーが死んだ時、その前兆に彗星が現はれたと聞いて居る。恐らく此の彗星も俺の最期の前兆であらう。」と云つた。其の顔は蒼く沈んで居た。

病氣は益悪くなる許りであつた。到底助からぬと思つた彼は、それ／＼遺言狀を作つて、心靜かに最後の日の來るのを待つた。五月に入ると、様子が俄に悪くなつた。傍に附添うて看護して居た人達は、何れも絶望の眼をぢつと皇帝の顔に覗いだ。その月の四日、日が暮れてから間もなく、雨が降りだし風も吹きだした。夜が更けるにつれて、雨も風も益々烈しくなつた。庭の立木は暴風雨の中に悲鳴をあげて戦き、身を揺ぶつて悶え苦しんだ。ナポレオンが何時も其の木蔭で休んだ楊の樹

がやがて吹倒された。續いて一本二本と到頭悉く地上に吹倒された。恐ろしい一夜は明けて、翌五日、「頭……軍隊……。」と呟いた彼は、午後六時十一分、色褪せた唇の上に、微かに泡を湛へた儘、最後の息を引取つた。花の如く美しく、火の如く烈しく、そして落日の如く悲壯であつた英雄ナポレオンの五十三年の生涯は、斯くの如くにして終つたのである。

あゝすさまじの雨の夜

あらしも波も聲あげて

歌ひとむらへはなれ鳥

至尊のかんむり戴きし

かしらは今や低頭れて

彼はいまはの床に在り

第十一課 空の景色

舊讀本そのままです。此の課は舊讀本の中でも名文の一つに數へられた教材で、何處かに蘆花の「自然と人生」でも讀んでゐるやうな味があります。

壯大美妙、變化極りなき空の景色を描いたもので、冒頭の「空の景色の壯大美妙なること、到底地上の景色の及ぶところにあらず。」が一篇の趣旨となつてゐます。

文は八段に分れ、冒頭の一段は空の景色の壯大美妙なること、第二段は東天紅の曙光から

第十一課 空の景色

日の出の美観、第三段は夏雲奇峯多の景觀、第四段は驟雨一過暗雲の絶間をもるゝ日光の美観、第五段は秋天一碧の美観、第六段は夕陽將に没せんとして晚靄千種萬様の美観を呈すること、第七段は夜の空の美観極りなきこと、最後の一段は空の景色は地上の萬物に光彩を添へ、千種萬様の風致を生ずることとなつてゐて、二段から五段までは晝の空、六段と七段とは夜の空、冒頭の一段と結尾の一段とで全篇を引つ括つた形になつてゐます。

先づ文の結構を表示しますと、

冒頭 空の景色は壯大美妙、變化窮りなきこと。(第一段)

第二段	曉雲の美観……朝の空	
第三段	夏雲の奇観	夏 の 空
第四段	夕立雲の偉観	
第五段	秋天一碧の眺……秋の空	晝 の 空
第六段	晚靄の美観……夕立の空	
第七段	夜の空の美観……夜の空	

結尾 空の景色は地上の萬物に光彩を添へ、千種萬様の風致を生ずること。(第八段)

全篇麗文佳句を連ねて、全然美文的の筆致に成つてゐます。随つて辭様も多種多様で、對句あり、連鎖あり、比喩あり、引用あり、各種各様の手法を用ひて、巧みに空の美観を想像させてゐます。

「鬢鬢たる曉雲は、白となり、黄となり、紫となり、淡紅色となり、深紅色となり、」

「其の起るや、來る所を知らず、其の散するや、往く所を知らず。」

「時々其の容を改め、刻々其の色を變ず。」

「蛟龍の玉を争ふが如く、天馬の空を驅くるが如し。」

「忽ちにして瑪瑙の如く、又忽ちにして琥珀の如し。」

「或は濃く、或は淡く、」

「彼は次第に明く、是は次第に暗し。」

「夜の空には月あり、星あり、月の美観は古來詩歌に歌ひ、繪畫にゑがけるもの頗る多し。」

「薄雲に覆はれたる春の夜の朧月は悉よりも淡く、秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出つる月影は鏡よりもさやけし。」

「花紅葉は太陽の光に照らされて始めて諸種の色澤を現し、山水の風景は雲霧霞靄の配合に依りて雨奇晴好の趣多し。」

「千古の雪を戴ける富士も一抹の白雲其の山腰をかすむる時、益々雄大の觀あり。霞の奥にも尙花あるを思はしむる時、吉野山一目千木の光景は殊にゆかしきを覺ゆるにあらずや。」

は對句、

「地上の景色は多く同一變化を反覆し、其の變化亦緩漫なれども、空の景色の千變萬化窮りなきや、瞬時も同一狀態に止ることなし。」

「鷄鳴曉を報ずるや、東天一帯の曙光は夜の暗黒を破り、鬚鬚たる曉雲は云々」

「一點の雲もなく晴渡れる碧空は最も人の心を爽快ならしむ。されど雲有るは更に雲無きに勝れり。」

「雲は離合集散常なく、其の起るや、來る所を知らず、其の散するや、往く所を知らず。時々其の容を改め、刻々其の色を變ず。」

「奇峰は更に奇峰を生み、數峰合して一峰となり、一峰分れて數峰となり、一峰崩れて一

峰又忽ち現る。」

は連鎖。

「黒雲空を掠めて飛びちがふ様は、蛟龍の玉を争ふが如く、天馬の空を驅くるが如し。」

「白雲疊々、大理石を敷列ねたるが如く。」

「波紋の形に變じては、白波の天上に起るかと思はしむ。」

「忽ちにして瑤瑤の如く、又忽ちにして琥珀の如し。」

は比喩。

「薄雲におほはれたる春の夜の朧月は夢よりも淡く。」

「秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出づる月影は鏡よりもさやけし。」

「或夜ひそかに出づる五月雨の松の月など。」

「霞の奥にも尙花あるを思はしむる時、」

は引用。

「秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出づる月の影は鏡よりもさやけし」は藤原顯輔の

秋風にたなびく雲の絶間より

もれ出づる月の影のさやけさ

の歌に出で、

「或夜ひそかに出づる五月雨、松の月」は大島蓼太の、

五月雨や或夜ひそかに松の月

の句に出で、

「霞の奥にも尙花あるを思はしむる時」は八田知紀の

吉野山霞の奥は知らねども

見ゆる限りは櫻なりけり

の歌に出でるます。

蛟龍の玉を争ふの「蛟龍」は一名「アマリヨウ」ともいひ、李山甫の「得水蛟龍、失水魚、此心相對雨何如」に出でるます。四足あり、頸細く、首に嬰あり、大なるものは人を呑み、風雨に會して天に昇ると傳へられてゐます。こゝは其の形容です。

「天馬の空を驅くるが如く」の「天馬」は又「汗血馬」ともいひ、史記の「大宛多善馬、馬汗血、其先天馬子也」に出でるます。大宛は今の中央アジアの一帶を指したもので、現今の

所謂アラビヤ馬を指したものかも知れません。大宛國に高山があつて、其の山に馬がゐる。併しなか／＼手に入れることが出来ない。依つて五四の馬をそれに配して仔馬を産ませた。これが即ち汗血馬で、天馬の子といふ意味からして天馬子と云ひました。此の故事からして非常に迅速なことを天馬の虚空を驅ける様だと形容することになつたのです。補充文には蘆花の「自然と人生」の中から、「此頃の富士の曙」と「相模灘の夕焼」とをあけておきませう。

此頃の富士の曙

心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。

午前六時過、試みに逗子の濱に立つて望め、眼前には水蒸氣渦まく相模灘を見む。灘の果には、水平線に沿うてほの闇き藍色を見む。若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐らくは足柄、箱根、伊豆の連山の其藍色一抹の中に潛むを知らざる可し。

海も山も未だ睡れるなり。

唯一抹、薔薇色の光あり。富士の巔を距る弓杖許りにして、横に棚曳く。寒を忍びて、暫く立ちて

第十一課 空の景色

見よ、諸君は其蔷薇色の光の、一秒一秒富士の巔に向つて這ひ下るを認む可し。丈、五尺、三尺、尺、而して寸。

富士は今睡より醒めんとするなり。

今醒めぬ。見よ嶺の東の一角、蔷薇色になりしを。

請ふ瞬かすして見よ。今富士の巔にかゝりし紅霞は、見るが内に富士の曉、闇を追ひ下し行くなり。一分、——二分、——肩、——胸。見よ、天邊に立つ珊瑚の富士を。桃色に匂ふ雪の膚、山は透き徹らむとするなり。

富士は薄紅に醒めぬ。請ふ眼を下に移せ。紅霞は已に最も北なる大山の頭にかゝりぬ。早や足柄に及びぬ。箱根に移りぬ。見よ、闇を追ひ行く曙の足の迅さを。紅追ひ藍奔りて、伊豆の連山、既に桃色に染りぬ。

紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を越ゆる時は、請ふ眼を回して富士の下を望め。紫匂ふ江の島のあたりに、忽然として二三の金帆の閃くを見む。

海既に醒めたるなり。

諸君若し倦まずして猶彳まば、頓て江の島に對ふ腰越の岬赫として醒むるを見む。次で小坪の岬に及ぶを見む。更に立ちて、諸君が影の長く前に落つる頃に到らば、相模灘の水蒸氣漸く收まりて海

光一碧、鏡の如くなるを見む。此時、眼を舉げて見よ。群山紅褪せて、空は卵黄より上りて極めて薄き普魯士亞藍色となり、白雪の富士高く晴空に倚るを見む。

あゝ心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。

相模灘の夕焼

日は雲を穿ちて、曇りながら小坪の山に落ちぬ。富士の東北に唯一抹朱黄色の残暉を剩したるのみにて、餘は燻りかへりし紫褐色の、曇如として見所もなく、鬱陶しき空なりし。

川邊に佇み、俯きて釣れる程に、次第に暮れ居し川の面少し明るみ、また少し明るみ、何處にか火など焚きたらむ様に、少しづつ、四邊の不思議に明るみ行きて、宛ながら落ちし日の脚のまた立歸る心地しつ。頭を上ぐれば、見よ、富士の東北に一抹朱黄色に匂ひし残暉の、忽然靈の入りたる如く赫焉として燃え出でしなりけり。

あゝ誰か落日を招き還すの扇なきを歎つ者ぞ。暮れかゝる日の見る／＼晝に立歸り行くを見ずや。天の一隅に今燃え初めしと見つる朱黄色の焰は、次第に西空に燃え廣がり、一秒又一秒、一分又一分、照り出で、照りまさり、最早絶頂と思ふに、天は倍々燃え、石榴花色の火は、天を焼き、地を焼き、海を焼き、山も燃え、家も燃え、戸前に立つて夕焼を見る隣翁の顔朱鬼よりも赤し。唯吾面

第十一課 空の景色

第十二課 望遠鏡と顯微鏡

手の焦爛せざるを怪しむ耳。

雲は焼き鎖されて、富士を初め山と云ふ山は盡く濃き紫色を帯びぬ。眼を上ぐれば、西天宛がら絶大なる半截の陸軍旗を見る如く、富士を中心の日輪として、一道毎に本細くして末廣く烈々として石榴花色を帯びたる大輝光の流は、幾十條ともなく地平線より天心に向つて放射す。恰も地心火を失して、大火焰の一時に天心を衝いて騰上するが如し。光焰天を灸つて、海火の如く焼くれば、限り無き水族も嚇死す可し。

十分ばかり過ぐる程に、満天の黄焰更に血紅色に焰えかはり、鬼氣森然として人を襲ふ。更に五分ばかり経てば、血紅の色黒みが、りし赤色に變じ、火焰漸く退くよと見る間に、夢の醒むるが如く消えて、天地俄に幽然と暗くなりぬ。

第十一課 望遠鏡と顯微鏡

舊讀本そのままの教材ですが、前課に「空の景色」を叙して天界自然の美觀を述べ、次の課に「バクテリア」を配して、目も及ばない微細な生物の不可思議な作用を説いたあたり、配材の妙、編者の用意のある所を忖度しなければなりませんまい。

天界の神祕は望遠鏡によつて發かれ、微菌の微細は顯微鏡によつて直前せられます。共に是れ宇宙の秘庫を開くの鍵、そこらに人智の進歩の偉大さも想像されて、言ひしれぬ感興を讀者に唆つてゐます。

文は四段に分れ、前の二段は望遠鏡、後の二段は顯微鏡、どちらも發明改良の沿革と其の効用とを平易簡明に説明してゐます。

「望遠鏡は遠い處にある物體を近い處にあるやうに見せる器械で、最も精巧なのを用ひると、云々」

此の段は望遠鏡の効用と其の發明の由來とを略説してゐます。望遠鏡は屈折望遠鏡と反射望遠鏡の二種に分れてゐて、前者は對物レンズに依つて物體の像を造り之を接眼レンズに依つて擴大します。後者は對物レンズの代りに凹面の反射鏡を用ひて物體の像を造り之を接眼レンズで擴大します。天體望遠鏡及地上望遠鏡は屈折望遠鏡に屬し、ハーシエル望遠鏡、ニュートン望遠鏡、グレゴリ望遠鏡、カツセグレン望遠鏡などは反射望遠鏡に屬してゐます。屈折望遠鏡は十七世紀の初、和蘭で初めて發明せられましたが、千六百八年ゼルマンのケブレと、其の翌年に伊太利のガリレオとが、各々獨立に完全な望遠鏡を發明しました。地

上望遠鏡は千六百四十五年にライダーの發明に成つてゐます。爾後色消レンズなどの發明があり、千六百六十五年の頃ホイゲンス、カシニールなどに依つて改良を加へられ、引續き日進の學理を應用し、又製作上の熟練を積み、現在では頗る精密なものとなりました。反射望遠鏡は千六百六十三年にグレゴリーの發明に成り、又千六百六十八年にニュートンも亦之を發明して盛に天體觀測に應用しました。

望遠鏡の發明改良に最も力のあつたガリレオは伊太利の人で、天文學者であり又物理學者でありました。ピザの貴族の家に生れ、初め醫學及アリストテレス學派の學問を研究しましたが、其の學說の獨斷的であるのに満足しないで、千五百八十一年ピザの大學に入つて數學及物理學を學び、居ること二年、齡十七歳の時に有名な發明を行ひました。一日ピザの寺院に在つて吊ランプの振動を注視してゐましたが、その振幅の大きさに關係せず周期の一定してゐるのを知つて、自己の脈搏と比較して其の正しいことを確めました。依つて振子を用ひて時間を測定し得ることを推定して、後遂に天文用の時計に振子を應用しました。機械の製作及實驗科學を好み、種々の發明を成しました。靜水學天秤は其の發明の初であつて、これで固體の比重測定法を發見しました。次いでトスカナ太公に知られ、千五百八十九年にピ

ザの大學の數學教授に任ぜられました。此の時物體の運動に就いて研究して、物體は其の重さの如何に拘らず、皆等しき速度で落下するといふ所謂落下の法則を發見しましたが、之が爲にアリストテレス派の猜忌を受けて遂に職を辭し、千五百九十二年にパトヴァ大學の數學教授に轉じました。全歐羅巴から特にガリレオを慕ひ來つて學ぶ者が多く、其の名聲は絶頂に達しました。此の職に在る間にも亦發明が少くありません。寒暖計を初めとし、比例ゴムバスの發明があり、最も有名なのは千六百九年に屈折望遠鏡を發明したことでした。殊に初めて望遠鏡によつて天體の觀測を行つた人でありまして、天文學上諸種の發見を爲し斯學の一新紀元を劃しました。即ち大陰は發光體ではなくて、太陽の光を反射して輝いてゐること、其の表面の凸凹錯綜せること、銀河は無数の小屋から成つてゐることなどの發見を初めとし、千六百十年一月に於ける木星の四衛星の發見の如きは最も有名なものでした。又太陽の斑點を發見し、地球の自轉することを確めました。此の年トスカナ公に召されてトスカナに歸り、此處で土星の三環、金星木星の盈虛あること、火星及木星に斑紋あることを發見しました。ガリレオは又一書を著して地動説を唱道しました。これが爲め千六百十六年に異端者といふ罪の下に宗教裁判の審理を受け、遂に拘禁の處分を受くるに至りました。千六百

三十二年宇宙系論を發表し、爲に又法王ウルバノ八世の喚問を受けて、遂に無期徒刑に處せられました。トスカナ公の請に依つて千六百三十三年に赦免されて、フィレンツェのアルチエトリに退隱して餘生を送りました。其の後尙天文學や物理學上に多くの有益な發明をなして、千六百四十二年に歿しました。

『其の後望遠鏡は漸次改良されて、其の構造の進歩するに隨ひ、効用も亦大いに廣くなつた、云々』

此の段は望遠鏡が發明されてから今日に至るまでの發達の經過を略説してゐます。ガリレオの手に成つた望遠鏡は一つの凸レンズと一つの凹レンズとから成り、今日の双眼鏡と同一原理に依つてゐました。其の後ガリレオは次第に改良を加へ、遂に三十三倍に擴大するものを作り出しました。彼は望遠鏡を用ひて千六百十年以降に各種天體に關する新事實を發見しました。千六百十一年にケプレルは二つの凸レンズを組合せて望遠鏡、造る理論と其の利益を論じ、千六百三十年頃シャイネルは初めて此の種の望遠鏡を作り出しました。ガスコインは初めて對物レンズの焦面に十字線を取付けて遠方の物體を同時に見得る様になし、望遠鏡は茲に正確なる測定に使用せられる事になりました。

望遠鏡の製作法は其の後次第に進歩して、ホイヘンスは千六百五十五年土星の一衛星チタンを發見しました。當時對物レンズは一個でありましたから、物體の鮮明な像を得るためには焦點距離の長きものを造る必要を生じ、望遠鏡は次第に長さを増しました。カツシニは長さ三十五呎の望遠鏡で、千六百七十二年に土星の第五衛星レアを發見し、次いで長さ百三十六呎のものを造つて、千六百八十四年に土星の第三衛星デチス、同第四衛星デオネを發見しました。又ブラドリは長さ二百十二呎のものを造り、其の他三百呎乃至六百呎の望遠鏡を製作したのもありました。千六百六十六年にニュートンは屈折率は光に依つて異り、之が爲に物體の像に色を着け不鮮明となることを發見し、色を避けんが爲に對物レンズの代りに錫と銅との合成から成る凹鏡を用ひて反射望遠鏡を造りました。千六百七十一年に焦點距離六吋、倍率三十八のものを得、千七百二十三年にハドリは口径六吋、長さ六十三吋、倍率二百三十倍のものを造りました。シヨートは凹鏡を球面にする代りに拋物線體面或は楕圓體面に造り、物體の像は著しく鮮明となりました。千七百三十三年にホールは一つのレンズの代りに屈折率を異にする二つのレンズを組合せて球面収差及色収差を除くことに成功し、千七百五十八年にドロンドも獨立に之を成就しました。其の後レンズ及鏡の製法は次第に進歩し、

千七百八十九年にハーシエルは口径四呎、長さ四十呎の反射鏡を造り、千八百四十二年にロツセ卿は口径六呎、長さ六十呎の反射鏡を造りました。レンズも次第に大となり、十九世紀の初には露西亞のドルバルト天文臺の口径九呎半のものが最大でありましたが、十九世紀の末には同國ブルコフ天文臺は口径三十吋のものを備へました。最近に於ては反射望遠鏡は口径百吋、屈折望遠鏡は口径四十吋を有するに至りました。千八百七十年頃から後は、反射鏡として従來行はれた金屬鏡の代りに硝子に渡銀を施したものを使用しました。十九世紀の初に寫眞術が發明せられ中葉に寫眞乾板が行はれるに及んで、寫眞は天文學上にも應用せられるに至りました。特に天體の寫眞を撮るに適するレンズを備ふる望遠鏡を寫眞望遠鏡と稱しましたが、これは對物レンズの焦面に寫眞の種板を置いて天體の寫眞を撮るやうに仕掛けたもので、之を二三世紀前のものに比較しましたら實に隔世の感があります。

「小さいものを大きく見せる顯微鏡も、望遠鏡に續いて間もなく發明され、云々」

此の段は顯微鏡の効用と其の發達です。顯微鏡には二種類ありまして、一はルーベ即ち俗に蟲眼鏡と稱するもので、たゞ一個の凸レンズから成り、一は複式顯微鏡で、通常世人が單に顯微鏡と稱してゐるものであります。いづれも近距離に極めて微細な物體を擴大して見る

に用ひます。複式顯微鏡は千五百九十年に和蘭人ヤンセンの發明にかゝり、今日では能く實物の二千五百倍以上に擴大して見ることが出来ます。又千七百三十八年に獨逸人リーベルキユーの發明に係る日光顯微鏡と稱するものがあります。これは日光を利用してレンズに應用したもので頗る進歩した形です。

「顯微鏡を以て蚊の口をいらべてみると、云々。」

此の段は顯微鏡が極めて微細な物を見ることが出来るといふ實例と、細菌學に於ける其の貢獻とを略説してゐます。兒童が最も親炙してゐる蚊の口と蝶の羽に着いてゐる粉とを例に取り、尙子供の想像も及ばない海底の泥と粘土とを例に取つて、其の中に百五十億もの動物の遺體が存在してゐることを述べて、驚異の眼を睜らせてゐます。斯うして顯微鏡が細菌學上に偉大な貢獻を齎したことを述べて次の課の「バクテリア」に説き及ぼさうと云ふのであります。

第十三課 バクテリア

舊讀本に出てゐたのを口語に改作しただけです。バクテリアに就ての一般を知らせたもので、形態性狀の一通りを説き、それが人生に如何なる關係を有してゐるかを平易簡明に説明し盡してゐます。前課の「望遠鏡と顯微鏡」を中心にして、前々課には「空の景色」此の課には「バクテリア」、彼は眼も及ばない高大茫漠な天界、是は眼にも見えない微小繊細の小生物、前者は望遠鏡に依り後者は顯微鏡に依つて此の神祕の殿堂を開くことを得たのです。そこから配材の妙味を十分に味はつて見たいものです。

文は五つに分れ、第一段はバクテリアが極めて微細な生物であること、第二段は形狀も種々で繁殖が頗る迅速であること、第三段は人生に有害なバクテリア、第四段は人生に有益なバクテリア、第五段は腐敗作用と、それが人生に及ぼす影響となつてゐます。

「バクテリアは極めて微細な生物で、顯微鏡を川ひなければ見ることが出来ない。云々」此の段はバクテリアが極めて微細な生物であることを述べて、前課の顯微鏡と交渉を保たせてゐます。

バクテリアは單細胞或は稀に多細胞なる微生物で、普通細菌とも稱してゐます。生物界中最も簡単な形態を備へたもので、一耗の千分の一なるミクロンの單位として其の大きさを測る標準としてゐます。斯うして漸次に其のバクテリアの一般を説明しようとするのであります。

「バクテリアには球狀のもの、短い圓柱狀のもの、螺旋狀のものがあつて、云々」此の段はバクテリアの形狀が種々で、繁殖が頗る迅速であることを述べてゐます。

バクテリアは普通の動植物體に見るが如き細胞核を有せず、形態性狀など千態萬様で、空氣、水、土壤は勿論、他の生物の生存し得ざる場所にすら發見せられます。殊に不潔なる處に夥しく生存し、葉綠素を缺いてゐるので日光の作用に依つて炭素同化作用を営むことが出来ません。特殊の作用を有つて炭素瓦斯を同化する種類の外は、有機物を攝取して生活してゐるため、死物若くは生活せる動植物體に寄生してゐます。さうして寄生體の養料を吸収し、組織を腐敗に陥らしめ、或は毒素を分泌し、種々の病氣を醸させ、遂には死に至らしめます。此の段は主として其の分裂の有様を説明してゐますが、分裂には二十分乃至三十分を要するものでありまして、一箇より二箇、四箇、八箇、十六箇、三十二箇の順序に増殖するものが

普通で、外圍の狀況が適良な際には短時間に巨萬の數に上るものがあります。今假に其の分裂が一時間に一回起るとしますと、一日後には千六百七十七萬七千二百十六箇、二日目には二千八百十五億、三日後には實に四千七百七十二兆の多きに達します。だから其の體が至つて小さいに關らず作川の激甚なことは是で推しても想像が出来ませう。形狀は球狀、桿狀、螺旋狀などを基形としますが、外界の狀況が不良な場合には畸形を成すことがあります。又畸形ではなくて常に複雑な形狀を現し、單純な短い菌絲の如き外觀を呈するものもあります。結核菌、實布埜利亞菌、根瘤バクテリアの如きは此の部類に屬してゐます。球狀菌、桿狀菌、螺旋狀菌などは概ね個々獨立するのを常としますが、分裂増殖の際個々分離することなくして數箇相列することがあります。例へば球狀菌にして二箇づゝ相合着したものがあり、四箇相接することがあり、或一方にのみ分裂して連鎖球菌となるものもあり、二方面に分裂を續けて平板狀となり、三方面に分裂して立體狀の群體を形成することもあります。又一列の多細胞から成つて分岐することなく、恰も絲狀菌の如き形態を備ふるものもあります。これを絲狀バクテリアと云ひます。鐵バクテリア、硫黃バクテリアは概ね此の類で、水中に生存し、體の一端を以て他動物に附着するものが多いのです。或種のものには似而非分岐をなします。

バクテリア中最も特異の形態を有するものは變形バクテリアと稱する一群です。好んで動物の糞上に發生し、幾多の細胞集合して細柱狀となり、上部に囊胞を附け恰も高等菌類又は變形菌類の外觀を呈するものもあります。其の體は外觀上多少の分化を爲してゐますが、總べて桿狀バクテリアの集合から成る粘液に包まれてゐます。斯く粘液を有してゐると、粘菌に類してゐるといふ點からして、一名粘液バクテリアとも云ひます。

以上バクテリアの生理生態形態上より特異な部類の主なるものを挙げましたが、これらの中におのづから運動するものと運動しないものがあります。運動するものは多くは鞭毛を備ふるもので、體の一端若くは兩端に一條乃至數條を有するものがあります。或は體の周圍に普く之を備ふるものもあります。球狀菌の多くは運動しません。螺旋狀菌の或種及絲狀バクテリアの或種は鞭毛を有しませんが、體を屈撓して運動します。運動性を有するバクテリアはいろいろの刺激に感應し甚だ活潑な運動を呈するもので、化學的刺戟物質に感應するところの走化性、酸素に感應するところの走氣性などが著しいのです。バクテリアは特殊のものを除く外、人工培養基に純粹培養を行ふことが出来ます。即ち養料を含んだ寒天又は膠質の固形培養基上に一箇の細胞を置きますと、數時間の後には増殖し、小點として肉眼で見

ことが出来、数日の後にけ著しき形状を呈するに至ります。これをバクテリアの聚落と云ひます。病院や醫學者が細菌實驗を行ふのは、多くは此の法に據つてゐるのであります。

「バクテリアは到る處に生存してゐる。其の人體に寄生するものの中には、無害のものもたくさんあるが、云々」

此の段と次の段とは、人生に有害なバクテリアと、有益なバクテリアとに就いて述べてゐます。

病原體としてバクテリアの作用することが著しい所から、往々世人はバクテリアを以て不要のものとして之を嫌忌することが甚しいけれども、無害有用のものも亦尠くありません。我々の口腔、腸管内には常に生存し、全く無害なばかりでなく消化作用を助けるものもあります。殊に地球上に於ける物質の變轉はバクテリアの作用に待つものが甚だ多いのです。即ち自然の經濟上重要な變轉を掌り、自然界に堆積する屍體又は排泄物を分解し、自然の清潔法を行ふに與つて力があります。例へば動植物體を構成せる複雑な蛋白質を分解し、最終生成物として水、アモモニヤ、硫化水素、炭酸、硫酸、磷酸、酸素、窒素、水素などに變化させるものでありますが、これらは腐敗バクテリアと呼ばれた部類及び特殊のバクテリアの作

用を藉るのであります。腐敗バクテリアは先づ蛋白質をペプトン、アミノ酸などとし、或はインドール、カストールなど惡臭ある物質を造り、又プトマインの如き毒性ある物質を生成し、諸種の有機體を初めとして磷酸、硫化水素、アモモニヤ等の簡單な化合物を生成します。又動物の排泄物たる尿素、尿酸、馬尿酸などは特殊のバクテリアの作用に依つて分解し、炭酸瓦斯、アモモニヤなどに變化します。斯うして出來たアモモニヤは又硝化バクテリアの作用に依つて、稍々複雑な亞硝酸に變じ、亞硝酸は更に酸化せられて硝酸となり、高等植物の養料となります。硝化バクテリアの中亞硝酸を造るものは亞硝酸バクテリアと呼び、硝酸を成すものを硝酸バクテリアと云ひます。之に反して硝酸鹽は硝酸分解バクテリアの作用に依つて分解して亞硝酸となり、更に分解してアモモニヤとなり、遂に遊離の窒素瓦斯を發生します。遊離窒素は空氣の成分であつて、其の五分の四を占むるにも拘らず、他の高等生物の用ふるに由無きものでありますけれども、窒素同化バクテリアの力に依つて含窒有機物を産出します。此の種のバクテリアは土壤中に澤山有ります。殊に豈科植物の根に寄生する根瘤バクテリアは其の力が著しいので、農業上窒素肥料を得る目的を以て利用せられてゐます。斯の如く窒素の循環に見ても實にバクテリアは他の生物の及ばざる所のものを行つてゐるの

であります。其の他炭素の循環に就いて見ましても、植物界に廣く分布してゐる纖維素、ペクチン質、澱粉、脂肪、糖類等の炭素化合物は何れもバクテリアの作用に依つて分解します。澱粉は分解して糖類に變じ、更に乳酸、醋酸、酪酸、蟻酸及びエチルアルコール、メチルアルコール、ブチルアルコール、アミルアルコールなどを生じ、中にも乳酸を造る乳酸バクテリア、醋酸を造る醋酸バクテリアの利用などは特に著しいものでせう。第三段の有害バクテリア、第四段の有益バクテリア及び第五段の腐敗バクテリアは是等の一般を物語つたものであります。結尾の「太古より今日に至るまで死滅した生物の屍は、地球上到る處に累々として、慘憺たる光景は實に見るに堪へないであらう云々」のあたり、バクテリアの偉大な力を物語つて餘りあるものと謂へませう。

第十四課 阿閉掃部

舊讀本の卷の四にあつた教材を其の儘こゝへ引下けてあります、室鳩巢の「駿臺雜話」に依つたもので、原文は其の卷の二「禮集」の中にあります。

阿閉掃部

前に申つる杉田壹岐が事につけて思ひ出し候。是も越前の士にて候。さして忠義に係る事にては侍らねども、其頃の土風を語り申すべし。秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。又狛伊勢とて、是も國にて世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初させけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧着する事をたのみけり。さて饗膳すみ、いはひの盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の着初にて候ま、御身の御武功の事御物語候ひて彼に御さかせ候へ」といひしに、掃部「いや某が身の上に、御はなし申すべき程の武功は覺へ申さず候。されど、御望も黙しがたく候ま、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申して候、その事をはなし申すべし。江州志津嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引候ひしに、(阿閉掃部が父は阿閉淡路守とて、明智にくみしけるとなん。然れば志津嶽合戦の時掃部は柴田方にてあるべし)。敵とおほしくてうしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其人申候は「今朝よりかせぎ候へどもよき敵にあひ申さず候、御人體を見うけ幸とこそ存候へ。御不祥ながら御相手になり申すべき」とす、みより候故、「それこそなたも望む所にて候へ」とてたがひに馬をのりはなし、すでに鎧をあはせんとしけるに、其人「しばし御待候へ。今朝より雑兵をおほく突崩し候故、鎧よこれで候ま、

鎧をあらひ候て御相手になり候はん」とて、余吾の湖に鎧を打ひたし、二三遍あらひつゝ、「さらば」とて突あひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮はて、ものゝあやめも見えずなりぬ。其時あなたより又詞をかゝり、「もはや鎧先も見えず候。御殘多くは候へども是までにて候、御いとま申候へし。御名こそ承りたく候。某は青木新兵衛と申者にて候」とて、某が名をも承り候て、此後又陣頭にて出合候はゞ、たがひに人手にはかゝり申すまじく候。もし又味方にて候はゞ、わりなく入魂いたし候べし。さらばとて立わかれしが、是程見事なる武士はつひに見侍らす。いかゞなりはて候にや」と語りけるに、其頃伊勢かもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其日も來て勝手に居たりしか、此物語をきゝて、勝手よりにしりいでつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御物がたり承り、今更昔を思ひ、涙をおとしてこそ候へ。其時の御相手になり候青木新兵衛は、はつかしながら我等にて候。かく申ばかりにては、うきたる事におぼすべく候」とて、其時雙方のよろひのおとし、馬の毛色を一々いひけるが、ひとつもちはさりければ、掃部おどろきつつ、「さて／＼久しくてあひ候て本望に候」とて、手前にありし盃を方齋にさし、「是をしるしに」とて、腰のわきざしを抜いてひきける、それより方齋が名國にたかくなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にてめし出されけるとぞ。其後一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部はいかゞなりけんかしらず。方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすぐに仕へて、子孫相續して今にあり。翁加賀に有し時、ある人此事

を語るをきゝしが、青木が武者ぶりの見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事をいひ出でて、名のり合ひてよろこびし、又伊勢が子の鎧の着初に掃部を招きて、子のためにとて武功の物がたりを望みし、いづれもさしたる事にてはなけれども、其ころの土風、武をたしなみし事しられ侍る。たゞ今人家に子をそだて候ふに、食の喰ぞめ袴の着初など、ていはひ候へども、鎧の着初と申す事は、大祿の家は存せず、我等ごときいやしき武士の家には承らず候。是も人々武の心懸うすき故にて候。よりて大小兩刀又は甲冑等のこしらへの華美を專にし、たゞ武を道具と迄心得る體にて候。我朝は、武家の治世になりしより、五百年以來、天下武をもて風をなし候故、外の事はしらず、武の一筋は人々つねに忘れず、假初の一言にも臆したる事をばいはず、しばらくたつにも脇指をはなさず、文道より見候はゞ、かたくなにいやしき方にてあるべく候へども、是程に心懸けず候うては、武の一筋はとをり申さず候。翁かねて學者に申し候は、「學者の道に志さす事、武士の行住坐臥に武を忘れぬやうにさへ候はゞ、聖賢の域に至らん事も難かるべきにあらず。もとより武も義氣の發する所にて候。古來我朝の武士を見るに、多くは不學にて、文道の僉議はうとく候へども、義にあたりては一命を輕んじ、廉耻の心を失はぬは、武義のいたす所にて候。されば鎌倉以來教化は世に行はれず候へども、責て此武義ひとつにて土風をも維持し、國家も治平なる事に候へるに、近來はその武義さへかやうにおとろへ行き候事は、所詮風俗の日に遊惰になり候故と、いとなげかしくこそおもひ

侍れ。」

駿臺雜話は鳩巢が折に觸れて物した隨筆を蒐めたもので、仁義禮智信の五卷から成つてゐます。

室鳩巢は名を直清、字は師禮、鳩巢は其の號です。幼名を孫太郎と言ひ、通稱を新助と言ひました。萬治元年二月二十六日を以て、江戸谷中に生まれました。幼にして穎悟成人の風あり、十五歳で加賀金澤の藩主前田綱紀に仕へました。或る日大學の章句を講じてゐましたが、其の義理が頗る明晰でありましたから、綱紀は感歎して、「眞に英物なり、宜しく其の才を養成して以て天下の器たらしむべし。」と命じて京師に遊び、木下順庵の門に入らしめました。順庵又頗る其の才を愛して、「鳩巢は忠信篤敬、聖學に志あり、其の英才博識、志を文場に専らにす。實に我が門の益友なり。」と感歎しました。鳩巢は又羽黒成實に従つて學びました。成實の學は山崎闇齋に出てゐましたので、鳩巢が程朱の學を奉じて終生變らなかつたのは、成實に負ふ所が頗る多かつたのであります。貞享元年始めて食祿百五十石を賜はり、金澤に歸つて士大夫に教授しました。鳩巢は經學文章共に秀でて能く二者を兼ね、當時の巨匠

荻原徂徠、伊藤東涯と相對して、學界の重鎮となりました。元祿十五年、赤穂の浪士大石良雄の高家吉良義央を襲つて之を殺し、故主淺野長矩の仇を復するや、鳩巢義人録を作つて、其の節義を彰し盛んに之を賞揚しました。當時之に對して是非の論が紛々として起り、徂徠一派の如きは刑名法術の見地から頗に之を非難しましたが、鳩巢が一度義人の名を以て之に冠しましてから、世は舉つて浪士の忠死を賞讃して已まず、其の後赤穂四十七士復仇の物語は國民の間に深い感化を及ぼし、士庶の節義を激勵して永く後世に其の響を遺しました。正徳元年新井白石の推薦に依つて幕府に仕へ、祿二百俵を賜はり書籙調べの事に與りました。同年朝鮮の聘使に接し、其の功に依つて時服二領を賜りました。三年邸宅を駿河臺に賜はりました。因つて世に稱して駿臺先生と言ひました。後將軍吉宗の侍講となり屢々貞觀政要等を講義しました。嘗つて命を受けて六諭衍義の大義を述べ、又五倫五常の明義を和解しました。幕府は之を刻して天下に布かしました。享保十年西丸の奥儒者となり、十三年病を以て侍講を免ぜられました。病間、駿臺雜話・大極圖述等を著しました。此の外鳩巢文集・鳩巢學說・猷可錄等の著があります。享保十九年八月十四日、歳七十七を以て歿しました。

此の教材の原據となつてゐる駿臺雜話の内容は、同書の序文の中に、

むさしの國、大城の東、駿臺のもとに、草の庵むすひて住ける獨の翁有けり。そのかみ北國より爰に來て家居せしが、もとより深山木の花にあらはるべき材もなければ、其梢とする人もなくして、たゞ學の窓に文をひろげ、見ぬ世の人を友とし、老の至るをもわすれつゝ、きのふといひけふと暮して、はやはたとせあまりにおよべり。ちかきころより衰病日に加り、それに痠痺の疾ありて、起居も心に叶はねば、日夜衾枕をのみ親しみ、書籍にさへうとくなりたり。何をか世にあるおもひ出にせまし。爰に此翁に就ても學ぶ輩ありて、書を講し文を論じ、おのゝ虚にして往き、實にして歸らぬはなし。其外、花の晨月の夕には、かならず問來て、なにくれと世にあらゆる事とも語りつゞけつゝ、目をくらし僕を更れどもやむ事なし。むかしより良辰は失ひやすく、嘉會は得がたければ、いつも賓主ともに唐錦たゞまくをしくなん見えし。翁も客に對して清談する事をこのみて、身の煩はしさも心地よくおぼゆる儘に、いにしへ今の世にいひぬる難波の事よしあしとなく、本末懸けてその理を盡しけるが、われながらおかしとおもふひとふしもあれば、其席はてゝ、わが子弟に命して、やまと文字に寫し置けるに、日數を経ておぼえず巻をなせり。もとより有識のきは人の目をとゞむべきものにもあらねば、さしてをしむべきにはあらねども、古人の難助といへるにも類しぬべし。さすが反故となしてかいやり捨むも本意なければ、さて兒輩にあたへてよましめ

むとて、しばらくのこしおきけらし。

享保壬子のとし九月中旬、鳩巢の翁駿臺の草の庵にして筆をとる

とあるのを見ても、凡そ其の一般が想像されませう。教材の趣旨は原文の後半に、

『青木の武者振の見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事をいひ出で、名のり合ひてよろこびし、又伊勢が子の鎧の着初めに掃部を招きて、子のためにとて武功の物語りを望みし、いづれもさしたる事にてはなけれど、其の頃の士風、武をたしなみし事しられ侍る。只今人家に子をそだて候ふに、食の喰ひ初、袴の着初などとして祝ひ候へども、鎧の着初と申す事は、大祿の家は存せず、我等の如きの似しき武士の家には承らず候。是も人々武の心懸うすき故にて候。よりにて大小兩刀又は甲冑等のこしらへ華美を専らにし、たゞ武を道具と迄心得る體にて候。我朝は、武家の治世になりしより、五百年以來天下武をもて風をなし候故、外の事はしらす、武の一筋は人々常に忘れず、假初の一言にも臆したる事をばいはず。しばらく立つにも脇指をはなさず、文道より見候はば、かなくなに賤しき方に、あるべく候へども、是程に心懸けず候うては、武の一筋はとほり申さず候。』

云々』

とあるのがそれで、鎧の着初を背景にして、掃部と新兵衛が見事な武者振を紹介して、士道の一般を想像させようと云ふのであります。

『結城秀康越前に封ぜられし後、阿閉掃部とて武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へけり、云々』

結城秀康は徳川家康の第二子、秀忠の庶兄、天正二年四月三河に生まれました。故あつて家康子として養はず。本多重次代つて鞠育しましたが、四年兄信康の周旋に依つて父子の對面を行ひました。十二年豊臣秀吉の猶子となり、從四位下侍從に叙任し、羽柴三河守と稱し、河内の國に於て一萬石を領しました。十三年左少將に陞り、十六年左中將に移りました。十八年秀吉の命に依つて、結城晴朝の娘に配して、結城氏を冒し十萬一千石を食みました。慶長五年石田三成の兵を擧ぐるや、下野宇都宮に陣し、上杉景勝の東上を支へました。關ヶ原の戦後、功に依つて越前六十七萬石を賜ひ、福井城に居りました。此の教材にある物語ほ此の間に起きた話です。八年二月從三位參議に陞り、十年四月正三位中納言に進み、慶長十二年閏四月八日、年三十四を以て薨じました。

教材の主人公となつてゐる阿閉掃部の傳記は不明で、どんな經歷の人であつたか今想像することが出来難いのでありますが、掃部の父は阿閉淡路守と言ひ、明智光秀にくみしてゐたと云ふのですから、此の賤ヶ嶽の合戦の時には、掃部は柴田方にあつたものだと思像されまゝです。原文では鎧の着初が中心になつてゐて、當時の士風の頽廢してゐたのを憤慨したもので、併し教材では其の後半の掃部と新兵衛の武者振を文の中心に取つてゐます。

鎧の着初は古昔武家で男子が初めて甲冑を着用する儀式で、具足初めとも言ひます。文治四年七月十日源頼家が七歳で初めて此の儀を行つたと云ふのが一番最初です。この儀式は吉日を選んで行つたもので、當日には先づ八幡宮、摩利支天、氏神等を祭り、然る後鎧の着初を行ひました。甲冑を着せる人を鎧親といひ、武功の人を以て之に充てました。蓋し其の武功にあやからしめようと云ふのでありませう。別に二人の後見人があつてそれを佐けました。甲冑は唐櫃の上に飾り、南向又は東向としました。甲冑の前には具足の餅を供へ、其の前に瓶子と三つ盃を置き、盃の左右には銚子・提子を蝶形に包んで置きます。鎧着用の子は東向して座に着き、鎧親は進んで南向せしめて甲冑を着せます。着後牀几に敷革を敷いて、其の子をして張弓を弓枕に突いて、征矢を執り左の足で拍子を三つ踏ませ、南向して牀几に着か

せす。それから三獻を進め、三つ目の盃は鎧親にさし、鎧親はそれを呑んで盃を納めます。是は總べて出陣の儀式で、當時武家では最も目出度い祝の一つとしておりました。

「江州賤嶽の戦に、暮方に某一騎餘吳湖のわたりを引き候ひしに、敵と思ひて後より詞をかけし故、云々」

これからは掃部の物語で此の文の山です。引上げる掃部の後から詞をかけた新兵衛、馬の頭を立直して立向つた掃部、大敵を前にして悠々と槍先を洗つた新兵衛が不敵の態度、それを平然と眺めてゐた掃部が豪膽雅量、讀んでゐても體がひきしまるやうな氣がします。殊に最後の「もはや槍先も見えず候ふ。御残り多くは候へども、これまでにて候ふ。云々」のあたり、勝敗を度外に置いた古武士の面目が躍如としてゐます。

賤ヶ嶽は近江國伊香郡伊香具村大字大音の西方にある山で、北に余皇湖を控へ、南は琵琶湖に連り、恰も兩湖、隔障を爲すが如き地形です。天正十一年羽柴秀吉が柴田勝家を破つた古戰場として、其の名は天下に聞えてゐます。

余皇湖は近江國伊香郡余皇村にあつて、古書には伊香の小江とも書いてあります。琵琶湖の北方二十餘町に位し、兩者の間に賤ヶ嶽があります。東西九町、南北十七町、周圍一里二

十八町、湖の水は流れて余皇川となり、南流して琵琶湖に注いでゐます。流程約七里。

「其の頃、伊勢が許へ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其の日も來て勝手に居たりしが、此の物語を聞きて、勝手よりにじり出で、云々」

後半は兩勇士の再會で、此の文に一段の趣を添へてゐます。掃部が古い昔の思出を千萬無量の感で物語つてゐる祝の筈に、そばからにじり出た其の人は意外にも當の相手の新兵衛だつたのです。双方鎧の緘や馬の毛色を物語つてから、互ひに手を取合つて涙にくれたあたり、眞に涙ぐましいばかりの場面で、思はずホロリとさせられます。此の文はこゝらの情調を主としたもので、古武士の面目を紹介すると共に、國民的の士氣を鼓舞しようといふのであります。最後の「青木が武者振の見事なるはさる事にて、云々」は、此の一篇の趣旨で、筆者が特に此の話を引用した所以なのであります。

補充文には同じ駿臺雜話から、次の「手折し手にふく春風」の一篇を擧げておきませう。

手折し手にふく春風

日かず經て繼いで講會ありしに、講はて、翁「前日節義の事を語り候しが、跡にておもひ候へ

第十四課 阿閉掃部

ば、いまだ申のこして候。前日申しつる事ともに考へて見給へ。盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは。是又士の常なり、もし時のもやうにつきて覺悟を變し、世話にいふえりもとにつくやうにては、なにをもて士と申侍るべき、

水邊楊柳綠煙絲

立馬煩君折二枝

唯有三春風最相惜

慇懃更向手中吹

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり、此三四の句意婉にしておもしろく覺侍る、よりて其意を翁がよめる歌に、

なれてふく名残やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春風

楊柳の人ををられてはや木を離れたるとて、春風のそれをよそにしてふきなば、いかに情なかるべきを、なを其手折りし手をさりやうて、をしみかほに吹くこそ、いとやさしく覺え侍る、古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬにたとへつべく候。翁むかし源平盛衰記をよみて、源氏の士には渡部瀧口、平家の士には彌平兵衛宗清が事感ぜしが、又東鑑にて伊東九郎祐清（祐清事東鑑兩所に見へて、前には祐泰とす、今考るに伊藤九郎が兄河津三郎を祐泰といふ、九郎を祐泰といふは誤なり）が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半撰び置きしが、いまだ稿を脱せざる内に池魚の災にかゝり、其後ふたたび草を起す事もなく打過ぎし程に、今は其文をば跡もなく忘侍る。渡部義は、源三位入道頼政か所従の士には第一のものなり、然るに治承年中、頼政高倉宮をすゝめて兵を

起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘てやありけん、競にかくとしらせざりし程に、競ししばらく猶豫して家におりしを、平宗盛聞て、目ごろ競か魁偉なるを見て、己が所従にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば、請べきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に残りしとき、て、「六波羅に參れ」と人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我につかへば、入道、恩にはまさるべし」とて、小精毛といふ馬に具鞍おき乗かへの料とて、遠山といふ馬を引そへ、黒いとおどしよろひ冑まで皆具してたびけり。競かしこまり賜りて、ほくそ笑ひして罷歸りぬ。一族家人打よりて「入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取のこされしは、眞實に遺憾なり、大将のかへうちたへかたらひ給ふはいなみがたし。時の花をかざしにせよといふ事もあれば、たゞ此まゝにてあれかし」といふを、競「いやとよ、勇士の義さはあらず」とて、宗盛よりたびける鎧着て、小かすげにのり、郎等七騎打つれて、三井寺へとて打出しが、六波羅の門前を通りし時、馬にのりながら門の内へのぞきつ、高聲にいひいれけるは、「競こそ只今下し賜りし馬にのり、三井寺へ罷越候。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、此度死をともにいたすにて候。御門前をむなく打過んはほいなく候へば、御いとまを申候」とて、三井寺にいたり、頼政と一所になりしが、其後宇治橋の合戦に、いさぎよく討死してけり。彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼歩にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼、清盛に乞て死を

救ひけり。其時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落し時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛獨一門に叛て都にとゞまりける。其後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝、舊恩の謝せんために頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべきよしをいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざつれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、頼朝某に下れと候ば、定て昔のなごみを思ひいて、所領引出物などとして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候、今更源氏に詔ひて、其蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜こそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるまじく候。こゝにて思やり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越候て、頼朝某がことを尋られ候はゞ、折ふしいにはる事あるよしを仰せられて給り候へ」とて、鎌倉へは行かざりけり。其後西海へ下りけるにや、其終をしらず。伊藤祐清は、伊藤祐親が第二子なり、頼朝伊豆に流謫の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴し間に、祐親が女と通じて一男を産ます、祐親瓜期に至りて京師より歸りし後、是を聞て大に怒りつゝ、其男を殺しけり、頼朝をも害せんとするを、祐清かなしみ頼朝をふかく愛護し、ひそかにのがれざらしむ。其後、頼朝兵を起して伊豆より相模へ赴し時、祐親平家のみかたとして、大庭景親等と石橋山にいたりて頼朝を追襲けり。其後頼朝すでに東國を平定し、自から大兵を率ゐて駿河に至られし

時、祐親を生捕りて至りしを、其罪を決する迄祐親をば祐親が婿三浦義澄に預られ、祐清をめし出して、勳賞を行はれんとありしに、祐清たゞ「御恩にははやく殺され候へ。父囚はれ、其子勳賞せらるゝ法や候、もし我を殺し給はずは、平家に歸すべし」といふに、さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなしとて、ゆるして放ちやりけり、祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戦に、つゝに討死をとげり。此三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり。その清風高義源平の間に求るに、其類すくなくおぼえ侍る。さて元弘建武の亂に至て、天下板蕩の間死難死節の士限なく相見へ候中に、翁かねて安藤左衛門聖秀か事を感じて落涙しける。聖秀は北條高時が臣なり。新田義貞の妻の爲には伯父なりしかば、鎌倉すでに陥る時、彼女房義貞の文に我文を添へて、ひそかに聖秀かもとへつかはしける。聖秀は高時が將として新田の兵と戦ひしが、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負て引きかへしけるが、高時すでに屋形に火をかけて、東勝寺へ落ちけるといへば、「御屋形の焼跡には、討死のもの多く見ゆるか」と問ひけるに、「一人も見えず」といふを聞いて、「口惜き事かな。いざ殿ばらとて死なん命を、御やかたの跡にて心静に自害せん」とて、百餘騎を相從へて、やかたのあとへ赴きしが、今朝まで甕をならべて、さしも奇麗なりし大夏高牆忽に灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへず、涙をさへ惘然として立たる所へ、彼文をもて來りぬ。是を披き見れば「鎌倉の有さま、今はさてこそ承り候へ。いかにもしてこなたへ御出候へ。」

身にかへても申し宥むへし」とあり、聖秀是を見て、大きに色を損して申しけるは、「われ今まで主恩に浴して人にしらるゝ身が、今事の急なるに臨みて、降人になりて出でなば、豈耻をしりたる者といはんや。されば女性心にて、たとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義をしられば、さる事や有べきと制せらるべし、又義貞こなたの許否を試んむためにいひこさるゝとも、北の方は、我かたざまの名を失はしと思はれば、かたく是を拒るべし、只似たるを友とするうたてさよ」と一度はうらみ一度は怒り、彼使の見る前にて、其文を刀に拳りかへて、腹かき切て死にける。嗚呼聖秀いかなる人ぞや。義氣の勇壯志操の潔白、是に過たる事やあるべき。さて近代にては、武田勝頼の臣、小宮山内膳が節義こそ、最感嘆するに餘りあれ、内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、内膳人と争訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言をもちひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくしてながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を経けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすて、温井常陸助を先とし、纔四十二人の兵と天目山中に奔るときこへしかば、内膳身をもて急に赴しが、道にて追付きけり。さきの内膳と争ひし者並に讒せし者を問けるに、いづれもとくに逃去りぬといへば、内膳慷慨としてかたへの人にひけるは「君我をもちひずして棄給ふに、今出て其難に死せば、君の明を損するに似たり、又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損するとも、臣の義をば傷らし」とて、四十二人同じく國難に殉ひけり。

此難に甲州の士、皆勝頼を叛きて逃去りしに、四十二人はかり、傾覆流離の間につきまといひて、いさゝか二心なく、國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中に内膳は讒をもて冤枉にあひしをも怨す、従者の列にもあらぬ、蟄居の身として外より來て死に赴し事、其忠烈はるかに温井等が上にあるべし。武田滅亡の後、東照宮内膳か忠義をふかく感じ給ひ、其子なくして祭祀の絶ゆるを哀み給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出されしが、其後小田原陣の前、武職の人をきはめられしに、又七郎をもて御長柄鎗奉行に仰付けられける。其時内膳が勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおほしめす。又七郎いまだ弱年なれども、兄内膳が忠義を感じ思召によりて、重き職を命ぜらるゝよし上意なんありけるとぞ。誠に死後のめんぼく忠義の驗と申すべし。

第十五課 租 税

大體舊讀本の教材と同一ですが、前のは文語で頗る固苦しい文體でしたが、今度は平易な口語に書直して餘程新味を添へてゐます。文段は九段に分れてゐて、第一段は租税の意義、第二段は地方自治團體と租税、第三段は租税の沿革、第四段は租税の種類、第五段は國税、

第六段は稅率、第七段は國の膨脹と増稅の必要、第八段は稅率變改の手續、第九段は納稅の心得とつてゐます。教材取扱者の參考として、先づ租稅に關する用語に就いて一通りの説明を加へて置きませう。

財政學上の「租稅の主體」とは法律上租稅を納付すべき人を意味して居ます。だから主體は必ずしも實に租稅を負擔するものとは云へません。例へば酒稅は營業者が納付するに關らず、消費者が實際之を負擔するが如き是れです。「租稅の客體」とは課稅標準であつて、例へば地租にあつては地價が客體となり、所得稅にありては所得が客體となるが如き是れです。「稅源」とは客體或は課稅標準と異なり、租稅の依つて支拂はるゝ財源を意味してゐます。例へば所得稅の稅源は客體と同様に所得ではありませんが、地租の場合には收穫が稅源となるが如きです。又「租稅の單位」とは課稅標準即ち物體の起點として稅率の適用せられるものを意味し、「稅率」とは稅額を算出する歩合であつて、租稅の物體に稅率を乗すれば即ち稅額を得るのであります。最後に「稅步」とは稅率と同じく稅額を算出する手段であります。歩合ではなくて直に金額を以て言ひ現され、單位毎に何程と定められてゐるのであります。例へば營業稅に於て資本金額の一萬分の五と言へば是は稅率ですが、從業者一人毎に一圓と言

へば是は稅步なのであります。

次に租稅の原則であります。租稅の原則はアダムス、スミスが初めて之を唱道し、爾後學者が漸次に之を補足したものであります。アダムス、スミスは之を四つに分つてゐます。即ち、(一)公平の原則、(二)確實の原則、(三)便利の原則、(四)經費少額の原則是れです。ところがドイツの大家ワグネルは財政上、國民經濟上、公正上、施行上の四大別として、各別毎に二三の原則を言明してゐます。簡明に此の原則に就て説明しますと、財政上の原則は分つて二つとします。即ち第一租稅收入の十分なること、第二租稅收入の發展力を有すべきこと是れです。そこで或る租稅が其の收入少額に止まるか、又將來増收の込なき場合は良稅とは言へません。次に國民經濟上の原則も分つて二つとします。第一は稅源との關係を適當ならしむること、第二は租稅の轉嫁に注意すべきこと是れです。蓋し租稅は人民各自の收入から納付せられ、又通常毎年繰返さるゝものですから、稅源に注意すべきは勿論、租稅は納付者必ずしも之を負擔せず、往々他人に轉嫁せられ、或は不公平なる結果を生じ、或は公平なる結果を生ずるもの故、此の點に注意を要します。又公正上の原則は第一課稅の一般に及ぶこと、第二に課稅の公平なるべきこと是れです。課稅の公平とは畢竟各人の給布能力

に比例 なければならぬといふことで、累進率を適用するが如きも其の一方法であります。最後に實施上の原則としては、第一に課税の明確なるべきこと、第二は納税の便利なること、第三は徴税費の成べく少なかるべきことは是れです。而して是等の原則を應用するに當つて、之を極度に及ぼす時は原則は相互に衝突すべき結果を生ずべきが故に、斯の如きは之を避け各個の原則は適當の度合に於て融和せしむる必要があるのであります。

以上述ぶるが如き經濟學上に於ける一通りの觀念は、此の教材を取扱ふ教師としては是非必要なことだと思ひます。以下各段に就いて取扱上必要な注意を附説することに致しませう。

「國民の福利を増進し、安寧秩序を保持するため、國家として爲すべき事業は甚だ多い、云々、

第一段は租税の意義に就いて述べ、第二段は地方自治團體に於ける租税に就いて述べてるます。

租税の意義を經濟學上から嚴密に定義を下しましたら、「政治團體が國內に於て徴收する所の一般的強制的收入」とでも云ひませうか。茲に政治團體と云ふのは國家及び地方自治團體の謂でありまして、前者の場合には之を國税と言ひ、後者の場合には之を地方税と言ひます。

さうして地方税は更に分れて府縣税市町村税となります。次に租税は國內に於て徴收せられると云ふ意義ですが、國內と言ふのは國民たることを意味して居りません。國內に居住してゐる者は其の國籍の自國なると他國なるとを問ひません。蓋し租税は直接に主權の行動に係るものでありまして、國家は國內に於て當然其の權力を行使するを得るものであります。但し國力弱き、例へば支那の如き國にあつては、外國人に特に例外を認めることもあります。此の場合にはきつと條約文中に制限規定なるものが存在してゐる筈であります。帝國憲法第一條に「日本臣民は法律の定むるところに従ひ納税の義務を有す。」と規定してありますが、これは外國人に此の義務を認めないと云ふのではありません。憲法は「臣民の權利義務」の題下に特に帝國臣民に就いて規定を成したに過ぎないからであります。それから租税は強制的收入であると云ふことですが、是は營業收入又は官有財産收入と異なる點でありまして、租税が契約的收入でないことと云ふことを意味して居るのであります。次に又租税は一般收入であると云ふことです。茲に一般的と云ふのは、必ずしも現實に國民の總べてが納税者であることと云ふ意味ではありませんが、其の性質上法律の規定するところに該當するものは、其の何人たるを論ぜず、納税すべき義務あることを意味してゐます。是は納税が手数料と異なる點

であつて、手数料は強制的収入ではありませんが、一般的収入ではありません。最後に租税は金銭的収入であると云ふことです。是は現今世界の多くの國々で一般に行はれてゐる所でありますが、或は其の代用として未開の地方などでは、物納制を取つてゐる所もない はありません。

『昔は東西何れの國でも、租税として、現品を徴収したり、勞力を賦課したりして、つたが云々』

此の段は租税の沿革に就いて述べてゐます。租庸調は我國の上代に於ける制度で、「租」は田地に課した税で即ち田租であります。崇神垂仁の朝には既に貢租のことがあつたと云ふことは、歴史にも見えてゐますが其の制は詳かではありません。降つて孝徳天皇の大化二年正月に詔して田租の法を改め、段の租二束二把、町の租稻二十二束とし、白雉三年に一度大化以前の法に復し、文武天皇の大寶に至つて亦大化の制に復し、慶雲三年の九月に制地は大寶の制に従ひ、租税を改め一段毎に七把を減じました。庸は王朝時代の正丁に課し、夫役の代りとして出させた布米等の稱です。雄略の朝秦氏庸絹練を奉獻し、明年庸調獻せしめたことが書紀に見えてゐますが、其の制は詳ではありません。孝徳天皇の大化二年に至つて、

戸別に庸を徴し一戸に庸布一丈二尺、庸米五斗と定められました。大寶令の制では人毎に之を課しました。正丁には歳役一年に十日、若し事故があつて身役に服する能はざる者は即ち庸を收む。多くは布米であります。郷土産物の物、即ち絹 綿、絲等を納めることが出来ました。例へば布ならば二丈六尺、即ち一日に二尺六寸の割合です。其の他も之に準じてゐました。若し又正役の外に都合があつて留まり服する者があつて、三十日に満つる時は其の年の租調を免除することになつてゐました。但し正役と通計して四十日以上に達すれば使ふことが出来ないことになつてゐました。次丁は二人を以て正丁一人に準じました。即ち次丁一人、歳役五日、割合となつてゐました。「調」は諸國の土産を定規に依つて政府に納めさせたものを言ひます。「調」は「みつぎ」と訓します。「み」は御、「つぎ」は供給の意、朝廷の供御及び國家の需要の物を人民から、繼續して奉る義であります。歴史に依りますと崇神天皇の十二年九月に、初めて人民と稱して調役を課し、男に弓弭の調、女に手末の調を課したのが一番最初です。弓弭の調は男子が山野に獵して得たる獸の皮肉の類で、手末の調は、子の手に依つて作られた絹布の類を言つてゐました。孝徳天皇の大化二年舊賦役を罷つて田の調を行ひました。絹、綿、絲、綿は郷土の産出により、田一町に絹一丈、四丁に匹、綿は二丈、